
俺は神様代行人

セウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は神様代行人

【Nコード】

N4620R

【作者名】

セウル

【あらすじ】

「神様代行になってねよろしく」

主人公の里倉誠は

さとくらまこと

幼馴染の蹴りで、死ぬように自称神様に悪戯され死んでしまう。

さらに、「神様が左遷されたからこの世界管理よろしく」と

理不尽にも神様の代行をさせられる事に。

それ以降、

恋愛？だったり、シリアス？だったり、ファンタジー？だったりとか々なことに巻き込まれていく

しっかりと神様代行の仕事をこなせるのでしょうか。

プロローグ（前書き）

とりあえず、文才のない作者の作品。

オリジナルのほずですが、どこかに似た作品がある場合、連絡下さい。

プロローグ

「くそっ！何なんだよ」

学校の教室に、青年の声が響く。

意味が解らなかった……

「こうなんだよ？」

目の前の少女は、笑顔で言う。

「何がどうしてこうなったんだよ」

目の前に並ぶ、意味の不明な文字列。

周りのやつらは楽しそうにそれを見てやがる。

異常だ！こんなのあるえない。ありえねえ！

「だーから。ここのxの値をね？ yの値にってちょっと！ 聞いてる？！」

「へいへい……俺にとって数学なんてムー大陸見つけるレベルの話なんですよ」

「それって完全に諦めてるじゃない」

「肯定だ」

「ふざけないの！」

「ぐふ……」

強力な一撃が、俺の腹にめり込む。

意識が一瞬で消し飛び、気が付くと……。

な……に？

教室が消え、周りは花畑になっていた。

憎たらしい文字列とかが消えた？！

花畑？こ、これが……ムー大陸？！

「ちげえよ。馬鹿」

「は？」

俺のムー大陸にけちつけたのはなんともいえないコスパ――

「コスパじゃねえよ」

「心に割り込まないで下さい」

白い薄いワンピースに身を包み、白い長ひげと長白髪。白い翼に薄い黄色のリング。

「えっと……ひとつk――」

「駄目」

「いやちょ――」

「駄目」

「あの――」

「駄目」

「聞かない」

「うん」

白い人がにやつと笑う。

くっそー！

うぜええ！ にやつとか笑ってやがる！

勝ち誇ってやがるこん畜生！

「まあ、いいや。手短に言うね？」

「ああ」

「君には死んでもらった」

「へえ」

「驚けよ」

白い人が睨んで、赤いボタンを押すと、少年の目の前が爆発ししりもちをつく

「うわぁ！」

「よし」

「おい！おかしいだろ！」

少年が怒鳴るものの、綺麗にスルーし続ける。

「それでなんだけど」

「まず待て。これは夢だ。そうだろう？」

「ん？ なら、信じられるように、お前に神の奥義を披露しよう」
白い人がなにやら複雑な動きをしたと思った瞬間、目の前に現れ、また……

腹部に強烈な一撃が打ち込まれた。

「な……んだと?!」

痛かった。けれど、それだけ。

目の前の人が消えるわけでも、花が散るわけでもなかった。

「夢じゃない……だと」

「うん。そう」

「死因は？」

「幼馴染による腹部への蹴りで内臓がつぶれた」

「すげえな、おい」

幼馴染の蹴りで死ぬって情けないな……。

「ああ、幼馴染の本来のけりは痛くないよ？」

「は？」

「あれ、俺が力加えたから君死んだんだよ」
「なにしてくれてんの?!」
「はは。言っただじゃん。死んで貰ったって」
「何でだよ! このままじゃアイツが、殺人者に――」
「いいんじゃない?」
「ふざけんな! 俺が死ぬのはいいけど、アイツは――」
「大切? 俺は知ったことじゃないね」

くそ……

「ふざけんな!」

少年が、白い人に殴りかかる。

しかし、全て行動が読まれているかのように簡単に避けられていた。

ふざけんじゃないやねえ!!!

「当たらないよ? 俺は神だもん」

どうせ当たらないだろう拳を力いっぱい突き出す。

「行動をよめ――ぐっ?!」

あた……った?

白い人が頬を押さえて、倒れこむ。

「はあはあはあ……どうだ!」
「なるほど……」

にやつと白い人が笑って立ち上がる。

「く、くるのか?!」

「ああ、あのさ」

「なんだよ」

「君に力貸してあげる」

「はあ?」

藪から棒に何を言いやがる。
叩いた石橋でも崩れたか？

「いやね？君たちの世界を管理する神様がね？ 汚職問題で左遷されちゃって……」

ええええ……。

ん？まさか？

「君が神様代行になるんだ」

「はあ？！」

「んじゃ、よろしく」

「え？は？！」

「神様のお供は人間の中から選べよ。あつ。自分の正体は秘密にな」

「ちよっ……うわぁ！」

足元が崩れ、暗闇に放り込まれたかと思うと、硬い台の上にいた。
狭い……くそつ。

何の臭いだ？
ん？

「こんな、若いのに」

「ごめんね？ごめん。私が……」

え？まさか？

「お悔やみ申し上げます」

「増山先生。本日は——」

「いえ。里倉くんのお葬式ですから」

は？え？マジで？

って事は。これ棺桶？ざけんな！

「それでは、お経を読ませていただきます」
なんだと？

ええい、かくなる上は！

上のふたらしきものに触れる。

これを押し上げればいいのか？

重そうだな……

「なん my——」

えい！

力を軽く入れた瞬間、ふたが天井に突き刺さった。
急に入った光に視界を奪われながらも起き上がる。

「「「「「「「え?!」「」「」「」」」」」」

「おいおい。俺。生きてるんですけど?」
冗談ばく言ってみる。

周りの人の顔が、だんだんと青ざめていく。

「きゃああああああ!」

大混乱。

予想はしていたものの、一名残しみんな逃げていった。

「本物？生きてる？本当に?」

這うように、少女が近づく。

俺は微笑んで、

「天国から強制送還されました」

と言った。

「誠くん！」

「ぐえ?!まゆ、くるし——」

黒い長髪の幼馴染まゆが、飛びつく。

あつやべえ。

うまい具合にキマって——

「ただいま」

気づくと花畑。

「おいまでコラ! かえってきてんじゃねえよ!」

「まゆの抱きつきがうまい具合に決まったんだよ!」

「かえれ!」

「どうやって!」

「戻りたいと念じろ!」

えっと——

少年が消える。

「ったく。全知全能なる神様をまとめるのってめんどくさいんだけど」

白い人は1人呟いた。

第1話 『神様代行人になった翌日』（前書き）

オリジナル制作の小説。

一言断ると、どこかに似た作品またはキャラがいるかもしれませんが、その場合は私に連絡を下さい。

第1話 『神様代行人になった翌日』

> i 2 0 9 4 0 — 2 7 4 7 <

俺の葬式から一夜明け、いつも通りの朝がやって来た。

「おはよ〜」

「誠！遅刻するわよ?!」

「ほ〜い」

いたって普通。そう普通。

遅刻ギリギリに起きて、パンを加えて登校し、
曲がり角で――。

「危ない！」

え？

車のクラクション。

普通……女の子じゃ。

車に撥ね飛ばされ、電柱にぶつかり、民家の外壁にぶつかる。

あゝ痛い痛い。

何事も無かったかのごとく立ち上がると、轢いた人も、目撃した人も真っ青だった。

「飛び出してすいません。遅刻しそうだったので。それじゃ。」

俺は運転手に一礼し、走り去る。

「う、嘘だろ？」

マジです。

「うっはぁ！遅刻した！」

「里倉くん！遅刻です。」

「いえ！車に轢かれたんです！だから……」

「言い訳は結構です。」

「くそう。マジなのに。」

実は、昨日の騒動は無かったことになっている。

というのも、ムー大陸にいる白い人（自称神様）が、記憶消しとい
たらしい。

つまらないと反論したら、天罰とかで老衰以外で死ねない体にされ
た。

今日の交通事故の生存理由もこれに当たる。

俺は、実は人間じゃない。

いや、人間なんだが、神様代行とかいう、どこかのアニメ的展開な
のである。

しかし、俺に敵はいない。

だって俺神様だし。

（調子に乗るな！）

（なんだよ！）

（神権剥奪すんぞゴラァ！）

（お前の推薦だろうが！）

（知るかボケエ）

つとこのように念話ができる。

俺は、この世界の管理者らしく。

誰を生かし、誰を殺すか。

選択権が与えられている。

誰が宝くじを当て、誰がサイフを落とし、

誰が何を食べるかなど……………

全てが俺の支配下にある。

ただ、前回のこの世界の神様は、
神権乱用で左遷されたらしい。
そういえば。

「いいか？自分のために使うな。誰かを助ける時、誰かを殺さなければいけない」

「自分の為に使うなって言うのは解る。けど――」

「輪廻の世界。」

「ん？冥土か？」

「あんなコスプレと一緒にするなあ！」

「してねえええええ！」

はあ………。

「で？」

「誰かが死ぬから、誰かが生まれることが出来る。

世界は私達が管理している。しかし、各々運命というものが授けられている。

例えば、Aくんが死ぬ。Bくんが助かる。

そしてAくんの魂はCくんとなるのだ。」

「へえ………」

「だが、Aくんを助け、Bくんをたすけ。そうすると――

――

「Cくんが生まれない？」

「そうだ。」

そういうことか………。

A B Cの死・生・誕。

それが、輪廻。

「ちょっと違うけど、そんな感じ。」

ってなことを言ってた。

俺は人間として換算されないから、魂の契約はなされていないけど………

周りを見渡す。

同じクラスの生徒達が、勉強していた。

こいつらは………

ってか、前の神様の乱用馬鹿だったぞ。

「んで？前回の神様の左遷理由は？」

「東京タワーが飽きたからって、自分用にスカイツリー建てた。」

「なんですと?!」

あのツリー神様が指示したのかよ………。

しかもそれだけで左遷。

うはっ、厳しい世界だ。

そういえば、俺のパートナー決めるんだっとな。

(しかし、俺は神様ですって信じてもらえる訳が無い。

つまり、告白。俺と付き合ってくださいが必要だぞ)

そうそう………

(っておい！それって)

(ああ。夫婦というやつだ)

「里倉くん！」

(それってつまり?)

(相手を殺すのだ)

(なんだと?!)

(まあ頑張れ)

いやいや……無理だ。

告白くらいなら我慢しよう。しかし!

殺すのは嫌だ。

それだけは……………

「誠！」

「え？」

「号令」

「あつ…………起立。気を付け、礼」

幼馴染のまゆに言われ、はっと気づく。

みんなの若干笑われ、先生のレイピアなみの鋭い視線に刺されながら号令をかけ、

ため息をついて席に座る。

「どうかしたの？」

「いや。なんでもない」

「ちよつと暗いよ？」

「何でもないんだ！ほつといてくれ！」

「ご、ごめん。」

……………なにやってんだ。

まゆは心配してくれただけ。

こんな些細なことで怒鳴るんじゃないねえ……………馬鹿野郎。

その情景を白い人は上から見ていた。

「さあて……………どうするんだ？誠。君はパートナーをつけるまで力は使えない。」

そして今……………君は一つのヒモを引っ張った。運命。

君の魂は縛られていなくとも、君の魂が触れることで、運命が発動することは……………無いわけじゃあ無いんだがな」

白い人は楽しそうに笑いながら、リングをかじっていた。

第2話 『偽り』

「どうすればいいんだよ……」

1人屋上で座り込み、昼食のパンをかじって呟く。

「どうしたんだ？お前」

ちっ……。

1人だけの空間に割り込んできた非常識な男子は
誠とまゆの幼馴染である、のむらこしいち野村幸一

「邪魔……するんじゃないよ」

「ははっ。邪魔？俺が？」

「ああ。お前が。」

「ふうん。一発殴らせろ。」

「あ？なに、言っ——ッ？！」

立ち上がるうとした誠を幸一が力いっぱい殴る。

「何しやがる！」

「殴らせて頂いた。」

倒れ込んでいる誠を幸一が睨む。

「なんだよ。」

聞く。

なんとなく解る。

「お前のこと、ここから突き落としても良いか？」

「止めて欲しいんだが。」

普段なら、「冗談だ」とかで終われる会話……。

けれど——

「なんで、まゆを怒鳴った？」

「神経質になってただけだ」

「面白い理由だ」

幸一が小さく笑う。

「まゆは――」

「解ってる。俺はまゆから手を引くよ。」

「なんで？」

「嬉しくなさそうだな。」

「俺は聞いているんだよ」

……。

俺は神様だから。

なんて、言える訳が無い。

「俺にまゆは合わない。」

「本気か？」

「なんだよ。何が言いたい」

幸一が、一息入れる。

「……まゆを俺は好きだ。」

「知ってる。」

「お前も好きなんだろ？」

「だったら？」

幸一が誠の胸倉を掴む。

「けどさ、まゆはお前が好きなんだよ！」

「は？」

「アイツはお前が好きなんだよ！！」

「何言ってる――」

そんな訳……ない。

あいつはただ、おせっかいなだけで、幼馴染だからって。

俺が勝手に――

けど……

「はははははは。」

「な、何が可笑しい?!」

「俺は別に好きじゃねえよ」

「は?」

「俺はあんなお節介な馬鹿は嫌いだね」

「てめえ!」

力いっぱい、誠を殴りつける。

「ははっ。殴りたければ、殴れば良いじゃねえか」

誠が笑う。

「お前が殴るのは、まゆに振られ、そのまゆを俺が振ったから。ただの嫉妬。だせえな!」

「てめえ!」

「殴れ! 殴ればいい! お前の拳なんて痛くも痒くもねえんだよ!」

「……もういい。」

「あ?」

「お前には、落胆させられよ。」

お前になら、まゆは任せたいと思った。

アイツが選んだお前だから。……悪かったな。

嫌いなんだろう? なら。もう二度と、まゆにも俺にも近づくな」

「っ——。」

幸一はそう言い残し、屋上から屋内へ戻っていく。

「くそっ……」。

なんで、何で俺を選んだんだよ!

なあ、神様!

なんで、なんで俺が神様なんだよ!

くそっくそっ……」

床を何度か殴りつけ、座り込む。

授業開始のチャイムが鳴り響く。
痛い——いてえよ。

体には、何の痛みも無い。
殴られて、痛くは無かった。

けれど、

心は痛かった。

幸一を、怒らせたから？

違う……

どんな形であれ、幼馴染を騙していることが……
嫌だった。

「俺だって……俺だって！」
畜生！

（で？どうするんだ？）

（……誰も選ばない）

（は？）

（俺は、このまま消える）

（ふざけてるのか？）

（真面目だ）

（馬鹿言うんじゃない！それをしないということは、
その世界から存在が消えるんだぞ？死ぬなんてことじゃなく……）
（良いじゃんか。そうすれば、まゆも幸一を選ぶだろ）

軽く微笑む。

存在が消える？良いじゃんか。

まゆもその方が……

あれ？

「なんで……」

くそっ……情けない。

袖で頬を撫でる。

「なんで、泣いてるんだ？俺は自分の意思で消える。それだけだ。」

神の意向で勝手に神にされた。

それをかき消せるんだから、良いじゃんか。」

授業……いいや。

でなくても、どうせ存在が消えるんだから。

「消えるって、どういう事？」

え？

いるはずの無い。本来なら授業中。

なのに――

「まゆ？」

彼女が、屋上と室内の出入り口から飛び出した。

第3話 『ラストチャンス』（前書き）

オリジナル作品です。

コメディーとか書いてますが、
多分7割コメディー以外です。

第3話 『ラストチャンス』

「何してんだ？」

「誠！」

「……だよな。」

「誠、消えるって？」

「話しても？」

「勝手にしろ」

「そんなこと言ったか？」

軽く冗談染みた笑みを浮かべる。
けれど、

「とぼけないでよ！聞こえた！聞いた！

神の意向？神にされた？存在が消える？」

「あゝえつとだな……小説の台詞なんだ。」

「え？」

「おい！」

やっぱり、いえない。

「ちよつとした小説書いてるんだよ。」

それでさ、台詞カッコイイの無いかなって。
たまに呟くんだよ」

苦しい嘘。でも……

「そう……なんだ。」

信じてくれる。

「そうなんだよ。」

優しく、微笑む。

俺たちは互いに嘘は付かない。
どんな些細なことでも。

そういう約束だった。
でも、俺は。

「お前は？何してんだよ」

「私は貴方がいないから探してたのよ。」

「はは。悪いな。」

「そう思うなら、さつさと来る！」

ぷくつと頬を膨らませて優しく怒る。

こんな、まゆももう見られない。

——なら。

「まゆ。」

「なに？」

「授業……サボろうぜ」

「は？何言ってるのよ——」

「残りの授業、どうせ自習じゃんか」

「けど……」

まゆは真面目だ。

だからこそ、俺を探しにきた。

けど。

「——いいよ。」

「え？」

「何でサボるのか、後学の為に」

「良い理由だ。んじゃ、抜け出そうぜ！」

「うん。」

まゆの手を引いて、学校を飛び出す。

「責任……取って楽しませてよね」

「へいへい。」

どこ行こうか？……そうだな。

「ゲーセン行くか。」

「お任せ。」

「いくぞ。」

サボりの定番ともいえるゲームセンターへ二人で向かう。

「わぁ・・・これが。」

え？

まゆのこの反応――

あつそういえば・・・。

「お前、ゲーセン初めてだっけ？」

「えへへ。実は。」

微笑む、まゆ。

その輝きに視線を逸らす。

「んじゃ、見てろ！」

200円を投入する。

「あの熊が欲しい！」

熊の少し大きめのぬいぐるみをまゆが指差す。

よし――

「とつてやるぜ！」

自称クレーン名人は伊達じゃなく、

一回でぬいぐるみを落とす。

「わぁ！凄い」

「へっ。余裕だぜ」

「ありがとつ。大事にするね！」

まゆの喜ぶ姿を遠い目で見つめる。

この思い出も。残らない。

俺がいた証拠。

今日一日が、俺の生存限界。

なら。

「——まゆ。」

「なあに？」

「俺の家、来るか？」

中学生になってから、まゆを部屋には入れていない。

入れるのが、恥ずかしくて……

前はなんとも無かったことも、成長につれて感じるものがある。
でも、今日で終わりなら。

「いいの？」

「ああ。」

「行く！」

「ためらいねえな。」

苦笑する——。

「本当……久しぶりだね」

誠のベッドにまゆが飛び込む。

「自由だなおい。」

「いいじゃない。」

「まあな。」

「エッチな本は？」

「は？」

「冗談よ」

ベッドでゴロゴロする、まゆ。

懐かしくて、小さい頃を思い出す……

互いに楽しくて、自由で……

俺は。

「誠……？」

気づくと、まゆが顔を覗いていた。

「な、なんだよ。」

「なんで……泣いているの？」
その声が、あまりにも、優しくて。

頬に触れてくる手が、暖かくて――

「まゆ。」

「なに？」

「もう……帰ってくれないか？」

「え？」

「もう夕方だし、帰れよ」

少しだけ強く言った。

そうすれば、帰ってくれるはずだったから。

「……嫌だ。」

「は？」

「誠が泣くなんて――」

「それを見て欲しくないからさ。」

「けど。」

「まゆ、頼む。」

「……うん。」

渋々、まゆが頷く。

玄関までまゆを送る。

「じゃあ、明日ね？」

微笑んでまゆが言う。

明日……か。

「ああ。明日な。」

玄関のドアを開けていく彼女を見送っていく。
扉がしまった後も、誠は暫く佇んでいた。

言えなかった。

（馬鹿だな）

（何とでも言え）

自分の部屋に戻って電気をつけずに布団に潜る。

（寝るのか？）

（・・・ねねえよ）

天界の白い人との念話。

こんな非科学ともさようなら。

せいせいする。

（おい。）

（なんだよ。）

（暇なら、出かけないか？）

（は？）

意味が解らない。

何で俺が・・・

（お前を通して世界を見れるんだ。

デパートとか言うところを見せてくれ）

・・・まあいいか。

（別にいいぜ。）

制服からさっさと着替えてデパートへと向かう。

（んで？）

（そうだな、2階が良いぞ。）

2階・・・？

・・・？！

（待て！婦人衣服って）

（もちろん冗談だ。地下に行こうぜ）

（ったく。）

（・・・誠。）

（何だよ？）

地下に降りた時に白い人が、いつもとは違う口調で名前を呼ぶ。

（後悔だけは、するんじゃないぞ？）

（は？）

それ以降、念話は通らなかった。

その時だった――

「誠………？」

え？

さつき別れたばかりの少女………まゆが目の前にいた。

「偶然だね………」

「だな。」

「図られた！畜生め！」

「あの、さ」

「なに？」

「一緒に帰らない？」

デパートから家まで数十分の距離………

それを、彼女は頬を軽く赤く染め、帰ろうと誘う。

………

「ん。いいぜ。」

「じゃっ、帰ろっ？」

まゆに腕を引かれて歩き出す。

はたからみたら、恋人同士なんだろうか？

ちよつと………恥ずかしい。

「ねえ。」

「ん？」

信号で立ち止まった時、まゆがいつになく真剣な表情で切り出す。

「何を？何を隠しているの？」

「え？」

「ごまかさないですよ。ね？教えて？」

生唾を飲む。

彼女が初めて。疑った。

疑うことをしたことのない少女が……。
それが押し止めていた言葉を、引っ張り出す。

これが、ラストチャンスだ。

深呼吸をする。

「実は――」

第3話 『ラストチャンス』（後書き）

彼は全てを伝えるチャンスを手に入れた。
どうするかはかれ次第・・・。

読んでくださり光栄です。
感想等、お待ちしております。

第4話 『最後に．．．．．』 (前書き)

オリジナル作品です。

コメディーとか書いてますが、
多分7割コメディー以外です。

第4話 『最後に……』

「俺さ……」

彼女の目を、見つめる。

「神様なんだよ」

「え？」

「まあ、神様って言っても代行人ってやつでさ。軽く苦笑してみる。」

どうせ信じてない。

こんな馬鹿げたことを誰が信じる？信じるわけが――

「それが、本当？」

「は？」

「神様代行人かあ、面白そう」

「何言って――」

なんで？なぜ？

なぜ？信じる？

馬鹿みたいなことじゃないか……
神様だぞ？

ただの。ただの、電波じゃんかよ。

それでいいじゃんか……

「不思議？」

「は？」

「貴方、不思議そうな顔してる。何で信じるか？」

そんなの、簡単だよ」

まゆが微笑む。

「貴方を私は信じているから。」

それが、嘘ではないと、貴方の目が言っているから。

だから、信じる。」

「まゆ・・・・・・・・」

「で？代行人って何するの？」

笑顔で、まゆが聞く。

これは言っているのだろうか・・・・・・・・..
いつてはいけない気がする。けれど。

「まゆ・・・・・・・・」

「なあに？」

「落ち着いて聞けよ？」

「何？犯罪紛いの事なの？」

無邪気に笑う少女が、目の前にいる。

きつと、これを言ってしまったら・・・・・・・・

信じるのだろうか？

信じて欲しい。

夕日が傾き始めていた・・・・・・・・

信号が青になり、渡る。

同時に、言葉を準備する。

「話す場所。変えたいんだけど。」

そつと切り出す。

「んゝ。じゃあ、私の部屋においでよ」

「は?!」

「誠の部屋行つたし。次はさ？」

「・・・そうだな。お前が言うなら。」

二人で、まゆの家へ向かう。

当初の目的は一緒に帰ること。

「ここに来るのも久しぶりだな。」

まゆの部屋に入って、周りを見渡す。

「あんまり見ないでよ。」

ちよつとだけ頬を染め、まゆが呟く。

「そうだな……で。」

切り替えるために使った「で」。

その一言で、空気が変わる。

「うん。」

彼女はいまだに空気に気づかず、無邪気な笑顔で頷いて。

「実は——」

言葉が詰まる。

「？」

「実は、実はさ？俺——」

言えよ。言え！

コレが最後なんだ！

もう日は沈んだ。

じきに消える。

あれは——

ゲーセンでとったぬいぐるみ……。

その熊が、誠を見つめていた。

——よし。

覚悟を決める。深呼吸一回。準備良し。

「まゆ。あのさ……」

「なに？」

「俺さ？実はもうすぐ、存在が消えるんだ。生きていた証拠も全て・……」

「え？」

「今日一日が俺の生きていられる期限なんだ。」

冗談ばく、笑わない。

真剣な目で、まゆを見つめる。

「え？あの。それって——」

「本当だ。嘘じゃない。」

「と、止める方法は？！」

「無い。」

ぴしゃりと言う。

本当はある……でも。

それは。

誰かを殺すことになる。人として。

だから、そんなことは……

「なんで？なんで、消えなくちゃいけないの？」

「それは——」

「何かしたの？何にもしてないでしょ？！ねえ！」

あまりにも必死で……

俺はまた、嘘をついた。

真実の嘘を。

「冗談だよ」

「へ？」

「消えるんじゃないでさ。俺は。」

言ってしまおう。

言って、夜の闇に溶け込んでしまおう。

そうすれば。俺は消えるから。

真実を嘘と言って真実で……

辛い真実は、消えてしまえ。

幸一。お前に言われなかったら……

「俺はお前なら任せられるって思った」

お前がこう言わなければ、言わなかったかも。

どうせ消えてしまう事ならば。

後悔だけはしないようにと。

「俺は。お前が好きだ。まゆ。」

「へ?!」

驚きに驚きを上乘せし、

爆発的な赤い染色が彼女に起こる。

咄嗟に顔を伏せて、黙り込む2人。

言った方も、言われた方も、やっぱり恥ずかしくて。

「……………あ。あのさ。」

「な、なんだ?」

「確認。して良い?」

「ああ。」

顔を伏せたまま、一呼吸。

「どっちが本当?」

……………。

答えられなかった。

その問いに答えず、逃げるように彼女の家を飛び出して、自分の部屋に駆け込む。

家は隣同士で、屋根伝いにこれるけど…………

彼女は来ない。

刻一刻と、その時は迫ってきていて。

泣きたくもなる。

寂しい気もする。

けれど、いい。

誰かを死なせて生きるなら。

俺は死んで、誰かを生かす。

夕飯を拒否して。部屋に籠る。

さようなら、この世界。

さようなら、父さん母さん

さらば、幸一。

まゆをよろしく頼む。

さ
———
y

その時、ふと、窓を叩く音が聞こえた。

23時50分。

あと10分。

静かでいたいののに、邪魔するのは幼馴染。

幸一ではなく、まゆだった。

窓を開けて彼女を入れ、尋ねる。

「なんだ？」

「・・・あのさ」

誠に背中を向けて、言葉を発する。

「・・・まゆ。」

「あのさ、誠は私を好きって言ったよね。」

「ん？ああ。」

「誠はあと8分で消えちゃうんだよね？」

「・・・ああ。」

「嘘、じゃないよね？」

「ああ。」

同じ返答。

全てが事実だから・・・
振り返ったまゆが微笑む。

「私も、私もね？好きだよ？」

幸一から聞いていた。

けれど、それは俄かに信じられなくて・・・

彼女の口から出たそれは、頭の中にこだまして。

「消えちゃ嫌だよ……」

生きていた証拠が消えるって事は、
貴方のとつてくれたぬいぐるみも！

私と貴方と幸一の軌跡も！

この想いさえ！消えてしまふんでしょう？！」

微笑みは徐々に崩れ、涙が零れていく。

「そう……なる。」

「貴方は嘘を付いていない。

どんな方法かは知らない。

消えてしまふんでしょ？」

少しずつ、小さくなつていく声……

時計のハリは23時58分を示し……

「だから、キス、しょ。」

「え？」

「私は貴方と結婚したい。消える前に……」

「……いいぜ。」

「どんな時も、何があつても私は貴方を愛し続ける。

例えばどんな妨害があろうと、困難な道であろうと」

そう言い、彼女は目を閉じた。

「俺も。どんなことがあるうと、何があつても、

俺はお前を愛し、守り続ける。

それがどんな、茨の道であろうとも」

互いに勝手に言葉を繋げ、小さな小さな婚礼の儀式を行う。

誠がまゆの肩を掴んで引き寄せて、

時計の針が、23時59分50秒をさす頃に、キスをした。

5 5 秒

まゆの頬を・・・・・・・・静かに涙が伝っていく

5 6 秒

誠・・・・

5 7 秒

まゆ・・・・

5 8 秒

互いに心の中で名を呼んで・・・・・・・・

5 9 秒

さようなら――

そつと心の中で互いに別れを告げる。

時計の針が24時を越えていった――

第4話 『最後に……』 (後書き)

これもう、エンディングで良いんじゃないかな？
って展開です。

消える前に、貴方と結婚したい。

彼女も大胆ですね♪

読んでくれて有難う。

感想等お待ちしてます。

第5話 『転校生』（前書き）

オリジナル作品orz

主人公補正とか気にしない気にしない。
学園系コメディ？それはブラフさ。

第5話 『転校生』

「……………あれ？」

そつと離れる……………。

「なんで？」

まゆが驚くのが視界に入る……………。
え？

「消えてない？なぜだ？」

「ちよつと……………嘘だったの？」

いや……………そんなはずは……………。

「簡単なことだよ」

「「え？」」

いるはずの無い3人目がベッドに座っていた。

「君達は契約したんだ。」

「え？そんなま———？！」

「そう、婚礼の儀式、いや、見事だった。」

「あの……………貴方は？」

「俺……………神だけど？」

……………コイツ死ねば良いのに。

「もう死んでるから」

「うるせえ！」

「あの……………有難うございました。」

まゆが、微笑んで頭を下げる。

自称神も誠も状況が掴めず、啞然としていた。

「え？」

「誠を消えないようにしてくれたんですね？」

「……………いや。違う。」

「え？」

「止めたのは君だ。」

「でも……………」

……………。

自称神が、誠を見つめる。

どうやって助かったか、

そして……………そのリスクを……………教える為に。

「まゆ……………」

「なに？」

「君が俺を助けたんだ。」

「どうやって？」

「えつとだな……………」

俺はこの世界を管理するに当たって、パートナー詰まる所、
嫁が必要だった。」

「え？」

まゆの驚いた表情が怖い……………
けれど、

「嫁を得なければ、俺は消えるんだ。」

「それで？」

「ああ。君が申し込んだことで成立した。」

「へえ……………」

面白そうに考え込むまゆを2人が見つめる。

それにはとてつもないハイリスクがある。

それは……………

「まゆ。」

「なに？」

「心して聞いてくれ。」

「うん。」

「君はもう、人間じゃない。」

「へえ。」

「・・・・・・え？」

「言わなかった？どんな事があっても、何があっても、貴方を愛し続けるって。」

「貴方も人間じゃない、なら・・・・・・フェアでしょ？」

「こつと微笑むまゆが、月明かりに照らされ輝く。」

「良い子だな。俺の嫁に――」

「嫌です。」

「ぐふっ・・・・・・」

自称神は即断され、消えていく。
もう一度、見詰め合う。

「ふふっ。なんか恥ずかしいなあ。」

「落ち着いてきてから見詰め合うと、

「私たち凄いきことしちゃったんだあって」

「まゆが微笑む。」

「俺達まだ16だしな。」

「・・・・・・ん。違うよ。」

「は？」

「私達は・・・・・・0歳。だって神様になった日だもん」
「嬉しそうに、子供のような笑顔でまゆが言う。」

「・・・・・・つたく。」

「前向きなんだか、開き直りすぎなんだか・・・・・・。」

「私ね？」

「ん？」

「誠がいなくなるって聞いた時、嘘だ！って思ったんだ。」
「・・・・・・。」

「でもね？貴方の目が嘘じゃないって言ってて。貴方に帰った後、考えてた。

このままで良いのか。何もしないまま失うのかって。嫌だよ……。そんな事って私に怒鳴ってね……。だから、ここに着たんだよ？」

嬉しいのか悲しいのか彼女はそう言って微笑み、窓の鍵を開ける。

「また……。後でね？」

「後で……。？」

「だってもう日付変わっちゃったし、学校だから。」

「確かにそうだ。」

二人で微笑し、見詰め合う。

今までとは違うものが、見えていた。

「後で……。？」

そう言って、まゆは窓から抜け出す。

屋根伝いに戻って行った彼女は、部屋に戻るところちに手を振っていた。

誠も手を振ると満足したのか、まゆはカーテンを閉めた。

「おはよう。」

「ん。」

「何よ。素っ気無い。」

「いやあ、昨日は消えるからどうでも良いと思ってたけどさ……。・」

二人で校門にたどり着いた時だった。

「さ〜と〜く〜らあ〜くん！」

「えっと……。なんでしょう？」

ごまかして笑ってみるものの、増山先生の目が、凍てつかせる。

「栗崎さんですよ？」

「はい。解っています。ですが、里倉君は私が誘ったんです……

・
なので………」

「成績優秀、運動神経抜群、無遅刻無欠席、無早退の貴方が何故？」

「えっと………」

まゆがにこつと誠を見つめる。

………」

「なんですか？」

「逢引です」

「「は?!」」

先生と二人、あいた口を塞ぐことが出来ずに、俺はまゆを見つめ、先生は………」

「里倉くん。」

「はい？」

「強制退学と自主退学どちらが良いですか？」

「は?!」

「選びなさい！」

「ええええ?!」

先生の理不尽な選択肢は選択せずにスルーし、教室へ向かう。

「まゆ………お前。」

「えへへ。あつ」

「ん? うわっ………」

余所見をしていて、誰かにぶつかる。

「ごめん。よそ見たせいだ」

「………気にするな。これも運命だ」
ん………?

うちの制服だよな?

見たこと無い・・・・・・・・

「誠！遅刻するよ?!」

「うげっ・・・・・・・・」

増山先生の尋問といつかなんといつかのせいで、予鈴がなり終わる頃に、教室へとたどり着く。

「あつ危なかった・・・・・・・・」

荒い呼吸で席に座った誠に幸一が近づく。

「・・・・・・・・なんだよ。」

「後で屋上。」

「・・・・・・・・解った。」

きつとまゆと登校して来たことだろう・・・・・・・・
どう言おうか・・・・・・・・今のうちに作戦・・・・・・・・練らないとな。

「はい、では。号令！の前に。」

先生が入ってくると、微笑む。

「なんだ・・・・・・・・?」

「転入生、来たわよ。」

は？

先生の拍手に釣られ、みんなも拍手をしていた。

ただ、俺とまゆだけは、手が動かなかった。

彼が入ってくるのがスローモーションに見えた。

あいつは・・・・・・・・

「闇坂 総司朗だ。」

ここに来ることは運命であり、意思ではない。

君らと馴れ合うことも・・・・・・・・運命ならば」

ただの電波少年に思える発言。

しかし、2人だけは、そうは思えず・・・・・・・・

「里倉 誠と栗崎 まゆ。君らと同じ存在だ。」

「・・・・・・・・何だと？」

「誠。今は駄目。」

まゆが誠の腕を掴む。

「・・・・・・・・よろしく頼むよ。」

怪しく微笑むと、総司朗は席につく。

新たな暗雲が立ち込めていた・・・・・・・・

第5話 『転校生』（後書き）

いやあ、良かった良かった。

あのままいくと、主人公いなくなるところでした。

読んでくださり光栄です。

感想等頂けると、もっと感謝感激。

第6話 『小さな』（前書き）

はい、オリジナル作品。
ジャンル不明の第6話。

キャラ崩壊とかありません。
固定されていないので。

第6話 『小さな』

「・・・・・・・・ま——k」

「悪いな幸一・・・・・・・・少し待ってくれ」

「はあ？」

「総司朗・・・・・・・・」

「おや？運命の旗をへし折るのかい？」

座っていた総司朗を呼ぶ。

「そんなものねえよ。あるのは未来だけだ。」

「なるほど。」

「・・・・・・・・誠。」

「来るか？」

まゆが呼び止め、誠が誘う。

「ええ。」

誠・総司朗・まゆが、揃って部屋を出て行く。

・・・・・・・・なんなんだよ。

幼馴染の俺に言えず、さらにまゆまで・・・・・・・・
くそ！暴いてやる。お前らの秘密。

こつそりと教室を抜け出して、尾行する。

風の吹かない静寂な屋上・・・・・・・・

3人が互いに見合う。

「お前は・・・・・・・・誰だ？」

「闇坂 総司朗。」

「そう・・・・・・・・ですか。誠。」

「・・・・・・・・総司朗。神様っていると思うか？」

「そうだな。いるんじゃないか？」

「まゆ・・・・・・・・戻るぞ。」

「・・・・・・・・うん。」

「いいのか？」

総司朗が怪しく笑う。

「．．．．．何でもないので．．．．．」

幸一が急いで教室に戻っていく。

「総司朗、仲良くやろうぜ。」

「．．．．．ああ。仲良く。」

ちらつとまゆを見る。

「．．．．．よろしくね？」

視線に気づき、にこつとまゆが笑みを返す。

（はあ？）

（だからさあ、全員を管理する余裕は無いんだって）

（アイツが何者が解らねえの）

（悪いな。）

（使えないな）

（うつせえ。ただ。警戒だけはしとけよ？）

（あん？）

（しとくに越したことは無いからな）

（解ってるよ）

．．．．．

と言つてもなあ。

ペンを指で回しながら、総司朗を見つめる。

普通の人間．．．．．だと良いんだがな。

「総司朗くん、答えてくれる？」

「．．．．．はい。」

先生に呼ばれ、淡々と数学の問題を解いていく。

畜生．．．．．人間じゃねえ。

「あんな、訳解らない文字列を．．．．．」

「あははは。誠・・・・・・・・。」
「哀れむな・・・・・・・・。」

数学は必要ない、要らん。

知るかってんだよ・・・・・・・・くそ。
ん？

問題を解いた後、まゆを総司朗が見つめていた。
・・・・・・・・気にいらねえな。
それに対し、まゆも微笑んでいた。
むかつくぜ・・・・・・・・まったく。

「昼食・・・・・・・・どうしょつか？」

「んじゃ、まゆ。一緒に食べるか。」

「うん。」

「あつ・・・・・・・・俺も入れてくれないか？」

「総司朗は駄目。」

「なんだと?!」

「誠！駄目だよ！」

「・・・・・・・・へいへい。冗談ですよ。」

「・・・・・・・・俺も良い？」

「そうだな、4人で食べるか。」

総司朗と幸一を加えて、4人で屋上に行く。

「でね」

「へえ・・・・・・・・そうなんだ。」

「・・・・・・・・。」

「誠。」

「なんだよ。」

「お前は、諦めたんじゃないのか？」

「何のことだか」

軽くとぼけてみる。

あの時は、冗談で通らなかった言葉も……

「ちえつ。でも、隙あらば奪ってやる。」

「やって見ろ」

「やってやる」

「あはははは。」

誠と幸一のやり取りをみて、まゆが笑う。

「……お前の事だつて気づいてるのか？」

「仲良いんですね。」

「うん。私達幼馴染だから。」

「……そこに俺も入りたかったです」

「ふふつ。残念。」

「ええ……残念です。とつても。」

微笑むまゆに、怪しく笑い返す。

「……あの野郎。」

「幸一？」

「なんだ？」

「総司朗に恋したか？」

「ざけんな！」

幸一が立ち上がって怒鳴り、誠が笑いながら謝る。
いつもの光景。

人間だった頃と変わらない……

でも、少しずつ、色は変わっていつて。

「この後、時間頂けますか？」

子猫と子猫がじゃれてる隙に……

「？別に良いよ。」

「2人だけでお話を。」

トラは獲物に近づいて・・・・・・・・..
「うん。解った。」

「ありがとう。」
にやつと、総司朗が笑っていた。

昼休みも終わり、みんなが教室へ戻っていく頃、
ギリギリになって、まゆと総司朗が戻ってきた。
「何してたんだ？」

「・・・別に。」

「ん？そうか。」

午後の授業も変わりなく、平凡に終わっていく。
誠が得意教科である、英語と生物の小テストで100点とるのも、
日常的であり、数学の小テストを白紙で出すのも、日常的である。
まゆが、一緒に帰ろうと誘うのも・・・・・・・・..

「ごめん、今日は寄りたい所があるから・・・・・・・・..」

小さな変化だった・・・・・・・・..

第6話 『小さな』（後書き）

いつもより短いかな？

ありがちな平和な日常の一片。
でも何かが変わっていく。

読んでくださり光栄であります。
感想等頂けると作者は嬉しいです。

第7話 『選択肢』（前書き）

学園系コメディにしようとしてたらこうなった作品。

ジャンルは気にしなくて良いと思う。

……気にしないで下さい。

第7話 『選択肢』

「誠・・・・・・・・」

「幸一か？」

「久しぶりに帰ろうぜ。」

「ん？まゆなら・・・・・・・・」

「俺は、お前を誘ったんだ。」

「俺にそっちの趣味ないぜ？」

「ちっ。惜しいな」

二人で軽く笑って、昇降口へ向かって行った。

「昨日・・・・・・・・何したんだ？」

「知りたいか？」

「是非とも、それ以上に凄いこととして、

まゆを俺が頂く」

「じゃあ教えない。」

「なんだと？！」

「悔しかったら調べてみな」

他愛ない会話。

それが嬉しくて・・・・・・・・笑う。

先生に怒られるのも・・・・・・・・

幸一とふざけるのも・・・・・・・・

まゆと付き合うことも・・・・・・・・

全部諦めていたら、今ここにはいない。

ゆっくりと振り返り、校舎を見上げる。

「もう、手放したくはないもんだな」
小さく呟く。

「ん？どうかしたか？」

前で、呼びかける幸一に微笑む。

「なんでも。」

「男にその表情してもらいたくない」

「なんで？」

「キモイ。」

「オブラートに包むべきだろ。」

「吐き気がする。は？」

「却下」

「心肺停止に陥りそうだ。は？」

「・・・・・・アウト」

「なにい?!」

こんな世界がずっと・・・・・・。続くように頑張ろう。

自分の部屋で、月を見上げる。

（なあ。）

（なんだよ。）

（俺、代行人だろ？）

（ああ。）

（何すんの？）

（え？）

（え？）

（え？）

（・・・・・・。）

誠は神の代行人で、何をどうすれば良いかなど、
全く持って知識はない。

そして、白い人に聞いたのだが・・・・・・

（まあ、あれだ。）

（なんだ？）

（頑張れ）

（は?!）

念話が切れ、不通になる。

．．．．．にやろう。

「とりあえず．．．．．周りを．．．．．」

っ?!

咄嗟に耳を押さえる。

なんだ？

悲鳴．．．．．？

（届いたか、そっから南西800だ）

（だから？）

（行きたいと願え）

（まじか）

（まじだ。）

白い人に言われるがままに、そう念じ目を閉じる。

開いた時には、見たことの無い道路だった。

「何も起きてないぜ？」

「今から起こる。」

「おま．．．．．」

「今、俺とお前は「神」として、見えず、触れられず、聞こえずの
状態だ。」

あと．．．．．10秒」

車や、人が誠達の体を通り抜けて、進んでいく。

「な———?!」

誠が口を開いた瞬間、猛スピードで走る車が、帰宅途中の女性を跳ね飛ばした。

そこで、世界が停止した。

「なっ……」

「ゾーンに入った」

「なに？」

「誰かが死ぬ時、私達は傍にいる。老衰は除くがな。

そして、選ぶ。」

「何をだ？」

「見る。」

白い人が、2人指差す。

助手席の女の人が、シートベルトをしていなかった為か、
投げ出され、車が迫っていた。

もう1人、撥ね飛ばされた女性が空中に浮いていた。

まさか……

「選べ。片方は助けられる。」

「なんだと？」

「撥ねられた人は、手術で奇跡的に生還。後遺症もなし。

投げ出された人は轢かれて死亡。

投げ出された方は、奇跡的に車体の下に転がりセーフ。

撥ねられた人は即死。

さあ、選べ。」

「そんな急に……」

「全ては、急に起こるのだ。だから、人はその身を「神」即ち「奇跡」に任せるのだ。」

「……どうすれば。」

「お前が選べ、生者と死者を。」

「助手席の人に罪はなく、轢かれたほうにも罪はない。」

「当たり前だ、罪なき者が死ぬ。それが世界だ。」

「……そんなの。」

「選べないか？」

白い人が聞く。

「確かに、宝くじや、馬券、当たりくじなど……平和的な選択肢もある。

けれど、世界を回しているのは、この残酷な選択肢なんだ。」

「……解った……なら。」

「……。」

「轢かれた人を助けてくれ」

「……言い方が違う。君は助けを乞うんじゃない。助けを乞われる側なんだ」

「……轢かれた人を……助ける。」

「それで良いんだな？」

「……そんな事知るか。

でも……轢いた側は止められたかもしれない。

なのに、轢いた。

「……だから。」

「そうだ。それで良い。」

時がまた動き出し……

「きやあああああ！」

悲鳴の後、鈍い音と共に、女性が車の下敷きになり即死。

撥ねられた人は「たまたま」近くに来ていた救急車で搬送されて行った。

俺が……選んだ。

俺が……

「……誠。」

俯いていた顔をあげ、誠が白い人を見つめる。

「……聞いて良いか？」

「なんだ。」

「飢餓で死ぬ人は、何故だ？」

「飢餓は起きたら止められない。いや、止めることも出来よう。ただ、飢餓Aを救い、Bを殺しても、飢餓Aはまた死に掛ける。だから……………」

「……………神って残酷なんだな。」

「そうだ。神はゲームキャラじゃない。神は……………プレイヤーだ。」

「やり直しの利かないゲーム……………ゲーム……………か。」

「例えだな。」

「解ってる。」

「解ってるさ……………」

道路上でいまだに騒ぎ納まらぬ中、2人は闇にとけ消えていった。

第7話 『選択肢』（後書き）

今までで

白い人が唯一真面目な場面。

読んでもらえて光栄です。

感想等頂けるともっと嬉しいです。

第8話 『怖れ』（前書き）

オリジナル作品・・・・・・・・
コメディ系に向かわせられない、作者の文章力のなさ・・・・・・・・

第8話 『怖れ』

「あ．．．．．」

目を覚ますと、午前4時。

本来起きていた時間より2時間早い。

「くそっ．．．．．」

あの悲鳴が、光景が．．．目から耳から脳から記憶から．．．．．
まだ．．．．．

ベッドから起き上がりジャージに着替えて外に出る。

（なにしてるんだ？）

（ランニング）

（へえ．．．．．体力向上？）

（．．．．．気晴らし）

（．．．．．そうか。学校なんだ。無理するな）

白い人も気を遣ったのか、茶化したりすることもなく、念話を切る。

「はっはあはあ．．．．．」

多少息を切らしながら、公園で立ち止まる。

あの時の選択．．．．．あれで良かったのか？

あんな．．．．．

「良くないよお．．．．．」

「え？」

「なんで．．．．．なんで私が死ぬのよお」

後ろから声がして．．．．．振り向く．．．．．

「なっ．．．．．え？」

死に選ばれた女性だった．．．．．

潰された体のまま．．．誠に近づいていく。

「や．．．．．止めろ！来るな！来るなあ！」

「貴方は私を見捨てた．．．わ、たじ、ぼおお！」
「うわあああああ！」

「?!き．．．君?!大丈夫か?!」

近くを通った老人に宥められ、ようやく落ち着き周りを見渡すと、
女性は消えていた。

しかし．．．．．

あの顔．．．．あの体．．．．あの声．．．．

あの光景が．．．．．

頭から離れない．．．．．

帰宅した誠を母親が呼ぶ．．．．

「誠ー!学校は?!」

「休む．．．．．」

「え?貴方具合でも．．．．」

「うん。少し．．．．」

母親の返答を待たず、部屋に戻ってベッドに倒れこむ。
．．．．．怖い。

(．．．．．怖いのか?)

(なあ．．．．俺)

不安だった．．．．

自分は人間じゃない．．．．

けれど．．．．それは存在とかが変わったわけじゃない。

世界を管理する以外、人間だ．．．．

だから．．．．怖い。

自分の決定で、人を殺した．．．．俺は殺人者だ。

(お前．．．．)

(俺は、間違ったのか?選択を．．．)

(俺達の選択に正誤はない。あるのは結果だ)

(でも．．．)

（見えたんだな？切り捨てた方を）
（……………）

誠は何も言わずに首を縦に振る。

その部屋にいるのは、誠だけ……………
けれど、見ている、傍にはもう1人いる。
見えない人がそこにはいた。

（誠。）

（なんだ？）

（お前の選択は間違っていない。生かした方も死なせた方も……………
・

お前は優しすぎるから、死なせた方が見えた。
けれど、それは幻。見えない存在、いるはずのない……………
な？

だから塞ぎこむな、全てを話せる相手がいるだろう？）

（……………お前か？）

（馬鹿言うな。何のための……………契約だ）

「誠！」

瞬間、1階から聞きなれた呼び声……………
階段を忙しく上がる音……………
そして、部屋のドアが勢い良く開かれた。

「……………誠。」

「まゆ？お前……………」

「心配したんだよ？貴方、神様なのに……………具合悪くなるわけない」

「……………ただのサボリだよ」

「嘘。貴方は具合悪い。顔色悪いよ？何があったの？」

「なあ……………まゆ。」

「なに？」

「怖い・・・・・・・・・・」
「え？」

思っ て い な っ た 言 葉 な の だ ろ う か、 ま ゆ が 驚 い て 誠 の 肩 に 手 を 伸
ば す。

・・・・・・・・・・怖い。怖い。

「まゆ・・・・・・・・俺・・・・・・・・俺が怖いんだ！」

「ま・・・・・・・・誠?!」

まゆに抱きつく。

今 は た だ ・・・・・・・・優しさがほしかった・・・・・・・・

怖い・・・・・・・・闇に沈んでしまいそうだから・・・・・・・・

照らし出し救い上げてくれる優しさが・・・・・・・・欲しかった。

「誠・・・・・・・・大丈夫。私と誠はいつも一緒ずつと一緒。

だから平気。貴方が貴方を怖いなら、私を頼って。

貴方を私は信じてる。怖くないから。

だから私を怖れないで。そうすれば、貴方は貴方を怖がらずに済む
はずだから」

「まゆ・・・・・・・・」

「なに？」

「意味解らない」

「うぐっ・・・・・・・・。わ・・・・・・・・私だけは怖がらないでってことよ」

「・・・・・・・・解った。けど・・・・・・・・」

「なに？」

「もう少し、このままが良い。」

「うん。いいよ。いつでもいつまでも・・・・・・・・」

「ありがと・・・・・・・・」

俺はただ、怖くて・・・・・・・・

ただ、安心したくて・・・・・・・・

そばにまゆがいてくれて・・・
心の底から安心が出来ていた。
ただ、まゆが傍にいただけで・・・

第8話 『怖れ』（後書き）

だよね・・・

普通はトラウマだよね・・・

誠・・・頑張れ！

第9話 『解けない問題』（前書き）

あれ？もう9話ですね。

関係ない話だけど・・・。

さておき、オリジナル作品です。

どこかに似たような作品がある場合、

ご一報頂けると、幸いです。

第9話 『解けない問題』

「お前……いいのか？」

「何が？」

「学校だよ。」

「早退した。心配だからね」

「それは嬉しいですよ。」

「うんうん。感謝なさい」

「嫌です」

「別にいいよ。私の善意は、見返りなんて求めていないから」

「……そうか。」

「うん。」

昼間からずっと、静かだった。

互いに、言葉を発することもなく……..
小さな寝息をたてていた。

「あ……..れ？」

目を覚ますと、夕日の光が窓から射し込んでいた。

「……..まゆ？」

その部屋にまゆはおらず、聞くと少し前に帰ったらしい。

「……..まゆ。」

まゆは、母親がいない。

出産が難産だった為か、まゆを産んだ直後……..

今思うと、あれも神の選択だったのだろうか……..

「誠……。幸一くんよ！」

「……..空気読めないやつだ。」

階段を上りきった幸一が部屋に入ってきて、
誠を睨む。

「なんだよ。」

「今、馬鹿にされた気がした」

「気のせいだ。」

「そうか。」

いつもより、元気と言つか．．．．．なんというか．．．．．

「んで？」

「なあ、総司朗ってさ。お前昔から知ってるか？」

「はあ？」

．．．．．？

幸一は真剣な表情だった．．．．．それが、誠を警戒させる

「知らないけど？」

「．．．．．まゆとお前の関係は？」

「は？！なんでそんなこと．．．．．」

「いいから！答えろ！」

「つ．．．．．付き合ってる。」

「．．．．．そうか。」

「なんだ？」

「いや、なんでもない。帰る」

「ちよっ．．．．．」

「具合悪いんだろ？寝てろ。」

しゃがんでいた体を起こし、幸一は部屋から出て行った．．．．．
なんだ？

あいつ．．．．．。

翌日のことだった。

「増山先生、おはようございます。」

「あら？里倉君一人なの？」

校門で見張り？をしている担任の増山千賀子ますやまちかこ

先生に挨拶すると・・・

「ええ、まあ。まゆが1人で先に……………」

「あら？まだ見てないけど……………」

「寄り道する予定だったのか……………」

驚きはしたものの、大して気にすることなく、教室へと向かう。
確かに、姿どころか、鞆もなかった。

机に伏せている幼馴染に声をかける……………が。

「幸……………」

「すまん。今取り込んでる」

「ん？課題でも忘れたか？」

確か、まゆがプリント置いていったし……………

「ほつといてくれ」

「こっい……………」

「誠！」

「なっ……………」

「いいから……………ほつといてくれ」

顔を上げず、そのままの体勢で怒鳴る……………

「あっ……………ああ。」

昨日から……………様子が変だ……………

そう考えていると予鈴がなり、廊下が騒がしくなってきた。
叫び声と、足音。

遅刻しないよう、走っているのだ。

そして……………

「っ……………はあ……………はあ……………はあ。セーフ」

「危なかったですね。」

「うん……………ギリだった。」

まゆ……………と総司朗？

なんで……………

2人が同時に入ってきたことを不思議に思いつつも、席に着く。

ホームルームを終え、まゆに近づく。

「まゆ。」

「なに？」

「お前、先行ったんじゃない……」

「寄る所があつてね」

「そうか……」

「なに？教えた方が良い？」

「は？」

「私がどこで何してたか、しつときたいでしょ？」

「は？いや、聞いたつてしょうがないだろ。」

「なら、もう席に着いて。授業始まるから」

「……ああ。」

数秒の会話……

けれど……

「まゆ……」

「なに？」

「何か……あつたのか？」

「別に。」

「……ただ……少し……計算問題が解けないのがあつて……」

「言うくだらないことなの。」

「お前に解けないなら、俺にも無理だな」

「少しは頑張りなさい。」

「へいへい」

互いに見合い、軽く笑って席に戻る。

（どうした？）

（……なんか変だなんて）

(気にしすぎじゃないか?)

(だといいけど。)

いつもと少し違う世界・・・
それでも何も変わらずに・・・
時間だけは・・・進んでいった。

第9話 『解けない問題』（後書き）

頑張った。うん。

平和な一日を書いたつもりだった。

細かいことは気にしないでください。

読んで頂き感謝感激。

そして、感想頂けると、もっと嬉しいです。

第10話 『決意』（前書き）

オリジナル作品。

ジャンル無所属になりました♪

第10話 『決意』

「こういう平和な仕事なら、万々歳だ」

「よく言っぜ。」

誠は、宝くじ売り場に立っていった。

とはいえ、店員ではなく、誰が当たるかどうかを決めている。

「適当に、21番目」

「まさしく適当だな。」

「いや、実は今、丁度20人なんだよ。だからさ。」

「へえ、面白い。」

コレだけ並んでいると言うのに、並ぶ人がいるかどうか……

「おいおい……来ないんですけど。」

白い人が驚く。

あれから、4時間。

誰一人として来ず、そろそろしめようかと言う時間になっていた。

「まあ、宝くじなんて運に任せたくない人も居るんだろうよ」

「……おっ。お前……良い選択したな。」

「は？」

白い人が指差す先に、まだ中学生だろうか？

そのくらいの女の子が立っていた。

「……まさか。」

「妙にボロい服装。アレもしかして、ホームレスじゃないか？」

「それって……」

「捨て子。又は、借金苦。」

「どうだろう……」「くらもちかな」って服に書いてあるな小さいけど。」

「ふむ。解らないな。まあなんにせよ。あの子が不幸な人生であり、お前が当たりくじに選んだくじを買おうとしていることだけは事実だ」

女の子が売り場に近づき、たった一枚だけ、3億円くじを頼んだ。

本来なら駄目なんだろうか、おばあちゃんだったのが幸いし、絶対になくしちゃ駄目だよ？きつと良い事があるからと言い、渡した。

「こういうのだけで……良いのに」

「そうだな。だが、それだけじゃないんだ。」

「解ってる。」

当たりくじを持って、走っていく少女を見送ってから誠たちは家に帰っていった。

（あゝ。受験勉強しないと）

（ん？受験？）

（だって、俺一応高校2年生だし）

（まあ、頑張れ。）

（へいへい。）

……受験か。

特に明確な目標はない。

それ以前に、神様代行とはいえ人間じゃないのに、受験して大学行かなければいけないのだろうか？
とか思うだろうけど、行かないと駄目。

なぜかというと、能力以外は人間だったりする。

その為、眠くなるし、お腹もすく。

金がないと生きていけない。

まあ例え骨だけになろうと、俺は忌々しい呪いのせいで死ねないんだが。

机に広がる今日だされた課題……

「数学……」

数学が苦手な誠はなぜか、理系へ進んだ。

その理由はとても簡単で、まゆが理系に進むというのが理由だった。
目標……か。

（なあ。）

（なんだよ。）

（医療機器とか発展させて人を救うのは、誰かを殺さないといけなののか？）

（難しい質問だな）

（いや……簡単だろ）

（難しいぞ。説明しよう。）

今の技術で治せるか判らない病気があるでしょう。

それを「今の技術」で治す場合それは「奇跡」に任せる

だが、発展させた場合、「新しい技術」なら確実に治せるとしよう。

そうすれば、「奇跡」つまり、俺達の介入……まあ、選択肢は生まれない。）

（なら……）

（生かす為に、誰かを殺す必要はない）

（決めた。）

（そうか。）

（俺は世界の技術を発展させてやる。）

（神のくせに、神の仕事が減らすのか……）

「当然だ。だって俺。代行人だから。」

念話ではなく、声で言う。

あんな選択肢は出来ないようにする。

服が、衝撃吸収できたって良い。

どんなスピードでも正面に何かが飛び出した時、確実に止まれたっ

て良い。

そうだよ……可能性なんていくらでもある。

老衰Ⅱ誕生

こつすれば……あんな選択肢……できない。

「やってやる。絶対にな！」

決意をかたくして、ベッドに潜り込む。

「……課題は明日で良いや。」

……まあ。いいのいいの。

課題は課題。目標は目標。

自分に言い聞かせて、目を閉じて眠りについた……。

第10話 『決意』（後書き）

宝くじって買ったことないなあ。

あとがきに書くことがない・・・・・・・・

読んでくれて有難う。

感想等頂けると嬉しいです。

第11話 『嵐の前の静けさ』（前書き）

細かいことを気にするといらつくかもしれない作品。
冗談のはず。

第11話 『嵐の前の静けさ』

「おはようございます」

「はい。おはようございます」

いつもの校門での挨拶。

「……………結局課題やってないな。」

若干の不安要素を抱えたまま、教室に入る。
ん？

見渡すと、いつもは十数人いるはずが、4、5人しかいなかった。

「高田。なんかあったのか？」

「ん？ニユースみてねえの？台風来るらしいぜ」

「おいおい……………それで？」

「じゃないかなあ。多分」

「口を挟むな。」

「ええ……。いいじゃん。」

最初に話しかけたのは、高田久人たかだひさと高校1年から同じクラスで結構気が合う。

一方、口を挟んできた女子は木角健きかどたける

言っておくが、女の子だ。男の娘ではない。

「お……………幸一。」

「おはよ。」

「……………？疲れてるな大丈夫か？」

「ああ。ちよつと寝不足なんだ。」

「授業寝ちまえ」

誠が冗談で言っていると、幸一は頷いて机に伏せる。

……………？

「幸一・・・お疲れ様だな。」

「みたいだね。」

「健は疲れなさそうだな」

「まあね。ウチはソフト部のエースだからね。」

「関係ない気もするけどな」

「久人。気にしたら負けだ」

「だな。」

「なによ」

軽く笑っていると、まゆと総司朗も入ってきた。

「あれ？あの二人・・・」

「ん？」

「いや、昨日も一緒だったなあって」

「偶然だろ。」

「・・・そうかなあ。」

「健？」

誠が聞こうとした時に丁度予鈴がなり、席に着く。

まゆと総司朗・・・。

確かに昨日も一緒だったけど・・・。

「あら・・・今日は少ないわね。」

「先生。と言うことで閉鎖・・・」

「しませんよ？里倉君」

「なんだと?!」

「台風とかあったこっちゃねえぜははは。って校長先生がおっしゃってるので」

「校長・・・だと?!学校七不思議に入るほど目撃例の少ない

あの校長が?!」

「校長は噂によると、校長室でギャルゲしてるらしいぞ」

「え？私はネットゲって・・・」

6人のクラスが校長の生態について……で騒がしくなったところ
で先生が手を叩く。

「はい！静かにしなさい」

鶴の一声……というわけでもなく静かになる。

「と言うわけです。万が一台風が近づいた場合、授業を中断して各自教室待機。

恐らく、教室に泊まることになるかもしれません」

「うへえ、休めばよかった。」

「後悔先に立たず。諦めなさい高田君」

「教師の言葉じゃない……」

「つか俺は家に誰もいないから、ここの方が良いね。それに……」

久人が教室を見渡す。

……お前の考えが読めたぞ。

この学校は、女子のほうが割合的には多く。

55%女子45%男子と言うかなりの偏りがある。

なぜ男子の募集が少ないのかは知らない

その為、教室も、40人中28人女子12人男子と……なんとも残念な結果？である。

今日も、男子は総司朗と俺と久人と幸一の4人だけ。

女子は、まゆと健とえつと……名前覚えてないけど影の薄い女の子の7人

「以上です！」

千賀子先生の号令で終了。

一気に慌しくなる。

「……今日は6人啊」

え？

教室を出る時に、千賀子先生のため息と声が耳に届く……
数え間違ひ？まあ……いいか。

窓から空を見上げると、確かに台風が近づいているようなどんよりとした空気があった。

嵐の前の静けさだな……

「一時間目数学……ぬわあ！課題やってねえええ！」

課題を忘れたことで、職員室でじつくりと絞られることになった誠であつた。

「ですから……事情が……」

「へえ、事情ねえ。」

「明日やればくんが囁いてきてですね……」

「そうですか、なら退学した方が良いですよ？」

「ええ？！なんで、俺の選択肢悪いのばっか……り……」

「」

「？里倉……くん？」

「……え？なんですか？」

「今、ぼうつとしてましたよ？」

「あつ……すいません。」

「保健室で休みなさい」

「……はい」

悪戯等をするとはあれど、

仮病を使うことがない誠を心配してか、説教を中断し保健室に向かわせた。

……。

（どうした？）

（いや、少し、気分が悪い）

（・・・そうか。気をつけるよ）

ふらつく足取りで、保健室へ向かう。

「双葉先生いますか？」

「はあい？なんでしょう？」

「あの・・・ベッド借りて良いですか？」

「いいですよ？」

なんとかベッドまでたどり着いて横になる・・・

なんなんだ？

急に頭痛いし・・・吐き気が・・・

「それで？どうしたの？」

「あつ・・・双葉先生」

閉めていたカーテンの隙間から、双葉先生が顔を覗かせる。

「ちよつと気分悪くて・・・すぐ治ると思います。」

「すぐ治るなら、あんなふらふらしないわよ？」

体温計をもって、カーテンの内側に入ってきた。

「自分でやれm_____あれ？」

「？」

「だるいのでお願いします。」

「はあい。」

黙々と馴れた手つきで、体温計で計る・・・

「うわぁ。39度ですよ？今日は帰宅_____」

「各生徒は教室に戻ってください。教員は担当の教室へ_____」

「・・・帰れませんか。」

「そう見たいねえ」

窓の外から、風と雨の音が響く。

音だけで、その凄まじさを感じ取れた。

「双葉先生は……どこか行かないんですか？」

「私の担当はここですからねえ」

微笑む顔が、可愛い。

双葉先生はまだ、24歳で、子供らしさが残っていて男子勢には大
人気。

一緒にいられるのはありがたいけど……

あとで、久人に五月蠅く言われそうだ。

まあ、幸も不幸もどっちもある状態だな。

少し……寝よう。

静かに、目を閉じた。

第11話 『嵐の前の静けさ』 (後書き)

読んでくれて有難う♪

感想等頂けると感謝感激。

ニユーキャラ追加♪

『キャラ設定?』（前書き）

この小説内に登場するキャラ紹介。
一つ目♪

多分他にも出てくるから?。

因みに出てくるといふ保証はない♪

『キャラ設定？』

『キャラ設定』

■さとくみ里倉まこと誠

本作主人公のはず。

霊核高校2年 17歳

性格は明るく、優しい。

ある日、自称神様のせいで死に、神様代行になる。

容姿は普通の高校生。可もなく不可もなく。

本来は、神としての力を得ることを捨て、消えるはずだった。

しかし、幼馴染のまゆと偶然結婚式を行い生き残った。

自称神様のせいで、不死の体にされた。

これは、怪我も病気にもしないが、老衰でのみ死ぬ。

不得意教科は数学。得意なのは英語と生物

髪の色は黒

■くりさき栗崎 まゆ

本作ヒロインだね？自信ないんだけど。

霊核高校2年 17歳

性格は誠同様、優しくて明るく、

容姿がモデル並みと言われており、学校のアイドル。

黒い長髪

誠と幸一の幼馴染であり、面倒見がある姉のような存在。

幸一に告白された時に、「私は誠が好き」ときっぱり断っている。

誠から、俺はいなくなると言われ、それなら・・・と結婚式を挙げた。

それで、誠を救い出している。

頭脳明晰、運動抜群の完璧な子だが、性格上嫌われることがない。

■野村 のむら いっいち 幸一

本作の超重要人物ではないかもしれないかもしれない。
中途半端な立ち位置の人。

霊核高校2年 17歳

性格は、強がりで元気の良いガキ大將的な感じ。

しかし、いじめなどは嫌いでそういったことは一切しない。

誠とまゆの幼馴染。

まゆに告白するも、見事に撃墜された。

誠と喧嘩するも、まゆと仲良く登校するのを見て、仲直りした。

髪の色は黒

■白い人・自称神様

様々な呼び方があるが、大抵は白い人。

本名は不詳、年齢も。

神様らしいのだが、良く解らない。

誠を死なせて代理にしたり、

まゆに嫁になってとたのんで撃沈したり……………

やってることはいまいちだが、

的確なアドバイスとかをしてくれる……………はずである。

■闇坂 やみさか そうしろう 総司朗

本作の恐らく重要なんじゃないかなあ……………

霊核高校2年 17歳

性格は電波。

運命がどうのくなど・・・

神様のなことを匂わせる発言が多い。

どこにでもいるような容姿。

髪の色は黒。

色々と、怪しい。

■高田 たかだ ひさと
久人

誠達の友達。

霊核高校2年 17歳

お茶らけた性格で、いわゆる思春期真っ盛りな子である。

成績は、誠より低い。

理系選んだ理由が誠とかぶっていたりもする

基本的に優しい、時の運という能力（自称）を持つ

■木角 きかど たける
健

誠達の友達

霊核高校2年 17歳

女子なのに健と名づけられた。

ソフト部所属で、キャプテンでもある。

しかし、総合的運動能力ではまゆにあと一步で負けている。

元気な性格で友達も多く、気強く思われるが、実は涙脆かったりする。

天性の勘（自称）でテストに臨み、何度か100点取っていることから、一時期神と呼ばれた。

■双葉 ふたば まゆみ
真弓

保健室の先生。 24歳

保健体育も時折教えている。

実は、英語、生物、科学、物理に関して教員免許も持っている。
なぜ教えていないのかは解らない。

性格は明るく、子供っぽいものがある。

時折、暗い表情が見られることから、過去に何かあったと思われる。
天然の代名詞でもあり、保健室を体育館と間違えて案内したりする。
髪の色は地毛で金色。

■増山 千賀子 ますやま ちかこ

誠達の担任 永遠の18歳（26歳）

既婚者だが、仕事することの方が楽しいらしく離婚した。

誠の悪戯には手を焼いており、

何かあると退学を勧めてくるが、もちろん冗談である。

優しくて面倒見が良い先生として素晴らしい。

数学を専攻してるが実は文系の方が出来る子。

■くらもち かな

漢字表記は不明。

誠が宝くじの当たりを選んだ際、それを買った少女。

身なりが貧しいことから、何らかの不幸な人生を歩んでいる。

茶髪の長髪で、まゆにまけずの可愛さだが身なりで隠れている。

宝くじを買った後は不明。

見た目で推定15歳。中学生辺りと思われる。

『キャラ設定?』(後書き)

わぁお。

10人もいる♪

少ない……とかいわないで下さい。

第12話 『暗黒世界』（前書き）

オリジナル作品の12話
早いもんですね♪

似てる作品等あれば、ご一報頂けると幸いです。

第12話 『暗黒世界』

「・・・・・・・・つ。」

暗い保健室・・・・・・・・

「双葉・・・・・・・・先生？」

呼んでも、返事がない。

（おい！）

・・・・・・・・自称神も返事がない。

どういうことだ・・・・・・・・？

ベッドから起き上がって、カーテンを開く。

窓の外も真っ暗だった・・・・・・・・

「夜なのか？」

だとしたら、静かで先生がいないのも少しは・・・・・・・・いや。

「双葉先生がなくて暗いのはよしとしよう。だが・・・・・・・・」

窓を開ける・・・・・・・・

風が・・・・・・・・死んでる。

雨も・・・・・・・・異常だな。

何も無い・・・・・・・・まるで暗黒世界。

保健室から廊下にでる扉が未知への扉に見える・・・・・・・・

けれど、いけないわけにはいかない。

そっと手をかけ、音を出さないように開く。

やっぱり・・・・・・・・真っ暗か。

とりあえず・・・・・・・・クラスに行くか。

周りを注意してみながら、保健室から右奥にある教室を目指す・・・・・・・・

・・・・・・・・
普段は近いはずの教室もこうなると、遥か遠くに感じる。

電気は・・・消えてる・・・か。

「誰がいるか？」

そつと開いて中に入る。

誰もいない。いったいなんなんだ？

教室を見渡すと、一冊のノートが誠の机に置いてあった。
見たこと無いピンク色のノート。

「誰のだ？」

表紙と裏表紙を見ても名前は書いていなかった。

とりあえず開くと、小さく「光坂司^{こうさかつかさ}」と書かれていた。

・・・なんなんだよ。

どれだけめくっても白紙。

何もかかれてはいない。ただのノート。

「何の為に？」

その時だった。

「どるううううううううう！」

大きな唸り声ともとれる音・・・

どこから？

学校内であることは確かだった。

念の為ノートを持って、教室を出る。

・・・音がしたのは？左か？

右に向かい、階段を二つ下りる。

「次は職員室だな。」

先生がいることを願って、職員室へと走る。

しかし・・・誰もない。

何だって言っただ？

自称神の悪戯か？にしちゃ・・・

「どるうううううううう！」

また？

今のは．．．．．上？

確かめに行くのは危険か？

じつとしてるのもあれだ．．．．．

「外行くか？」

考える．．．．．

真つ暗な学校．．．．．無人。

何かの叫び声。

職員室を出て、生徒玄関へ向かう。

足音．．．．．？

影に隠れる。

音は．．．．．職員室？！

足音は職員室へと消える．．．．．

そして。

「どるうううううううう！」

おいおい！

近すぎんだろ？！

靴を取り出し、急いで外へ飛び出す。

どこへ行く？

どこに．．．．．くそ。

家に行くしかないな．．．．．

家へ向かう道も、無人、無光．．．．．

世界から人が消えたつてのか？

自分の部屋に入る．．．．．

何も変わらない部屋。

畜生．．．．．

学校から持ち出したピンク色のノートを取り出す。

．．．．書いておくか。

他のノートなどは触れても石のように動かせなかった。

ノートに付属されていたシャープンを使って記述する。

真つ暗な学校、無人の世界。

謎の声．．．．．

．．．．．さてよ？

アレは．．．．．

思い出せ．．．．．保健室は俺のクラスの左．．．．．

俺のクラスから右下に職員室．．．．．

最初．．．．．声は教室の左から。

次は、職員室．．．．．上から．．．．．

次は職員室．．．．．から？

．．．．．全て俺がいた場所だ。

玄関のドアが開く．．．．．

階段を上がる音．．．．．

来る？！

どうする！

部屋を見渡す。武器なんてない．．．．くそっ！

そして．．．．．部屋のドアが開け放たれた。

「はっ．．．．．はあはあ。」

心臓が高鳴る。

「どるううううううううう！」

また、うなり声上がる。

「窓．．．開いてて良かった．．．．．」

屋根伝いにまゆの部屋に逃げていた。

もし、繋がっていなかったら、あの声の主に捕まっていた。

窓が閉まっていたら．．．．．

けれど、これも一時的．．．．．

確実に解るのは、この世界に人はいない。光もない。

そして俺が追われていること。

まゆの家の玄関が開く。

来たか．．．．．

まゆの押入れに確か日本刀があるんだよな．．．．．

小さい頃に、まゆの部屋に隠したものだ。

まゆの雛人形と交換した。

互いに離れることが合っても、それが守ってくれるからと。

雛人形は母親が部屋に飾ってしまったて手元にはない。

けど．．．．．

押入れの奥に、日本刀が立てかけてあった。

毎日手入れしているのか、埃一つ被っておらず、

お守りがついていた．．．．．

これは？

お守りはつけた覚えがない。

．．．．．よし。

他のものは取れないが、コレだけは取れた。

誠と私

お守りにはそう書かれていた．．．．．

そして、日本刀を鞘から抜く。

光が当たれば輝くだろう刀身・・・・・・・・
同時に階段を上がる音・・・・・・・・
来るか・・・・・・・・

鞘に収め、窓から出て電信柱を使って降りる。
正体を確かめるのは後だ。

学校に戻る・・・・・・・・

急いで学校へと向かって走る。

何が起きてるか・・・・・・・・

何故こうなったか・・・・・・・・

学校へ戻る必要がありそうだ。

「絶対戻ってやる！」

第12話 『暗黒世界』（後書き）

読んでいただき光栄であります（キリッ
なんか変なことになりましたね。
何でこうなったのか、解りません♪

感想等頂けると嬉しいです♪

第13話 『ピンクのノート』（前書き）

オリジナル第13話♪

キャラ設定通りになってるかな・・・心配

第13話 『ピンクのノート』

「高田くん、里倉くんは？」

「保健室なのでは？」

「いないのよ………」

「は？」

「双葉先生も抜け出すのは見てないって………」

「……彼は居ない。」

「高田くん、木角さん、闇坂くん、栗崎さん、野村くん………みんな居るわね？」

「先生！」

「はい？」

「あと1人居ますよ？」

健が、窓際の一番後ろに座る少女を指差す………」

「え？どこに？」

「は？先生………」

「冗談は聞いている余裕がありません。」

そう言い放つと、教室を出て行く。

「………どういう事だ？」

「えっと………幸一、総司朗、栗崎さん………平気か？」

「………問題ない」

「平気ですよ」

「………何か？」

「健」

「なに？」

「様子変じゃないか？」

久人と健が話す中、2人がそれを見つめる。

「可笑しいのは1人だけ。頑張って」

名も無き少女が、ピンク色のノートを取り出す。

「おいおい！何だよ！誰だ！」

誠が怒鳴る。

黒く大きななにかが、誠を撥ね飛ばす。

くっ・・・・・・・・

運動神経そんなに無いんだけどな！

鞘から日本刀を引き抜く。

「どるうううううううう！」

「お前誰だよ。」

軽くにやける。

闇に溶け込んでいるのか、姿が見えないのか・・・・・・・・
目の前に居るはずのそれは声だけしか聞こえない。

「動きを予測すれば・・・・・・・・？！ぐっ・・・・・・・・」

右側からの強い衝撃で吹き飛ぶ。

学校の校舎に突っ込み、音を立てて校舎の一部が崩れて煙が立つ。

・・・・・・・・予測とか無理。

ん？

これは・・・・・・・・

「・・・・・・・・何あれ」

遠くの方で上がる煙を少女が見つめる。

何の煙なんだろう・・・・・・・・知ってる気がする・・・・・・・・

あの場所・・・・・・・・なんだっけ・・・・・・・・

覚えてない・・・・・・・・私・・・・・・・・誰？

「行けば・・・・・・・・解るかな？」

裸足のまま、少女が煙の上がるところへ向かっていく。

「はっ．．．．．はあはあ。自称神に礼をしなくちゃな．．．．．
天罰食らってなきゃ、お陀仏だぜ」

誠は平然と立ち上がる。

「どるうううううううう！」

「何度でもきてみる。俺は死なない。絶対だ。」

何かが動く．．．．．

．．．．．感じれば良い。

無風の中の風。

左側に日本刀を振りぬくと、何かにぶつかりそれを両断？した。

「良し。このノート．．．．．助かったぜ」

床に広げられていたピンク色のノートには、「風を」と書かれていた。

「これなら．．．．．勝てる」

「どるうううううううう！」

「もう怖くない。見えなくても．．．音だけは消せないだろ！」

誠が日本刀を構えて笑う。

どこを切った？腕？脚？

多分腕だ．．．．．

左腕を落とした．．．．．次は！

右側に日本刀を振りぬくと、さっきと同じ感触。

よし．．．．．

その瞬間腹部への一撃が入り、校舎に突っ込む。
な．．．．．んだ？

音が聞こえなかった．．．．．

しかも．．．．．

口に広がる不愉快な味．．．．．

つばを吐くと赤くなっていた．．．．．
マジかよ．．．．．

「あ．．．．．ここ．．．．．」

少女が霊核高校の校門に立っていた。

「なんだっけ？覚えてる？私．．．．．」

少女が少しずつ、中へ入っていく。

「霊．．．．．核高校。私．．．．．知ってる。」

その時、大きな音共に、校舎が崩れ煙が上がる。

．．．．．なに？なんだろう．．．．．いかなくちゃ．．．．．
．

「うわあああああ！」

誠の叫び声が響く。

何度も、校舎にぶつかる。

あれから一方的だった．．．．．

誠は戦う時、どこかで「自分は死なない」という安心があった。

だから平気で正面に立ち、「何か」と向かい合った．．．．．

けれど、血を吐いたことにより、「死」への恐怖が生まれた．．．．．

．

怖い．．．．．死んでしまう。

それが反応を遅らせ、結果的に一方的な攻撃を受けることになって
いた。

「くそっ．．．．．死ぬのか？俺は．．．．．」

徐々に傷が増えていく．．．．．

しないはずの怪我．．．．．

出ないはずの血．．．．．

最初は死んでも良いやと思っていた。

神に逆らってやれると思った。

でも・・・・・・・・でも・・・・・・・・

「まゆ・・・・・・・・」

彼女と言葉を交わし、誓い・・・・・・・・

共に居ると、居たいと願って・・・・・・・・

あの平和な世界が続くようにと・・・・・・・・願って・・・・・・・・

死を減らそうと決意した・・・・・・・・

今は・・・・・・・・

今は・・・・・・・・

「死にたくないな・・・・・・・・まゆ・・・・・・・・」

その時だった・・・・・・・・

誰も居ないと思っていた世界で・・・・・・・・

「何・・・・・・・・しているの？」

自分以外の人がいて・・・・・・・・

何かでもなく、自分でもなく・・・・・・・・

声を発し・・・・・・・・

「・・・・そうか。ここに居たのか。」

誠が笑う・・・・・・・・

まるで、時間が止まったようだった。

「・・・・あとは、貴方次第」

名も無き少女がそつと微笑む。

・・・・・・・・まさか？！

総司朗が、少女へ近づいていく。

「・・・・・・・・どうかしたの？」

「お前・・・・・・・・光坂か？」

「ふふふつ。だとしたら？」

名も無き少女が不敵な笑みを浮かべた。

第13話 『ピンクのノート』（後書き）

なんでピンク？知らないです。なんとなくです。

危機的状況で、思い出すのは最愛の人・・・偏見ですか？

この話纏まってるのかな？

読んでくれて光栄です。

感想等頂けると嬉しいです♪

第14話 『誓いの言葉』（前書き）

記念すべきというほどでもない14話。

なんか色々、当初の予定から大幅にずれていく作品。

第14話 『誓いの言葉』

「お前……何をした？」

「総司朗？どうs……」

「久人は黙っている。」

「……冷たい人ね。久人くん、健ちゃん、幸一くん、まゆちやん。」

初めまして……だよね？」

「……そういえば、見たことあるような無いような……」

「はつきりしてよ、久人」

「君の名前は……？」

久人が聞くと、少女が微笑む。

「……光坂司俺の親戚だ」
こうさつかさ

「何ですって?!」

「私の紹介ありがと。何をしたか？ピンクのノートを彼に渡した。」

「……それか。」

「そういうこと。」

「話が読めないんだが？」

「……真冬。久人達を黙らせろ」

「はい。了解」

え？

まゆが返事をするとう立ち上がり、久人に近づく。

「真冬っておm_____ぐっ……」

「黙って」

久人が音を立てて倒れこむ。

「久人?!まゆ!なんで?!」

「彼女はまゆじゃない。そうでしょ?総司朗。」

「その通り。」

「どうゆ………」

健も、倒れこむ。

「鳩尾への瞬間的な一撃で意識を強制的に撥ね飛ばす……強引過ぎるわね。」

「司。なんで、邪魔をする。」

「私が光で、貴方が闇だから。」

「まゆを返せよ」

「……幸一か。」

「俺は、聞いた。お前とまゆが話してるのを。」

俺は見た、お前がまゆを殴るのを。

まゆに無理やりキスしたのも………」

幸一が席を立つて、総司朗に近づく。

「まゆに何をした!」

「君の見たとおりだ」

「まゆは、貴方と付き合えない、私は誠が好きだから。そう言ったよな?!」

「ああ。言った」

「それで何故殴った!なぜキスをした!」

「俺を振ったから。奪う為にキスをした。」

「ふざけんな!」

「貴方も……黙って」

「?!」

・ いつの間にか近づいていたまゆが、幸一の鳩尾に打ち込む……

「幸一君?!」

「へ．．．．平気だ」

明らかに苦しそうな表情で幸一が笑って手を伸ばす。

「ま．．．．ゆ。帰って．．．．こ．．．．」

最後まで言えずに倒れこむ。

．．．．幸一君。

「司。君も。」

「．．．．ゲームオーバーなのかしら。」

「そうだな。今回は俺の勝ち。まゆは俺のものだ。」

総司朗がにやつと笑う。

「まゆ．．．．やつと．．．．会えた。」

「まゆ? 誰? 私?」

「お．．．．おい。「冗談は要らないぜ?」

「ごめんなさい。私は私が誰か解らないの。」

とても大切な何かを失くしてしまった．．．．

そんな気がする．．．．

「まゆ．．．．」

「どうしたの?」

誠の前に立っていたのはまゆだった．．．．

けれど、彼女は彼女ではなくて．．．．

たった一つ．．．．

形を残していただけで．．．．

何も覚えていなくて．．．．

「なんで．．．．泣いているの?」

いつかも聞かれた．．．．

いつのまにか、謎の声は消えていた．．．．

「悲しくて．．．泣いてるんだ」

答えた．．．．

裸足でヒタヒタと音を立てて、誠に少女が近づく。

「大丈夫．．．．？私がいるから、泣いて良いよ？」

「っ．．．．．」

記憶が無くても．．．．

彼女の姿で．．．．

彼女のおいで．．．．

彼女の声で．．．．

彼女の優しさで．．．．

「まゆ．．．．俺達．．．．付き合ってるんだ」

少女の頬を両手で触る。

「なあ、まゆ．．．．。俺達は結婚もしてるんだ。小さく式も挙げたんだ」

少女は静かな黒い瞳で誠を見つめるだけで、何も言わない。

「っ．．．．お前がさ．．．．」

あの時のことを思い出す．．．．

静かに見つめ合い．．．．

「．．．．．どんな時も」

え？

「何があっても私は貴方を愛し続ける。

例えばどんな妨害があろうと、困難な道であろうと．．．．」

まゆ．．．．．？

「貴方も．．．．言って？お願い。」

「・・・どんなことがあろうと、何があっても、俺はお前を愛し、守り続ける。

それがどんな、茨の道であろうとも」

二人で微笑んでキスをする・・・

光が二人を包み込んでいった・・・。

第14話 『誓いの言葉』（後書き）

どうしてこうなった（第一声）。

数話前から、予定外の方角性だったりする。

真冬はミスじゃないので大丈夫です。

朗読有難うございました。

またのご来店を・・・・・・・・

感想等お待ちしております。

第15話 『決着』（前書き）

オリジナル作品。

作者自身、先のわからない情緒不安定な小説。

第15話 『決着』

『決着』

「まゆ?!」

目を覚ますとベッド・・・保健室だった。

声に驚いたのか慌ててカーテンが開かれ双葉先生が顔を覗かせた。

「里倉くん?!どこにいたの?!」

「行かないと!」

飛び起きて、保健室を飛び出す・・・

まゆは教室のはず・・・

「・・・・・・・・ゲームオーバーなのかしら。」

「そうだな。今回は俺の勝ち。まゆは俺のものだ。」

総司朗がにやつと笑う。

「真冬。」

・・・・・・・・?

「真冬?」

「私は真冬じゃない。栗崎・・・・・・・・」

「まゆ!」

まゆの名前を二人の声が呼ぶ。

1人はまゆ・・・もう1人は、開け放たれた扉のところに立つ・・・
誠。

「誠・・・・・・・・」

「総司朗!」

「ちっ・・・・・・・・。」

「誠!」

「まゆ。お前の暗号解り難いんだよ」

「あはは。ごめん。」

まゆと誠が笑いながら近づく。

「暗号だと？」

「……ただ……少し……計算問題が解けないのがあって……言うくだらないことなの。」

まゆがにこつと微笑む。

「それがどうした？」

「わざわざ、間隔あけて言葉を言ってるのよ。

これは私たちが小さい頃遊んでた言葉隠し。」

「ただの「た」少しの「す」

計算問題が解けないのがあって……の「け」

と言うくだらないことなの「て」間隔ごとに分かれた先頭の言葉」

誠が紙に書いていく………

「た……す……け……て？」

「そういうこと。まあ、確証が持てなかった。

あの世界でまゆに会ってやっと確定したんだけどな」

「記憶は消したはずだ」

「心の記憶は消したか？」

「そんな非科学………」

「おや？君も俺達も非科学だろ？」

あっ………

声の方向を見ると、全身白に包み込まれた人………

「お前！なんで………」

「あれに介入は出来なくてね。」

「マイラー卿お久しぶりね。」

「おや、大天使ミカエル嬢」

「ふふふ．．．くすぐったい呼び方ね。司で良いわ」

「マイラー卿。彼の神体化は君の仕業か」

「だとしたら？」

「勝ち目が無いわけだ。当然、彼女が嫁なのだろう？」

「ああ。」

誠が日本刀を総司朗に向ける。

「おいおい．．．戦う気は無いよ。またいつか．．．奪いに
来るよ」

総司朗が不敵な笑みを浮かべて消える。

．．．．．。

「．．．．．総司朗って．．．．．」

「彼はね。名前の通り、闇を司る者サタン」

「．．．．．は？」

「悪魔じゃなかったっけ？」

「そうよ。彼は悪魔。実際に彼女の魂を閉じ込めていたでしょ？」

「確かに．．．．．ん？だれがあそこに？」

「それは私よ。」

司が微笑む。

「．．．．．誰だっけ？」

「光坂 司よ。ピンクのノート」

「あっ．．．．．これの？」

誠がピンクのノートを渡す。

「それは連絡用ノート。このノートに書いたことがもう一つのノ
ートに送られる」

司が、ノートをもう一冊見せる。

「助かったよ。」

「．．．．．行動したのは貴方よ。」

「そついや、あの唸り声は．．．．？」

「あれは、影の住人。貴方が世界に割り込んだから排除しようとしたのよ。」

「怪我するようになったのは？」

「敵が対神体用に切り替わったからだな」

「なんだそれ．．．．．」

「今度話してやるよ」

「ありがとな。帰るんだろ？」

誠が微笑む。

「誠くん。きつとこれからも辛いかもしれないけど．．．．頑張って」

誠と司が握手し．．．．．

「じゃあな。」

司と白い人が消える。

同時に教室に千賀子先生が入ってきた。

「さ〜と〜く〜ら〜くん！」

「うげっ．．．．．」

ソウイエバ．．．．．キエタndaヨナ．．．．．

怒った表情で誠に近づく。

くっ．．．．．

折檻を覚悟して目を閉じる．．．．．が。

優しい抱擁感が訪れた。

「え？」

「良かった．．．．．居なくなっちゃったって聞いて．．．．．心配したんですよ．．．．？」

．．．．．先生。

「ごめんなさい。」

泣きながら微笑む先生・・・・・・・・

「まゆもごめんな？」

「なんで？」

「すぐに助けてあげられなくて」

「ばあか。」

まゆも微笑む。

今回はサタンの襲来があつた・・・・・・・・

気づけずにまゆを失いそうになつた・・・・・・・・

強くないといけない・・・・・・・・

人として・・・・・・・・神として・・・・・・・・

そうして密かな戦いはおわり、一息つくことが出来た・・・・・・・・

けれども

外の台風は一層強まり、俺達は学校宿泊となつた。

不安を煽るように、外は闇に包まれどんよりとした空気が漂っていた。

第15話 『決着』（後書き）

あれ？

話し纏まった？まとまったことにして（一人）

いえいえ、いずれ説明します♪

まゆは、魂がすり替わっていた……なにと？（知りません。

どうしよう。どうなるんだろう……この小説。

読んでくれて有難うデス♪

感想等頂けるともっと嬉しいです。

第16話 『雨と風とお化け』（前書き）

もつすぐ20話になるってところの中途半端な部分。

オリジナルだし、どういった方向性か。
謎の小説。

第16話 『雨と風とお化け』

台風で勢いづく風が、窓を割ろうと言わんばかりに吹き付け、揺れる窓ガラスの音が、校内に響きわたる……………

「風強いな……………」

「そうだねって言うかさ……………誠」

「なに？」

「なんでこんなこと……………」

「いや、だって学校だよ？夜だよ？」

「そこまではわかるけど……………七不思議なんて……………」

「怖いのか？」

「うつ……………」

怖いのに怖くないそぶりを見せるまゆ。

けれども風が一瞬強く吹き、窓を強く叩いただけでビクツと体をはねさせていた。

「怖いんだろ？」

「怖くないもん！」

まゆの真剣だけど、どこか可笑しい表情に、小さく笑う。

ことの始まりは……………

「なあ、学校だぜ？」

千賀子先生が消灯に回った後の、午前2時。
久人の提案だった。

「学校だけど？」

まゆが首を傾げると、健が笑う。

「学校の怪談……………やるべきでしょ？」

「またか。」

「またって？」

「あ。いや．．．．なんでもない」

正直、あの暗黒世界はホラーそのものだったんだが。

「まあいいや。んで。」

久人が棒が数本入った箱を取り出す。

5本．．．．．？

総司朗と司が．．．．．。

「誠。私達しか覚えてないみたい」

「そうか．．．．．？幸一？」

「．．．．．ん？」

「ぼうつとしてるからさ。」

「．．．．．何でもない。」

「なら良いけどな。」

ん？さてよ？

5人．．．．．？

「1人あまんぞ？」

誠がにやつと笑う。

一人で回るといふ．．．．．

これは、まゆを1人に．．．．．

「久人．．．．．」

「ん？」

「．．．．．了解」

しかし．．．．．

「あう．．．．．私1人?!」

「．．．．．まゆ。俺と変われ」

「え？」

「男同士とか嫌だからな」

「幸一。」

「悪いな。俺が先に行かせて貰うぜ」

幸一がそう言って教室を出て行く……
なんだ？ 一体。

そんなこんなで、交代で誠とまゆが巡っている。

「まゆ。」

「……………」

そつと自分の唇に触れる。

「……………まゆ？」

「え？ なに？」

「ぼつとするなよ。」

「ごめんね？」

「はあ？ どうした？」

「無視しちゃって」

「別に気にすることねえよ」

軽く微笑む。

その時、遠くで悲鳴が上がる。

「きやあああああ！！」

「なんだ？！」

「「まゆちゃん！ 誠！」」

「久人と健？ 幸一は？！」

「それが……………」

「いないの？」

「うん。」

「手分けして探すぞ！ さっきの声で先生たちも出てくる。見つかるなよ」

誠達が、2人ずつで別れる。

悲鳴の理由と幸一・・・・・・・・関わっていないよな？！

「久人！こつちだ！」

久人と誠が悲鳴の方へ、まゆと健が幸一を探しに行った。

「うぐつ・・・・・・・・・・」

誠が立ち止まる。

「誠！止まるな！先入るぞ」

「ちよつ？！」

久人が誠の隣を通って扉を開け放って入っていく。

「きゃああああああ！」

・・・・・・・・馬鹿野郎。

扉には女子トイレと書かれていた・・・・・・・・。
そして。

「えつと・・・・・・・・？」

「私がトイレに居たんです・・・・・・・・そしたら、急に声が・・・・・・・・」

「他に女子が・・・・・・・・」

「いえ！声が男の人でした！」

「・・・・・・・・久人か。」

「いやいや。俺違う。健と一緒に居たしな」

「・・・・・・・・とりあえず、先生たちが来ると思うから。説明をしなよ。」

「・・・・・・・・はい。」

二人が、行こうとすると女の子が誠だけを掴む。

「？なに？」

「あの．．．．」

「ん？」

「来て欲しいところが」

「別いいけど．．．．」

「．．．．誠さんだけで。」

「え？」

誠と少女が、久人を置いて走っていく

．．．．幸一。

「まゆちゃん。」

きつと．．．．あれが正しければ．．．

「まゆちゃん！」

「へっ？」

「平気？」

「うん。」

「私は下いくから。上よろしくね」

「うん。」

まゆが階段を駆け上がったいく。

息を切らしながら、屋上の扉を開ける。

強風と雨が吹きつけ降り注ぐなか、

屋上の中心に人影．．．．．

それが振り向く。

「．．．．まゆ。」

「幸一．．．．」

まゆも屋上に出て、幸一に近づく。

「貴方は覚えているのよね？」

「総司朗のことか？」

「うん。」

「覚えてる。」

「．．．．．ということ。」

「まゆが、総司朗と何したかも知ってる」

「．．．．．ごめん。」

「まゆ。あのことは、俺もお前も覚えていない。」

「え？」

幸一が、まゆに近づいていく。

「幸一．．．．．」

「あのさ。まゆ。誠は知らないんだから、気にする必要はない」

「でも．．．．．でも！私のこの唇に残ってる！

忘れたくても．．．．．忘れられない．．．．．」

「．．．．．だそうだ。」

「さつ。お兄ちゃん。」

「え？」

屋上の室内の影から誠が飛び出す。

「なつ．．．．．誠？」

「．．．．．」

聞かれた．．．．．の？

私．．．．．私が総司朗とキスしたこと．．．．．

知られた？！

「．．．．．まゆ。」

「嫌．．．．．」

「まゆ？」

「嫌ああああ！来ないで！」

ツ．．．．．。

「酷い。酷いよ幸一。」

「まゆ！ま_k」

「楽しいでしょうね！私の後悔を彼に教えて！」

「ちが」

「何が違うの？誠……ごめん。」

「まゆ……。」

「私……最低だよな？」

「まゆ！解ってるから！お前がお前じゃない時に起きたことだって！」

「でも……でもs?!」

俯くまゆを誠が抱き寄せる。

「良いって。まゆ。それだけでお前を嫌いになったりするもんかよ」

「誠……」

「まゆ……」

「うわああああん」

雨の音も、風の音も……全てを押し切って、まゆの泣く声が響く。

自分の意思ではないけれど……好きでもない人とキスをして……それが、心に重くのしかかっている……知られれば、嫌われると思っている……でも彼は……許してくれた。

雨が全てを流していく……風が全てを吹き飛ばしていく……

朝になればきつと……晴れるだろう……雨に打たれながら、誠達は小さく確信して……

微笑んでいた。

「んで、幸一。どういう事だ？」

教室に戻って聞いたです。

「いや、さっきのことを話す為に必要だった。」

「全員グルか。」

「久人と健に頼んでさ。久人にお前を。健にまゆを……ね。」

「二人とも……。」

「なんか、深刻だったから協力した。」

「そっか。」

軽く笑う。

こいつらも最高の友達だ。

「そっいゃ、幸一。」

「ん？」

「女子トイレの女の子。あれはびびったぞ。」

「そうそう。私も驚いてさ。幸一も言ってくれないと」

「急に居なくなつて礼もしてないし……。」

「え？」

「え？」

「え？」

3人が見詰め合う。

「冗談はよせ。お前らにしか頼んでないぞ」

「いやいや。お前こそ。」

「はははは。何を言うか。」

「はははは。お前だろ。」

笑顔のまま時間が止まる。

「マジで?!」

女子トイレの女の子・・・・・・・・
彼女を幸一は知らなかった・・・・・・・・
では一体・・・・・・・・誰だったのだろうか・・・・・・・・

第16話 『雨と風とお化け』（後書き）

平和な話・・・私が書ける限界の平凡な世界。

いやあ、学校といえは七不思議。

学校宿泊してみたい♪

読んで頂き感謝します♪

感想等頂けると、発展に繋がるかもしれません。

第17話 『居候』（前書き）

第17話 ♪

こちら辺で新章はいつておきます ♪
章で分けてないんですけどね ♪

第17話 『居候』

「うぐぐぐ………」

「私は平気だったのに。」

「面目ない………」

「はい。食べて？飲み込める？」

「大丈夫なんだが………学校は？」

「細かいこと気にしすぎるのは嫌われるよ？」

「………いや。そういう問題じゃ。」

「昨日の台風真つ盛りな屋上で話しこんでいたのと、

「昨日の昼間も39度もの熱があつたためか、

「見事に悪化して風邪を引き、現在療養中だった。

「まったく」

「お代わりは？」

「貰うよ」

「………まゆの手料理を食べる機会は滅多にないしな。
心の中で、呟く。

「言える訳が無い。」

「はい。あゝん」

「あむ。」

「まゆの嬉しそうな表情を見れるのは嬉しいんだけど、
この「あゝん」と言う動作が、気恥ずかしい。

「まあ、全身鉛のように動かないので、文句も何も無い。

「悪いな………」

「え？」

「重く、痛む額に右手のひらに乗せる。

「………まだアツイ。」

「親が、仕事で居ないからって学校まで休んで……
親が休めば……」

「別に気にしてないよ？」

「でも……」

「私から頼んだんだし」

「……え？」

サボる口実？

それとも……？

答えはすぐに解った。

「誠のお嫁さんだもん。夫の面倒はしっかり見てあげないとね？」

子供っぽさが残っていて……

ままごとの劇中みたいに軽く言って……

でも……本気で。

彼女の微笑みは様々な感情がこもっていた……

「そりゃ、嬉しいね。」

「あんまり嬉しそうじゃないけど？」

「馬鹿言え。これまで以上に無い幸せですよ。」

冗談に聞こえるような、普段と違う生真面目な喋り方で、
自分の「恥ずかしい」を押し殺す。

「ありがとう」

照れくさそうに、まゆが微笑む。

「こっちこそ。」

自分もやっぱり恥ずかしいな。

夕日が見えてきた頃……

二人だけの、優しくて暖かい空間。

そんな空間に割り込む愚か者がいた。

窓の外から聞きなれた声。

「おい。誠」

「まゆ。居留守だ！」

「うん！」

二人でクスツと笑う。

ごめん幸一。今この空間に……
けれど……

「お前の玄関前に客が居るぞ？居ないのか？」

客……？

まゆと顔を見合わせる。

呼鈴は鳴っていない。

わざわざ、鳴らしていないのか？

電池が切れてるのか？

なんにせよ……

「ごめん、まゆ。頼む」

まゆにお願いし、来客を待つ。

「えつと……？」

確実に知り合いではない。

でもどこかで見た気もするんだが……

客と言うのは、

茶髪の長髪を靡かせている謎の少女だった。

「初めまして。」

「……初めまして。」

「え？知り合いじゃないの？」

「はい！違います。」

そんな威張らなくても良いだろうに……………
ん？だったら……………

「あのですね？お願いがありました。」

「親が外出中なんだけど。」

「セールスとかじゃないんです！」

「名前言わないと駄目だよ？」

まゆは何かが気に食わないのか、ふてくされた表情で少女に言う。

「あつ……………そうですね！ごめんなさい。」

私、倉持^{くらもち} 香奈^{かな}って言います。」

「俺の友達から親戚まで。そんな名前は……………」

「誠。初めに、初めましてって言ったでしょ。」

まゆがクスツと笑う。

「んで？お願いって？」

「私を、この家に居候させて欲しいんです。」

「「え？」」

「ですから、居候を……………」

「にとしては図々しくない？」

まゆがキツと睨む。

「……………何を怒ってるんだ？」

「……………俺は決定権ないから。親に聞いて。」

「どこに？」

「どこか。」

軽く微笑んでみる。

「うつ……………うつ……………」

やばっ？！

「な……………泣くな！ま……………まゆ……………」

「知りません。」

「なぬ?!」

「うえ……うつひつく……」

嘘泣きと思えるが、閉じた瞼の下に小さな水滴。
わりと本気だった。

「解った。電話持つて来い。親に聞くから」

「ありがと……ございます。」

一礼して、部屋を出て行く。

「誠。どうするの?」

「どうしようもないよ。親の判断にゆだねる。」

コレばかりは、俺に関するから、神権使えないしな」

「使えたらどうするの?」

「そうだな……入れてあげるんじゃないか?」

「なんで?」

「困ってるから。」

「あら、優しい。」

ぶいっとまゆがそつぽを向くと同時に、香奈が電話を持って戻ってきた。

えっと……

番号を押して、連絡。

……

鳴り止まない着信音。

切ろうとした時に、通話が始まって、留守電の声が流れる。

「えゝ。ただいま。電話に出るの面倒なので。ピーって規制され

「母さん。」

「今忙しいみたいです。」

「冗談よして。急用なんだ。」

「なに？まゆちゃんと結婚？きやあゝステキー！」

「それもあるけど、あとで。」

「へえ。」

「女の子に居候の許可申請された。」

「承諾しちゃえば。」

「軽いな。」

「という訳で、忙しいからまたね。」

一方的に電話を切る母親。

何が忙しいだ。

株で儲けてるだけだろうが。

まあ、株主だし。どっかの社長さんとかと社の方向性について会談してるんだろうけど。

「誠はなんだって？」

「女の子が居候したいって」

「もちろん許可だ。」

「でしょ？ドロドロした三角関係が見れそう……」

「ぬふふふ……若い子若い子……」

「里倉夫妻……？」

「あつ。ごめんなさい。話し続けましょ」

……色々と駄目な両親である。

「という訳で。良いつて」

「本当ですか？！」

「……………」

「嘘ついても仕方ないだろ。」

「私、万引きから、ごみ漁りまで。なんでも出来ます！」

「どっちもするな。」

「貴女、ご両親は？」

「居ません！」

「なん．．．．．」

まゆが言葉を止める。

改めてみると、さほど綺麗ではない服装だった。

所々擦り切れたり、穴が開いている水色のワンピース．．．
彼女の持ってきた大きなスーツケースも所々欠けていた。

「どうかしました？」

「貴女、他に洋服無いの？」

「ありません。」

「あのケースの中身は？」

「お金です。」

にこつと微笑む、香奈。

「私の洋服貸してあげるから、それ着たら服を買いに行きましょう」
「嫌です。」

「え？」

「私の、ご主人は誠さんですから。」

「は？」

「よろしく願いますね？」

「ツ?!．．．．．勝手にしなさい。」

「まゆ?!」

窓から出て行くまゆ。

窓から出るのは、大抵怒っている時。

「あの。」

「なに？」

「服を買いに行きましょう？」

「．．．．．まゆも気になるけど．．．．．」

「まゆも居ないと駄目」

「なんで？」

「俺はセンスないし、今日は具合悪いんだ」

「……………そうですか。ならお世話しますっ。」

残念そうにでも楽しそうに言う香奈。

誠も、特になんの思いもなく頼む。

「ばあか。」

自分のベッドの上で膝を抱えて呟く。

私……………どうしよう。

まゆの明るさは次第に影に隠れていった。

第17話 『居候』（後書き）

某ゲームの誠くんみたいな展開は避けるつもりです。

いやあ、新しいキャラ作らないとなってる思いながら
前のキャラ使うという。

え？香奈ちゃん？前から出てます。

読んでくれてありがとうございます♪
感想等頂けると嬉しいです。

第18話 『増える……謎』（前書き）

あと少しで20話♪

これといってイベントもないけれど。

コメディではありません。ご注意ください。
かといって、暴力的でもないけれど。

第18話 『増える……謎』

「まゆ。」

「誠……と。香奈ちゃんは？」

できるだけ、いつもの調子で彼と話す。

正直な気持ちを言えば、香奈ちゃんが誠と二人で過ごしていることに嫉妬、嫌悪、憎しみ、怒り……。そんな感情ばかり募る。

できれば、今の私の回答に対して、「追い出した」と言っただけ。

「俺の昔の服を着てもらってる。すぐ来るよ」

そう言っただけ。

嬉しいと一緒に、不安に思う。

あの表情が、私ではなく、彼女へのもではないか？……。と。

「すいません、お待たせしました！」

暫くして、誠の家から香奈が出てきた。

「今日はよろしくね？」

「……。はい。」

私の言葉に素っ気無い返事。

私は勘が鋭いのだろうか。

それとも、彼女が曝け出しているのだろうか。

どちらにせよ、私は確信が持っていた。

彼女の私への態度の理由について……………

「へえ。こういう服があるのか。」

「誠！これどう？」

「俺に聞いても解らん」

「もう！これを私が着たら可愛い？可愛くない？」
必要以上に誠に近づく香奈ちゃん……………。

私は服を見ているだけ。

時折、彼女の服と、近くの服を頭の中で着せ替えて、これはどうだろう？と、

選んでもいた・・・・・・・・彼女に言っても否定されたり却下だろうから、

誠を誘導して、見せる。

「じゃあ、これで。」

誠がどうだ？と聞いた服で決定した。

箱を開ければ、私が選択したのだけれど・・・・・・・・

「香奈ちゃん。似合うと思うよ？」

微笑んで言う・・・・・・・・けれど、小さく頷くだけだった。

・・・・・・・・私にどうして欲しい？

聞かずとて、明白。

それは、私も彼女に対して思っていることだから。

近づくな。

ただそれだけ。

「誠。」

彼女が会計する中、話しかける。

「どうした？」

「あの子・・・・・・・・本当に初対面？」

聞くと、暫く観察するように彼女を見て首を振る。

「覚えてない。どつかで見た気もするけど・・・・・・・・」

「曖昧な答えは止めて！」

「なっ・・・・・・・・まゆ？」

思わず・・・・・・・・怒鳴った。

関係が知りたかった。

初恋は一目ぼれ・・・・・・・・それは許せる。

けれど、居候したり、必要以上に・・・・・・・・

そこまでの理由。

彼女は、誠を知っている。

そう、直感していた。

誠の薄くなった過去の記憶。

けれど、彼女からみた、彼との記憶は色濃く残っているのだろう・・・

「終わりました」

手をふりながら走ってくる香奈ちゃん・・・・・・・・

私は、可愛いとは思えない。

目的を果たした私達は、帰ることにした。

誠は、昼飯くらいは。と言っていたけれど、

彼女の傍に、彼女が居る空間に、

私は身をおいておきたくなかった。

時折彼女の見せる表情に、仕草に、雰囲気・・・・・・・・

苛立っていたから。

部屋で1人佇む。

彼のとつてくれたぬいぐるみ。

全ての始まった日。

その記憶が、走馬灯のように浮かぶ。

「・・・・・・・・私。どうしたらいいの？」

ぬいぐるみに聞いてみる。

こんなこと、誰かにいえることじゃない。

「私・・・・・・・・あの子が嫌い。憎い・・・・・・・・嫉妬してる・・・・・・・・」

頬を涙が伝う。

彼の優しさ・・・・・・・・

彼の優しさが、彼女を救っている。

きっと、今の私を誠が知ったら軽蔑する。

年下の子に、様々な苛立ちを覚えているのだから。

ぎゅっと力強くぬいぐるみを抱きしめる。

冷たかった。暖かくなかった。

優しくなかった。言葉がなかった。

それでもずっと、ぬいぐるみを抱きしめて、泣いていた。

「・・・・・・・・」

ベッドに座って窓の外を眺める。

小さく溜息。

「どうしたの？」

「ん？なんでも。」

今日のまゆは元気が無かった。

2人とも仲が悪いようにも見えた。

何が原因？

俺が原因なんだろうか。

「もしかして、まゆ姉？」

香奈が目を光らせて聞く。

「別に良いだろ。何だって」

素っ気無い返事。

居候である香奈にまゆとの関係は関係が無い。

割り込まれるのは好きじゃない。

でも。

「良くない。」

香奈が俯いていた……

「良いだろ。お前に関係なんて……」

「あります！」

「は？」

「私は！貴方が居るから今ここに居るんです！」

「意味解らない……」

「覚えてませんよね。些細なことですもんね」

悲しそうに言い部屋を出て行く、

暫くすると、スーツケースを引いて戻ってきた。

「何？」

「この中……見てください。」

スーツケースを香奈が開ける。

「な……え？」

「凄いですよね？これ。」

スーツケースの中にあつたのは、大量の1万円札。

その割りに貧相……え？

「覚えてますか？宝くじ。」

香奈が微笑む。

「まさか……え？」

「貴方が並ばずに居て、私が買ったから、3億円当たった。」

そうか……

この子は……

倉持香奈。

くらもちかな。

あのひらがなで書いてあった名前。

「・・・・・・・・だから？」

「私、貴方を探しました。」

「・・・・・・・・なんで？」

「お礼をする為」

「は？ただ、買わなかった・・・・・・・・」

「でも、それが私の生きる結果に繋がった。」

「けど・・・・・・・・」

「私は貴方に、一生仕えます。」

「は?!」

彼女は、単刀直入に言った。

しかし、この時・・・・・・・・

ある、重大な事件がおきていた。

それは・・・・・・・・

俺はあの時・・・・・・・・神体化。

見えず、触れずの状態だった・・・・・・・・

なのに・・・・・・・・なのに、香奈は見えていた・・・・・・・・？

第18話 『増える……謎』（後書き）

途中まで、まゆ視点♪

彼女は一体何者？（さあ？

読んでくれて有難うございます。
感想等を頂けると嬉しいです。

第19話 『まゆと香奈の心』（前書き）

ごめん。あと1話で20話です。
謝る理由それは特にありません。

余震が気分を悪くする。
けど、止まない執筆。
でも駄文。

何の意味も無い、前書き。

第19話 『まゆと香奈の心』

いきなり、居候。

そして、一生仕えます？

この子は一体……。

「あの時、宝くじ売り場の横に誰が居た？」

「え？」

「いいから。答えて。」

「貴方と、白い服の人。」

完全に見えてる。

それはつまり、この子も何らかの方法で、神に接しているという」とだ。

けど……。

「なんで、仕えるの？」

「私、家も親も何も……ここに
あるお金位しかなくて……
酷な質問しちゃったか？」

「だから、ご奉仕するんです」

「ごめん。関連性が全く見えない。」

「ですよ。私も俄かに信じられなくて。」

「どういうことか、説明して」

「はい。ご主人様。」

「それ止めて。」

「じゃあ、誠さん。」

「……まあマシ。」

小さく頷く。

少なくとも、この年齢でご主人様と呼ばれたくないし、ご主人様という、性格も風貌もその他もろもろ無く、更に、一番拒絶されるのは、年下である彼女に、ご主人様。なんて呼ばれているのが知られたら、犯罪者に仲間入りできるかもしれない。それだけは、断固拒否だ。

「あの日、私は宝くじなんて買う予定はありませんでした。」
「……………」

「実は、予言なんです。」
「……………」

神になる前の俺だったら、確実に馬鹿にしているのか？ 帰れ。とかだったろうが、今は神様代行とかやってるし、神様自称だったり、人間化サタンに出会うなど、皆の非日常＝俺の日常こうなっている。ならば、みな「はっ？ 嘘つくんじゃない」＝嘘じゃない。というわけで、予言くらい信じてみる。

「おどろきませんね。」
「まあ、色々思うところがあるもんで。」
「続けて良いですか？ ごしゅ——誠さん。」
「思わず呼びそうになるのがご主人様か？！」
「うん。」

「では。それであの日もダンボールかじって生きていこうかと思っ
てたんですが……………」
「いや。あのごめん。君は……………」
「ホームレスでしたっ。」

にこやかに、さも当然のような曇りの無い笑顔。
「そ……………そうか。」

可哀想と思えば良いのか、なんなのか。
頭の中がバーストして、煙を吹きそうだ。

こんなことが、平気で言えるほど、

それに馴染んでしまっていたという事か……………

軽く微笑むと、彼女も微笑む。

なんだろう……………なんか。

「続けますか？」

「あつ。頼む。」

「はい。それで、ダンボールを探していたんですが、
ダンボールの積み重なった所に行っただけです。

そしたらなんと、文字を読んでいたら繋がっていたんです。」

「……………は？」

いやいや、なにその偶然。

割れ物ミカンって具合か？

「宝くじ、当たる。白と少年、隣って。」

「……………まじで?!」

白は恐らくもなく、確実に自称神だ。

少年は俺だと思う。

隣というのは、俺達が宝くじ売り場の横に立っていたから。

「本当です。それで、買ったんです。」

「まあ、解った。で？俺に奉仕ってのは？ダンボールのお告げ？」

「いえ、それはですね。ガタイの良い数人の男の人に、

哀れな少年にご奉仕を」と言われたので、

宝くじを私が代わりに買ってしまった貴方だと思って……………」

「……………絶対に意味が違う。」

「え？」

「いや、ガタイの良い人達どうしたの？」

「お礼して、私走っていったので……………」
「うん。良かった。」

それはまあ、色々と危ない方だったんじゃないかなって思うんだけど、

無知なの？鈍感なの？

そのガタイの良いお兄さんたちは下手したらヤクザさんでは？

最悪、今頃外国に居たかもしれないぞ、この子。

「つまり、その結果……………」

「はい。」

笑顔で言う。

正直、帰って欲しい。

けれど、親も家も無いなら、

またガタイの良いお兄さんに話しかけられても困る。

ただ……………」

「居候するのは構わない。けどさ、まゆに対してああいう態度は止めてくれ」

「何故ですか？」

「何故って……………」

「良いんです。貴方には私が居るから。」

「は？」

「私が居るのに、他の人なんて駄目ですよ。許しませんよ。

酷いですよ。また捨てるんですか……………」

「ちよっ……………」

「私が貴方の傍に居るんです、他の女なんて要らない。

私が居る。捨てないで。私だけを見てて。じゃないと……………」

「……………」

「私……………死にますよ？」

香奈が微笑む。

全くと言って良いほど、思考が追いつかなかった。

彼女は彼女で、彼女ではなくて、

けれども、彼女だった………

ただ、微笑ましいと言うより、背筋の凍る………恐怖。
最後の言葉の笑み。

あれは、優しい、暖かいではなく、

冷たく鋭い。

それに込められるのは、脅し、脅迫。

「香………奈ちゃん？」

若干の恐怖に駆られながらも名前を呼ぶ。

「はい？なんですか？」

いつもの雰囲気を纏う声。

………幻覚？

「大丈夫ですか？」

「ッ?!」

「あつ………」

彼女の伸ばした手を思わず弾く。

「ごめん………反射的に。」

「い………いえ。まだ昨日の風邪が残っているのかも。
私が食事作りますね？」

「ああ。ごめん。」

親はあと2日ほど、帰るのが遅いらしい。

何がどうなったら、宿泊することになるのだろうか。

いえる事は、確実に仕事で宿泊ではない。

携帯電話を取り出す。

慣れた手つきで電話をかける。

「……………」

「……………もしも?」

「……………俺だけ。」

「うん。」

その小さな会話で、相手の違和感を感じ取る。
長い付き合いだからこそ。

「まゆ。どうした?」

「……………別に。」

「そうは、思えないけどな。」

「何でもないって」

何でもない。

出始めに、

「俺だけ」

大体まゆは、

「オレオレ詐欺はおやめ下さい。」

こう答えてくる。

けど、うん。と言うだけ。

相当、気が滅入ってる……………なら。

「何でもないはないと思うけどな。」

ちよっと、笑い口調で言う。

こっそりと部屋を抜け出す……………。

屋根を伝って歩いていく……………その先は。

「本当に、何でもないから。」

「そうか?」

「うん。」

「ぬいぐるみ抱いて寝るような性格か?
飾るのに意味があるんじゃないんだっけ?」

「え？」

急いで窓を見る。

「誠・・・・・・・・・・。」

「なにやってんだよ」

馬鹿だなあ・・・・・・・・・・

わざわざ、こつちに来るなんて。

いや、私が馬鹿なんだ。

彼が、誠が私を見捨てるんじゃないかって一片でも思った。
最低だ・・・・・・・・・・

「誠。」

「ん？」

「そのままだと、不審者に思われるよ？」

「なぬ?!」

「あはははは。」

香奈ちゃんがいようが、関係ない。

私と誠の関係は壊させない。壊れない。
だから・・・・・・・・平気。

「お前は笑ってるのが一番だぞ。」

「また、そういうことをh————」
喋らせまいと、私にキスをする。

こういうところだけは、ちゃっかりしてるんだから。

「もうすぐ夕飯なんだ。またな。」

微笑んで、誠が帰っていく。

私も軽く微笑む。

「大好きだよ。誠。」

彼の背中に、そう告げた。

第19話 『まゆと香奈の心』（後書き）

香奈のキャラ崩壊？

え？だって明確にしてないから……

というか、こういうキャラいても良いよね？って思ってた。
某ゲーのま。とが主人公の学園のやつを見たせいです。

まゆ！頑張れ♪

読んでくれてありがとうございます。
感想等頂けると嬉しいです。

第20話 『いつも通り』（前書き）

記念すべき20話♪

大して、ないけれど・・・
番外編でも考えようか・・・

第20話 『いつも通り』

「学校ですか？」

「そう。学校。」

朝、いつも通りと言えるだろう。

まあ、メイドというか家政婦と言っか。

意味は近いしどっちでも良いけど、そんな感じの子がいる。
内容は居候なんだけれどね。

「母さん達は明日帰るって。」

「そうですか。2人だけの生活とお別れですね。」
悲しそうに、香奈が言う。

「それじゃ、行つて来る。」

「はい。」

そう告げて、家を出ると、
まゆと幸一が、待っていた。

「遅いぞ。」

「遅いよ。」

「ごめん。まゆ。遅れた。」

「俺は？」

「待ってなんて言っただか？」

「なんだと?!」

いつも通りの晴れた空と、明るい空気と世界。
毎日こうであれば、と何度も言う。

けれど、そんなわけ無いのが現実と言う。

「「「おはよう先生」」」

「おはよう。今日は3人なのね」

「ええまあ。二人の仲に介入する馬鹿がしまして」

「それは俺か？俺なの？！」

幸一が焦って言い、誠が茶化してまゆが笑う。

そんな日常。

「よっ。久人と健」

「風邪はいいのか？」

「何言うか、うつしにきたんだよ」

「何を言う、バイオテロか？」

「おうよ、さあさあ、命惜しけりや、金だしなあ。」

「くっ……不当な要求だ！」

「くっくっく。どうする？」

朝のHR前に行われる、誠と久人の小さな演劇、

何の準備も無く、全てアドリブ。

だから意外なクオリティに驚かされたりもする。

「ならば！この女の命が無くなるぞ？」

「くっ……卑怯な！」

何故バイオテロの犯人に人質を取るのか。

余計なことは言わないべきか……

「誠君！私は良い！だからテロを成功させてえ！」

健……色々間違ってる。

このミニ劇場自体何がしたいのよ。

「はーい。席について」

千賀子先生の一声で演劇終了。

「今日は休み無しね。良かった。」

千賀子先生の安堵の溜息。

けれど……

「最近、風邪が流行ってるみたいだから、気をつけてね。

それと、英語と生物の教員がお休みなので、双葉先生が教えてくれます……が！」

先生が久人を睨む。

「余計なことはしないように。したら自主と強制選ばせますよ？」

定番の脅し文句。

これが脅し文句で良いのかどうか、

自主と強制。それは退学の内容だったりする。

ホームルームも終わって一息つく頃、一時間目の英語の準備をする。

私達は、理系で英語、数学、生物を専攻。

他に、体育や家庭科、美術や音楽などの必修が付属される。

英語と言えは……

「久人。お前さ……」

「なんだよ。誠。」

「前みたいなのは無しな？」

「馬鹿言え！恋に自重は必要無い！必要なのは度胸だけだ！」

高らかに宣言する久人。

ちらほら見える、拍手と冷やかな目。

「だからって、いきなり3サイズ聞くのは無礼よ？」

まゆが少しつんとした言葉をはく。

「だって知りたいんだもん。」

「けどさ、限度つてものがあるのよ？」

「じゃあ、誠。」

「ん？」

「まゆに3サイズ聞け。」

「はあ？」

また、何故こういうことを言うのか、非常に愚かしい。

誰が教えるものか。

2人きりならまだしも……………

なんて思っていたが……………
「いや、聞かなくても知ってる。」

「……………え?!……………」

まゆ、幸一、久人、健。

全員が同じ言葉を同時に言った。

「……………なんで?!……………」

「なんでなの?!誠!」

まゆが誠に詰め寄る。

有り得ない、私……………誰にも……………あつ?!

知っている人が2人いる。

まずは、保健の双葉先生。

でも先生は守ってくれるはずだから、ない。

と、したら。

残り一名。

教えたというより、見られたと言えば正しいか。

健康診断の紙を勝手に見た、あの人。

「お父さん?!」

「ははは。ご名答。」

「なっ・・・・・・・・あのさ」

試しに聞く。

一応デマを流してくれとありがたい。

・・・・・・・・ありがたい？

「耳元で言つて。」

とりあえず、聞く。

「えつと・・・・・・・・。」

一瞬で真っ赤になつて爆発した。

嘘・・・・・・・・。

「どうした？」

「合つてます。本当のサイズです。」

許可無く人の情報を・・・・・・・・

良いけど・・・・・・・・良いけどさ！

私がいなくてで・・・・・・・・。

悶えていると、授業開始前の予鈴が鳴る。

「みんな席に着こうぜ！」

いつも着かないのに、人一倍真面目そうに振舞う久人。

「久人・・・・・・・・怪しい」

健の一言。

的をいてる発言に久人にひびが入る。

・・・・・・・・あれ？

「ねえ。先生来ないね？」

「まあ、双葉先生はぎりg————」

授業開始のチャイムが鳴り響く・・・・・・・・

えつと・・・・・・・・あれ？

「今の・・・・・・・・予鈴かな？」

一応聞く。

「じゃないの？まだ来てないし。」

普通に開始のチャイム。

こうやって現実を逃避する理由は簡単だった。

「じゃ。誠。行こうか。」

久人が席を立つ。

「まゆと、健も頼む。」

「はいはい・・・・・・・・。」

本来授業開始であるそのチャイム。

しかし、ある条件下では全く別の意味を持つ

1つ。その授業担当が、双葉先生

2つ。チャイムの後、先生がいない。

これが揃った時、意味は変わる。

それは・・・・・・・・

校内双葉先生搜索の開始という意味である。

第20話 『いつも通り』（後書き）

平和な一日の初め。

さてと、これからどうなるかが重要？

幸一がギャグキャラになってる？そんなバカナ。

読んでくださりどうもありがとうございます
感想等頂けると、非常にありがたいです。

第21話 『消えた3人』（前書き）

今回が、一番の駄文であろう・・・
なんとなく、うまく書けていない気もする・・・
なんだろう・・・文章的に違和感が。

やっぱ、音楽聞いたりしながらじゃないと駄目かなあ

第21話 『消えた3人』

「くそっ……どこに?!」

「知るか!早くしないと、授業がつぶれるぞ!」

「こちら、Dチーム。西棟5階にてネガティブ。どうぞ。」

「こっちはチームJ東棟5階もネガティブ」

どこから出したか、トランシーバーを使って連絡。

というか、お前ら授業中じゃないのか?

という声が飛んだので、言って置くと、

現在は本来ならば教室で英語の授業なのだが、

実は、教える先生がロストしてしまった。

つまり、

授業開始と共に、俺達は双葉先生を探していると言うことだ。

「ねえ、双葉先生って保健だよね?」

「うん。」

「保健室は?」

「最初、教室を出た後ちらって確認したけど電気消えてた」

「そっか。」

双葉先生は基本ドジであり、天然であり、
兎に角、面倒なのである。

「誠!俺は左半分見るから右半分頼む!」

久人が階段を下りて行く。

………?

分ける必要あるのか?

と思いつつ、階段を下りて見回る。

1階につき、20教室があるこの学校………

そして、左右に分けた理由が即座に出てきた。
扉に書かれた女子トイレと言う文字。

「そういうことか。」

女の子の幽霊？が出た場所だ。

まあ、今は朝だし、双葉先生が先だ。

もちろん。入るのは申し訳ないので、叩く。

「双葉先生、いますか?!」

.....

暫くしても返事が無く、先に進もうとした時だった。

「あの.....」

「え？」

背後からの声だった.....

「うゝん.....いないね。」

まゆが呟く。

「まゆちゃん。連絡。」

「えゝと。こちらチームJ全滅です。」

とりあえず報告。

あれから数十分。

あれとは、搜索開始なのだけれど.....

時計を見ると、そろそろ授業終了。

ん？そつえば.....

「.....?」

「まゆ？」

「誠達から連絡が来ないのよ.....」

「行ってみよっか」

健が言い出し、まゆ達が西棟に向かってみると、

久人が1階でうろつろしていた。

「久人?!」

「あっ……」

焦ってか、驚いてか、曇りのある表情を一瞬だけしたのを見逃さず、聞いてみると、誠が戻ってこないと言ったことだった……

「え？でも……学校だよ？」

「……前回の女の子に連れて行かれたのかもしれない」

「……はあ？有り得ないって」

健が笑う。

「……女の子。」

幽霊……か。

でも、神様が存在する世界。

だとしたら、居ないとも限らない。
なら。

「行きましょ。その女の子が出たトイレ」

「「はあ？」」

2人の素っ頓狂な声。

けれども、二重の意味で……

久人は怖いから。

健はきつと、信じていないから。

でも、私は……

幽霊だとかそういったレベルじゃない。

「行きたくないなら、良いけど？」

優しく微笑んだものの、

なぜか、恐怖の色を浮かべてついて行くという2人。

「ここ？」

西棟の4階奥の女子トイレ。

普通に見れば普通だった。

けれど……

異様な目で見れば異様だった。

「まゆ？」

健の心配そうな声も遠くなる。

．．．．．違和感。

入り口の取っ手に手を伸ばしたまま固まる。

「まゆ？早くしようよ．．．．．え？」

健がドアを押す。

開かない。

取っ手には「押」とある。

「誠？！何しているの？！」

健が、怒鳴る。

けれど、返事は無かった。

「おい。誠。抑えてるんならどけ、それに次の授業もあるんだろ
うが！」

久人も言う。

でも、返答は無い。

「ここは私に任せて。2人はここに人が来ないようにして」
授業終わりの鐘が鳴る。

2人も頷いて、ここまで来る道を封鎖しに行く。

「．．．．．」

扉を眺める。

誠．．．．．

健と同じように、扉を押す。

引いてもみた．．．．．でも．．．．．開かない。
何やってるの．．．．．？

あの暗黒世界のように戦っているの？

「誠！」

扉を叩いても、返事は無かった。

（誠は今、罪の過去にいる。）

「え？」

頭に響く声。

（俺は、神だよ。挨拶はさておき、誠を助けに行くか？）
.....

考える時間は必要ない。

声の主に対して頷く。

私には、力はない。

神ではなく、神様代行でもないのだから。

それでも、ただ、ただ一つ。

私には人間とは違う部分がある。

「私は彼の妻だから。どんな小さいことでも手伝う。

どんなことでも手伝う。だから.....」

もう一度、取っ手に触れる。

（解った。頑張れよ）

心なしか笑ったような声が響いた後、扉の違和感が消える。

目を閉じて、深呼吸。

大丈夫。私は彼を助けに行く。

絶対に助けてみせる。

扉を押し開くと、眩い光が漏れていた.....

躊躇することなく足を踏み入れていくと、まゆが光に消える。

開いていた扉がひとりでに閉まって、丁度2人が戻ってきた。

「まゆ？」

2人して名を呼ぶ。

扉を押しても開かない。

「……どういう事？」

「まゆ！誠！」

回りを気にせず、名前を呼んでいると、先生が走りよって2人を取り押さえにきた。

「何してるんだ?!」

「友達が、閉じ込められているんです！」

健が言つて先生が扉を押す。

え………?

扉は簡単に開き、中に先生が入っていく………

「誰も居ないじゃないか。もうすぐ授業だ。教室に戻りなさい」

戻った先生が呆れたように良い、久人と健を引きずって教室へと戻す。

次の授業である、数学の準備をしながら2人の机等を見ると、

いまだに英語の教材が残っていて……

数学が始まって2人は戻ってこず、先生はまたサボりだと言って授業を始めた……。

まゆ………誠………どこ行っちゃったの?!

不安が、2人を包み込んでいった。

第21話 『消えた3人』（後書き）

私が平和な文を連続して書くのは無理だったようで、あの展開から、ドウシテこうなった（汗

彼女たちの行方は・・・・・・？

読んでくれてありがとうございます。

感想等いただけると嬉しいです。

第22話 『薄幸なる少女』（前書き）

ドウシテこうなったとか、
急展開wwwとか。

そんな話の塊であるコレ。

もう、20話突破したものの・・・
方向性、趣旨。

そういうものを読み取るのが非常に困難だったりする。
最終回とかそういうのは全く見えない。

そして、本題。

この22話は、暴力が含まれて居ます。
なので、そういうのが嫌いな方は、お引取り頂きますようお願いいたします。

第22話 『薄幸なる少女』

暫く、空白。

本当に見るのですね？

では。どうぞ。

「・・・・・・？」

とりあえず、周りを見渡す。
どこだ？ここ。

入ったというよりは引きずりこまれたのは、女子トイレ。
なのに、出てきたのは古めかしい風貌の小学校。
木造であり、現代のではないと思う。

「はぁ・・・・・・」

とりあえず、様々な想いを込めた溜息。

窓の外は太陽があつて、昼休みなのか子供たちがサッカーやら、ド
ッチボールやら。

暗黒世界ではないということは確かだった。

それだけで、安堵に囲まれる。

けれど、ここも恐らく何らかの条件をクリアしなければ、出れない。
それに関しては、知らない場所というのは聊か不安である

「ん？君は・・・・・・？」

暗黒世界の後に遊びでやった七不思議ツアーで
その時、トイレに居た女子であり、今回誠をトイレに引つ張り込ん
だ少女に似た少女が目の前を通る。
呼びかけに応じて振り向く姿は、誰かに似ていた。

綺麗な金髪。

外国人？

そう思う誠の視線に気づいたのか、少女が俯く。

「私、呼ばれているので」

「あつ、ごめん。」

「いえ、私がいけないんです。」

そう言つて走つていく。

態度からして、見た目だけが一緒なのだろうか……
誠のことは知らない感じだった。

「そつえば、トイレの時も普通に日本語だったな。」
思い返す。

だとしたら……何をすれば良いんだ？
悩んでも仕方が無い。

手当たり次第に教室を覗く。

どこもかしこも、生徒は居ない。

みんな遊びに行つてゐるのだろうか。

あの女の子を追いかけなかったことに後悔しつつ、
とある教室の中に入る。

特に珍しいものも……？！

「なんだよ……これ。」

グチャグチャにされた教科書や、鞆。

その子の机だろうか……
コンパスやハサミ、マジックで様々な言葉が彫られていた。
それが物語るのは、いじめである。
散乱したそれらを拾い集めて、纏める。
ノートや教科書には番号が振られ、1文字ずつ言葉が書いてあった。
それをつなげていく。

「た・い・い・く・か・ん？」

体育館。順番で並べればこうなる。

けれど、なぜこんな……

記憶を数分前に戻す。

思い出すのは、金髪の少女との会話。

会話というには、やや不足かもしれないが……

「私、呼ばれているので」

「いえ、私がいけないんです」

彼女の言葉。

……呼ばれている？どこに？

体育館か？！

教室を飛び出す……が。

「体育館ってどこだよ。」

ぼやきながら、少女と同じ方向へ走っていく。

無駄に広くて、数十分彷徨っていると、声が耳に届いた。
目を閉じて、耳を澄ます。

神様の力のおかげか、意識すれば、1k以内のものが見えるし聞こえる。

便利かどうかとおもいつつ、初めて役に立った。

「……さい。ごめんなさい。」

泣いて謝ってる？課題を忘れたか？

呆れたように溜息をついて、気づく。

小学校で、課題にここまで厳しくするものなのか？

泣くほど謝るのか・・・？それに・・・

謝罪と共に聞こえる、笑い声。

それも大勢・・・だとすれば。

声を頼りに道を進んでいく。

そして、必然的だったのだろうか。

とある場所にたどり着く。

閉じられた大きな扉。

俺からすれば、小さいかな。

扉に耳を当てて、様子を探ってみる……………。

「貴女達最低よ！」

少女の声。

やっぱりいじめか！

「はあ？何言つての？アンタ見ない顔だし…………やられたいの？」

野太い声が聞こえた。

これがリーダーか？

ちっ…………

扉をあけはなつと、全員の視線が向けられた。

「お前たち！何してる！」

大声で怒鳴ると、みんなが一目散に逃げ出していく。

捕まえたいが、今は被害者を。

金髪の少女に近づく。

怯えた目、傷ついた体。

口元から滴る血……………。

見ているだけで、痛々しい。
周りに転がるボール。

投げつけられたのだろうか。

「大丈夫、俺は何もしない」

いまだ怯える少女に微笑む。

「・・・・・・・・。」

見詰め合う。

「・・・・・・・・ほんと?」

「もちろん。」

何もしない。

それに対して疑うというのは、信じることに臆病だということ。
一瞬味方になって、虐める。

そういうこともされたということだ。

少女の口元の血を拭きとって優しく抱きこむ。

「うつ・・・・・・・・うつうつ・・・・・・・・うわぁぁん。」

泣き出した彼女を、力強く抱く。

「大丈夫・・・・・・・・もう、大丈夫。」

静かに呟くと、後ろから思いもよらない言葉が、飛んできた。

「誠?」

「え?」

とつさに振り向くと、立っていたのは見覚えのある小学生の少女だった。

第22話 『薄幸なる少女』（後書き）

最初の空白部分うぜえ、とかイワナイデ。
念の為に入れたんだから。

読んでくれて有難うございます。
感想等いただけると、ありがたいです。

第23話 『それぞれの役割』（前書き）

今回も前回と近いです。

なので、暴力的なものが苦手な方はお引き取りください。

第23話 『それぞれの役割』

「まだこないのかしら。」

気づくと、広い空間だった。

冷静に分析してみると、

自分は小学生の体型であり、大勢の小学生の中に紛れ込む形となっていた。

若干戸惑いつつ、最初に聞いた声の主に何をするか尋ねてみる。

「はあ？知らないできたの？」

「えっと……ごめん。」

気の強そうな女子？

私から見て、というより誰が見ても女子？と聞いてしまいそうな体型。

最悪、小学生には見えないとまでいえそうな子。

「ショーよ。」

にやつと笑う。

「……ショーね。」

彼女の表情から見て、まともな物ではないだろうと確信が持てた。

暫くして、見惚れてしまいそうなほど、

綺麗で長い金髪の少女が走ってきた。

そして、案の定……醜いショーが始まった。

「何で遅れたの？」

さっきの子が聞く。

「えっと……その、廊下で呼び止められて……」

「はあ？一般人に呼ばれるのと、美和様に呼ばれるのどっちが大事ななの？」

こんな・・・酷い。

唇をかみ締める。

逃げちゃ駄目。見てちゃ駄目。

止めてあげなきゃ！

「貴女達最低よ！」

大声で怒鳴る。

「はあ？何言つての？アンタ見ない顔だし・・・やられたいの？」

リーダーが睨んだ瞬間だった。

扉が勢い良く開け放たれ、男の人が入ってきた。

「お前たち！何してる！」

その人が大声で怒鳴ると、みんなが一目散に逃げ出していく。

一直線にまゆみに近づいていく。

彼女を改めてみると、

怯えた目、傷ついた体。

口元から滴る血・・・。

見ているだけで、痛々しい。

周りに転がるボール。

男の人が周りを見渡す

「大丈夫、俺は何もしない」

いまだ怯える少女に男の人が微笑む。

え？まさか・・・。

「・・・。」

見詰め合う2人。

「・・・ほんと？」

「もちろん。」

彼女たちのやり取りを耳に入れながら、
男の人を見つめて、ある人と照らし合わせる。
そんな必要は無いけれど、他人の空似がある……
少女の口元の血を男の人が拭き取ると少女を抱きこむ。
「うつ……うつうつ……うつうつ……うわぁん。」
「大丈夫……もう、大丈夫。」

ひと段落ついたのを見計らって、名前を呼ぶ。

「誠？」

「え？」

彼が勢い良く振り向く。

驚く表情。

やつと顔が見れた。うん。間違いない。

確信して、彼に対して微笑む。

「お前……まゆか？」

「うん。そうだよ。」

小学生の姿だというのに、気づいてもらえるとは……
こんな状況で、可笑しいけれど、嬉しい……
でも、今は。

「私の姿はともかく、貴方なんで……」

「それは俺も知りたい。とりあえず、この子を。」

「そうね。」

ここが晴れているのが、救いだろつ。

幸い、授業開始の鐘がなっても誰も来ない。

「まゆみちゃんて良いよね？」

「わ……私と仲良くしちゃ駄目！」

「っ・・・・・・・・」

まゆの伸ばした手を、まゆみが弾く。

「まゆ。見てたんだろ？」

「ええ。酷いものよ。」

まゆが自分で見た、事を話す。

「酷いな。あの野太い声というか、体格がでかいやつがリーダーなのか。」

「ええ。少なくとも、そう見える。」

「・・・・・・・・私がいけないんです。」

「「え？」」

「私が・・・・・・・・金髪だから。私が・・・・・・・・生きているから」

「そんな事無い！駄目だよ。まゆみちゃん・・・・・・・・貴女は悪くないわ」

「何も知らないくせに！平気で優しくしないでよ！どうせ・・・・・・・・どうせまた・・・・・・・・裏切るんでしょ！」

まゆみが怒鳴って走っていく。

追いかけるなきや・・・・・・・・

2人ともそう思った。

けれど、動けない。

なんと言えば良い？何をしてあげれば良い？

解らない。差し出す言葉、行動・・・・・・・・

何をして、彼女には裏目に出る。

信用させようとすればまた、悲しませ、怒らせるだけ・・・・・・・・

「どうしよう・・・・・・・・」

ぼそっと、まゆが呟く。

私がこの体ということに、意味があるはず。
なら、どうしようか。

簡単だ。

「私、潜入してくる。」

「はあ？」

「私は、小学生の姿。コレの意味は、潜入しろということ」

「でも……さつき……」

誠の心配そうな表情。

私は、あの時怒鳴った……リーダーに対して。
ならば、私も彼女みたな扱いになるはず。

不愉快な、役回りだけれど……

「そうね。でも彼女も同類なら心を許してくれる。それに……」

「」

ちらつと、誠を見て微笑む。

「いざって時は……守ってくれるでしょ？」
そう言つて、走っていく。

「……まゆ。」

俺の姿的に、教員に忍ぶのが一番か。

知っているか、知らないか。

それで全てが変わる。

知らないなら、教えれば良い……

ただ、知っていたら……最悪だ。

体育館を出て、職員室へ向かう。

……あ。

そつえば、まゆはこのクラスなんだ？

「え」と。どこだろうここ……」

体は小学生でも、この学校について何か知っているわけでもない。
出て早々、失敗。

「栗崎さん？教室に戻りなさい」
へ？

後ろから………というか私………
「それとも………まだ、転校したてで場所解らないの？」
「へ？え？はい………すいません。」

私は転校生………か。
味方は彼と………まゆみちゃんが………

先生に連れてこられたのは、6年3組。
見渡すと………まゆみちゃんと虐めのリーダー
なるほど………。
運がいいのは、まゆみちゃんの隣ということ。
ただ………

栗崎まゆと書かれたノートや教科書がグチャグチャだった。
手が早いわね………
私、こういうのは好きじゃないけれど………
あんまり、酷すぎると本気で怒るわよ？

リーダーを睨むが相手は笑うだけ。

良い度胸してるわね………とりあえず、席に着く。
まゆみちゃんは怯えて居るのか、なんなのか。
私を見たり、私の惨劇を見たり………

「まゆみちゃん。」

小声で名前をよんで、唯一無事であるノートに聞きたいことを書いて、渡す。

………。

返事を書いて、戻ってきた。

リーダーは、桜庭 由利

いつからというのは、転校初日。

酷いわね。

可愛さに嫉妬したからこれなのね……………

味方は？

……………。

聞くまでもなく、0。

「大丈夫。私とさっきの人は味方だから。」

私の惨劇を見ているおかげか、小さく頷く。

流石に、ここまでされている人が裏切ることはないと思ったのかも。

……………

由利……………貴女に感謝するわ。

何事も無く、授業は終わった……………

けれど、早々に周りを囲まれ逃げ場無し。

そのチームワークに感服します。

「何か用？」

虐めに対して、優しくするつもりは毛頭ない。

本来の世界で、冷徹のまゆだとか、憤怒のまゆだとか……………

怒っている私はそういう呼ばれ方をしていた。

けれど……………多勢に無勢。

「何よ、その生意気な目。ムカツク！」

由利がまゆの髪を引っ張った。

「あの……………」

「ああ、里倉教諭。次は6年3組ですよ？」

先生たちはそそくさと離れていく。

「待つて。」

「なんですか？」

「お聞きしたいのですが。」

「手短に・・・・・・・・」

「いじめ・・・・・・・・起きていますよ？」

単刀直入。

相手の教諭の目の色が変わる・・・・・・・・

怯えた目。

「か・・・・・・・・関わってはいけないよ。」

そう言って走って出て行く。

黙認・・・・・・・・？

でも、自由意志ではなく、何かがある。

面倒だな。

とりあえず、俺は理科の教諭で新任らしい。
6年3組に向かうことにした。

第23話 『それぞれの役割』（後書き）

恐らく、次の話も暴力的なものが含まれます。
その次からは普通に帰れると思います。

読んでくださり有難うございました。
感想等いただけると嬉しいです。

第24話 『敵の正体』（前書き）

この話も少々、暴力的な表現がございます。
次回はないと思います。

いじめは駄目ですよ？絶対。

第24話 『敵の正体』

「も．．．．．もううつ．．．止めて下さい。私が代わりになりますから．．．．．」

震えながら、まゆみが言う。

「．．．．．まゆみちゃん。平気平気。

ねえ、由利。集団で固まって虐めて楽しい？

私はね、虐められる側だけれど、

貴女達の方が、無様だとおm——ぐぶっ」

まゆが最後まで言う前に、お腹を蹴られ胃の中身が喉元まで逆流した。

「生意気言ってんじゃないわよ！」

膝をゆかについた、まゆに殴る蹴るを繰り返し．．．．．

「あははは。痛くないわ。だって、虐める為に、人を傷つけるために、

振るわれる力ほど、弱いものは無いから」

殴られながらも、由利をみてにやつと笑う。

「ッ．．．．．みんな。アレ持ってきて」

アレ．．．．．？

「そんな．．．．．駄目！」

咄嗟に叫んだまゆみを数人が押さえ込む。

そんなにやばいものなの．．．．．？

暫くして、生徒が何かを持ってきた。

「アンタは虐められることが嬉しいみたいだからさ。」

「別に嬉しくは無いんだけどね」

「口答えするな！」

顔への蹴り。

口に血の味が広がる。切れたかな？

「まゆみにも使ったことは無いんだけど．．．．．」

「え？ちよつ．．．．．何それ。」

「釘バット」

「見れば解るけど．．．．．」

持ってこられたのは、釘が打ち込まれたバット。

小学生でなんていうものを持ち出すのか．．．．．

流石に、それで殴られたりしたら．．．．．

「覚悟は良い？」

「な．．．．．何の覚悟？」

少し無理して笑う。

「貴女の体に傷がついて、一生消えないことよ」

「あははは。流石に勘弁して欲しいかも」

流石に冗談じゃない。

元の世界に戻って、治る保証などどこにもない。

聊か強引だけれど、由利を蹴り飛ばすしか．．．．．

「おつ。ここが、6年3組か。さっきは見なくてわかんなかったけど．．．．．」

まゆみちゃんいるか？」

この声．．．．．

「まゆみ。行つて」

由利が指示する。

「え？あの．．．．．」

生徒たちの影で、私は見えない。

まゆみちゃん．．．．．

「おいおい。何してるんだ？」

誠が生徒を掻き分けて私の前に出てきた。

「?!」

「バットに釘打ち込んだじゃ駄目だろ？」

誠がバットを奪って注意すると由利が睨む。

さすがに、生徒がする目ではない。

そして、強気に出ている理由がすぐに解った。

「私のお父さんは警察官僚、お母さんはこの理事長。

私にたてついていいのかしら？」

由利がにやつと笑う。

なるほど……

それでか。

教員は流石に首にされたくないだろうから。

まあ……

「おお。それは怖い怖い。で？」

「でって……」

「いや、だからなんなのかなって」

誠が笑う。

普通の教員なら、怖いだろうが、

この世界の住人でない俺には関係のないこと。

首になったからって、どうって事はない。

「アナタ首にしてもらわよ！」

「へえ、すれば良いじゃん。俺的に、

こつというの見逃すくらいなら、首にされたほうが良いからな」

にやつと笑う。

「っ……授業始まる。」

そう言って、全員席に戻っていく。
なるほど。

流石に親は知らないか。

けれども、ああいう風に脅せば、教員が直接親に言うなんて出来るわけがない。

以外に知能あるんだな。

「まゆ。平気か？」

誠の差し出した手を受けとって立ち上がる。

「まあ、この程度は。流石にそれだったら無理だったけど……」
「？」

体を見ると、傷が綺麗に消えていた。

「お前……」

「なんでだろ。」

「多分、俺と契約してるから、老衰以外で死んだりしないんじゃない？」
「……」

「あはは。嬉しいのか嬉しくないのか……」

怪我したりしないのは嬉しいけれど、

改めて、自分が人間ではなくなったことを実感させられる。

授業は難なく終わり、

丁度昼休みらしく、私とまゆみちゃんと誠でご飯を食べることに。

「どうするの？」

「ん？親に話す」

「まあ、妥当ね。」

「……駄目。」

「え？」

「それは駄目。」

「まゆみちゃん？」

「親に言っても意味はない。」

「大丈夫。まかせろ——？」

「あつ・・・・・・・・」

まゆみは無言で、教室を出て行った。

「どうしたんだろ・・・・・・・・」

「解らない。」

「・・・・まあいい。それで・・・・・・・・」

とりあえず、証拠も何もなければ意味がない。

というわけで、まゆと作戦を練り、

あるものを渡す。

「了解。」

にやつとまゆが笑う。

さてと・・・・・・・・それじゃあ、作戦開始ということで。

昼食を片付けて、それぞれの場所に戻る。

誠が居なくなつた瞬間、まゆを取り囲む生徒たち。

誠は怖くて手を出せない・・・・・・・・か。

「なんか用？」

周りの生徒を睨む。

「アンタあれと知り合いだったのね。」

「まあね。」

「どういうつもり？」

「さあ؟؟?!」

座っていたイスを倒されて床に転がり、私の上に由利がのしかかる。
それだけで、重くて苦しい。

「ちよつ・・・・・・・・重い。」

「どうせ、親にちくるんでしょ？」

「そうかもね。」

「・・・・・・・・。」

・・・・・・・・？

ちよつと雰囲気が変わった？

強がっているというより．．．．．恐れ？

まあ、親にばれたら怒られるものね。

「怖いのかしら？」

意地悪な心が開き、聞く。

「ええ、怖い。怖くて恐ろしい。アンタのせいよ」

「え？ちよ．．．．．それは不味い」

由利がどこからか包丁を取り出してまゆに向ける。

「そ．．．．．それは．．．．．止めて。」

刺されたら、死ぬ。

人外だから無事とか、そういう安易な考えは持てない。

さつきも傷は治ったけど、痛みはあった。

血も出た。

だからコレは確実に．．．．．

「アンタを殺してやる。そうすれば、少しは気が晴れる。」

「由利ちゃん！流石に．．．．．」

「五月蠅い！口答えするならアンタ達も殺すわよ！」

本気だ。

彼女は恐怖に駆られて、まともな考えを持てそうにない。

ということとは、完全に終わりだ。

「死んでしまええ！」

包丁が振り下ろされる。

今更抵抗など．．．．．

目をつぶると、浮かぶのは誠のことだけ。

死ぬ時って、最愛の人を思い出すって言うけど．．．．．本当だったんだ。

「ごめんね？誠。」

小さく呟く．．．．．。

悲鳴が教室を．．．．．支配した。

「貴女の娘がいじめをしているんです。」

「話っているのはそのこと？」

「？！」

理事長である、桜庭 さくらば 美鈴 みすずと誠が話す。

誠は、彼女に娘である由利がいじめを行っていることを告げた．．．

・が。

この人の言葉．．．．．

まるで、危機性がない。

他人事のような．．．．．

「なんで、そんな軽く．．．．．?!」

「虐められる方がわるいんですよ？」

「なにを言っているんですか！」

「そうでしょう？虐めたくなるような、容姿、言葉、性格．．．．．

・

だから、虐める！」

「それは違う！虐めたくなるような容姿、言葉、性格?!」

ふざけるな！まゆみちゃんはその子じゃ．．．．．」

「たかが、教員風情が理事長の私に良い態度だね！」

つ．．．．．

この迫力って．．．．．

ただの、理事長だとかそういうわけじゃなさそうだな．．．．．

・

「何者なんですか？貴女は．．．．．」

冷や汗が滴り落ち、緊張が肌につく。

美鈴が微笑む。

無言というのが、なんともいえず．．．．．苦しい。

「アンタもただの教員かい？」

本当は高校生です。

とか、冗談抜かしてる場合じゃない。

「ええ。そうですね。」

「だとしたら、うちの組に欲しい度胸の持ち主だよ。」

組・・・・・・・・・・?

組?

え?

まさか?!

「気づいたね? 私はここの理事長でもあるけれど、桜庭組っていうところの組長でもあるのよ。」

おいおいおい・・・・・・・・・・「冗談じゃねえ!

「今回は娘が迷惑かけたね。いくらで閉口する?」

おお。怖いな。

・・・・・・・・・・けど。

「悪いけど、金で口は閉じねえよ」

「本気かい?」

「もちろんだ。」

「・・・・・・・・・・残念だよ。」

美鈴が言つと、入り口から黒服さんたち。

詰まる所、組の人達。

それが、数人入ってきた。

「死んでもらうよ」

美鈴が不敵な笑みを浮かべた。

第24話 『敵の正体』（後書き）

ふう。

みんな何かと訳アリなのかな？

作者は先を考えず書くから・・・・・・・・

読んでくれて有難う。

感想等お待ちします。

第25話 『失敗と異常な雰囲気』（前書き）

ふう。

ここまで頑張ったと思う。

第25話 『失敗と異常な雰囲気』

「あれ．．．．．？」

目を開けると、水の中．．．．．？

呼吸は．．．．．？

出来る。

でも．．．．．確かに水の中だ。

周りを見てみると、誰も居ない。

水の底．．．．．

そっか。

「あの世界からログアウトしたのか。」

ぼそつと呟く。

それと同時に、二つほど、新たに何かが沈んできた。

「まゆ?!．．．．．と双葉先生?!」

「．．．．．? あっ．．．．．誠?」

「何があった?」

「それより．．．．．ここは?」

「水の底。」

「．．．．．は?」

「とりあえず、上がってみる?」

水の底で、じっとしていても仕方がない。

双葉先生を抱えて、水の上に上がる．．．．．

そして。

「くはっ・・・・・・・・」

「先生！意識を取り戻しました！」

「こっちもです！」

「こっちも！」

「は？え？」

重たい体で周りを見渡すと、

手術室・・・・・・・・？

「あの・・・・・・・・一体。」

3人と同じ病室に入れられ、見舞いに来た久人達に聞く。

「馬鹿野郎それはこっちの台詞だ。」

「なんで、プールに沈んでたのよ。」

「は？そんな馬鹿な・・・・・・・・」

なるほど、それで水の底。

しかし、強制送還だと、変な場所に出るのか…………

つまりは、失敗…………か。

「里倉くん、栗崎さん…………双葉先生。みんな、みんな無事で…………」

「千賀子先生。ご迷惑をおかけしました。」

「いえ…………」

「なんで、プールに居たかは全く記憶にないんですが…………とても昔の辛い…………」

「…………先生?!…………」

全員驚く。

双葉先生の頬を涙が伝って布団に落ちていく……………
「ごめんなさい。私……………」

「お疲れなのでしょう。里倉くんたちも安静にしてなさい。
また明日も来ますから。」

気を使ったのか、駄々をを捏ねる久人達を引きずって病室を出て行く。

外を見ると夕方ともいえない暗さで、時計の針は20時近かった。

「まゆ。」

「……………うん。」

誠達も病室を出て行く。

人気のない屋上で向かい合う。

「何が？」

「良く解らないの。」

「どういうことだ？」

「実は……………」

あの時……………

「ごめんね？誠。」

小さく呟く……………。

悲鳴が教室を……………支配した。

暫くして、目を開けたんだけど、

そしたら、刺されたのは私じゃなくて、由利だったのよ。

「……………おい待て。お前……………」

「うん。殺されかけた。」

「……………悪い。」

「何の問題もないわ。問題は先。」

まゆが少し悲しそうにするのが見えた。

「由利を刺したのは、まゆみだった。」

「なっ……」

「無言で出て行ったのは、包丁でも取りにいったんだと思う。それで、彼女が逃げて……」

「逃げて？」

「たどり着いたのは女子トイレ。で、取っ組み合いになっちゃって……」

滑った時に頭を強く打って、気がついたら……」

「双葉先生は何で？」

「さあ。関連性は解らない。」

けど……関わっていきそう。

「誠はどうして？」

「ああ。俺は不死身だから余裕。とか調子に乗ってたら、デザートイーグルを眉間に頂いてしまいまして……」

「え？」

「理事長……あれ、ヤクザの組長でした。」

「嘘?!」

「本当。」

な……なんて学校なのよ……」

「でもまあ、全員無事だった。今回はそれでよし」

「そうね。」

屋上から戻る間、頭の中で今回のことを考えていた……

今回は失敗。

あれは、何が目的だったのか……

なぜ、あんな現場に俺達は呼ばれたのだろうか。

謎ばかりだ……

理事長がやくざの組長。

まゆみちゃんの正体。

「……………考えても仕方のないことなのだろうか？」

「そういえば……………何か忘れ……………」

病室の扉を開けると、忘れたものが居た。

「誠さん！」

「香奈ちゃんか?!」

誠に気づき、香奈が飛びつく。

まゆは呆れたのかなんなのか、

溜息について自分のベッドに入り込む。

「心配しましたよ?!」

「ごめんごめん。」

「……………貴女ですか？」

香奈が首を回して、まゆを睨む。

「え？」

「栗崎まゆ！アンタが、誠さんをこんな目に！」

「きやあ?!」

まゆに飛び掛り、押さえつけてまゆの首を絞める。

「香奈ちゃん?!」

「アンタが……………アンタが！」

「やめ……………くるし……………」

ベッドの上であり、身を翻したりは出来ない。

どうしよう……………

どうすれば……………

「香奈ちゃん止めろ！」

誠が止めに入るが、力が強いのか一向に引き離せない。

「やめ……………て。おねが……………」

「アンタがあ！」

「止めなさい。」

へ・・・・・・・・？

香奈の腕を、双葉先生が掴む。

「アンタも邪魔するの？」

「・・・・・・・・私は止めなさいと言いました。」

いつもと違う、優しい雰囲気はどこにもなく、冷めていて・・・・・・・・恐怖さえ感じる空気を纏っていた。

「ご・・・・・・・・ごめんなさい。」

「貴女はお家に帰りなさい。ここは病室です。」

「でも・・・・・・・・」

「帰りなさいと言いませんでしたか？」

「はい・・・・・・・・」

逃げるように、香奈が病室を飛び出していく。

「ごほつ・・・・・・・・ごほつ・・・・・・・・はあっはあっはあ・・・・・・・・」

「大丈夫？」

「はい・・・・・・・・なんとか。」

双葉先生はいつもの雰囲気に戻り、

1mと離れていない自分のベッドに戻る最中にも転んだ。

さっきのは・・・・・・・・それに香奈ちゃん・・・・・・・・君は。

「誠・・・・・・・・私は平気。」

「でも。」

「平気だって。香奈ちゃんを責めちゃ駄目だよ？」

「あ・・・・・・・・ああ。」

けれど、

この時、香奈ちゃんへの怒りが心の奥底に息づいていた・・・・・・・・。

病室から見える月は綺麗に輝いていた・・・・・・・・

「そつえば、もうすぐ日食が起こるらしいですよ？」

双葉先生の陽気な声。

「そうなんですか？」

「見えるなんてラッキーよねえ？」

「はいっ。」

そんな会話をしている2人の少女（約一名精神的に）を見つめる。

今の双葉先生や今までの双葉先生を見ていると、

先ほどの双葉先生が別人に思えてくる。

あの雰囲気は、生易しいものではなかった。

言うこと聞かなければ、体罰さえ厭わないとでもいうような……

・
双葉先生にかぎってそんなこ………と………

「どうかしたの？」

「うわあ?!」

気づかないうちに、目の前に先生が居た。

「い……いえ。」

「私に何かついてたりした？」

つとベッドに乗りかかってくる。

ちょ………まじで………やばいって………

「先生………誠が。」

「あら………」

誠は耐え切れなかったのか、目を回していた。

「どうしたんでしょう。」

「先生の自身の格好でわかるかと。」

まゆがやや、意地悪な口調で言う。

病院の服は浴衣みたいな感じであり、

誠の上に乗る先生はそれが若干脱げたような感じになっていた。

「あらら。ごめんなさいね。」

軽く微笑んで誠の上からおり、ベッドへと入っていく。

「誠・・・・・・・・お休み。」

まゆが軽く微笑んで頬にキスをして、その日に幕を下ろした。

第25話 『失敗と異常な雰囲気』（後書き）

たまには敗戦も必要なんです。

っていうか香奈ちゃん怖いよぉ！

読んでくれて有難う♪

感想等いただけると嬉しいです♪

第26話 『とある過去の一部分の話』（前書き）

いやあ、あれですね。

あつというまに30話近いですね。

眠いなあ。

前置きって何も書くこと無いから愚痴になっています。

第26話 『とある過去の一部の話』

「はぁ．．．．．暇」

「だね」

「駄目ですよ？若い時から溜息ついてちゃ」

「先生も十分若いですよ？」

「あら、有難う。」

誠が言い、双葉先生が微笑むと、

勢い良く扉が開かれ、声が飛び込む。

「お世辞とかじゃなく本気です！」

「こら久人！静かにしなさい！」

久人にとび蹴りをかます、健。

「お前たちがな」

幸一が苦笑して、久人達の横を通って入ってきた。

「生きてるか？」

「相変わらず。」

「これ。」

「ありがと。」

正直要らないけれど課題を受け取る。

「そついえば、幸一。」

「ん？あれか？急に言われても無理だ。」

「使えないな。」

「あほか。とにかく。出ててこない。」

「解ったよ。」

「．．．．．。」

今日も学校があつた為、幸一達が来たのは夕方だった。

「もう、夕方かあ。」

「来た時点で夕方だったけどな。」

夕暮れの光で照らされる病室に集まる、

俺、まゆ、幸一、久人、健、双葉先生。

なんとなく、運命的なものを感じたりするんだが、
気のせいだろうな。

「私達先帰るね？」

健が言い、久人と共に帰っていく。

「幸一。」

「ん？ああ。」

誠と幸一が病室を出て行く。

・・・あの二人。

何の話をするつもりなんだか・・・

あほか、とにかく。出てこない・・・ねえ？

「あとで。」

「どうかしたの？」

「いえ、なんでも。」

「そういえば、貴女達って幼馴染なのよね？」

「はい、そうです。」

「羨ましいわね・・・私もそういう人達が欲しかったわ」

夜に溶けて行く世界の影か、先生自体の影か・・・

先生が暗くなって見えた。

「でも、誠も幸一も結構世話が焼けるんですよ？」

「そう？誠くんなんか、頼りになりそうだけど・・・」

「いえいえ。かくれんぼで行方不明になったり、

忘れ物したって言って、慌ててるから捜したら手元にあったり・・・」

軽く笑う。

懐かしいなあ…………。

「そういえば、あの時かあ」

「ん？なにが？」

「え？いや、楽しいものじゃ…………」

「あら、貴女の表情からして面白そうだけど？」

面白いかなあ…………

「聞きたいですか？」

「ええ、とつても。」

笑顔で頷く双葉先生。

まあ、話してもいいかな。

「さつき、かくれんぼで行方不明って言ったけど、私も近い事があつたんですよ一度だけ。」

そう…………あの時。

「今日何する？」

「やっぱりかくれんぼでしょ。」

「幸一。また行方不明になるわよ？」

「馬鹿言うな。んなわけあるか。」

「あはははは。」

「笑うな」

その日は晴れていて、まあ外で遊ぶにはもってこいの日だったんですよ。

私達は、幸一が行方不明になったことで笑ったあと、じゃんけんで鬼を決めた結果、誠が鬼だったんで私たちは逃げただけ…………

「思わせぶりな止め方ね」
「いやいや。先生が……………」

「それですね……………」
小さく溜息をついて、続ける。

「私が誘拐……………されちゃったりしちゃって……………」
「誘……………拐？」

「ええ。」

思い出してみると、何でそんな安易な罠にかかったのか……………

・
「お嬢ちゃん、お菓子あげるよ。」

「え？本当ですか?!」

なぐんて言われて付いて行っちゃった。

「あはは……………それは。」

「情けないですね……………」

「あれ？でも……………平気だったの？」

「誠が助けてくれたんです。」

「え？相手大人じゃ……………」

「得意の頭脳戦でした。」

思い出して笑う。

「相手の大人に対し、警察きたぞ」とか。

良くあれで騙せたなって思いますよ」

「そうね。でも、彼は良く貴女が居ないことに気づいたわね。」

「はい。嬉しかったですよ。私の髪留めが落ちてたのを見つけて、心配して自転車で駆け回って……………」

「場所はどうやって？」

「車が目撃されてたみたいで……………」

「そっかあ。私もそういう王子様欲しいわねえ」

「お．．．．王子様って」
「そうでしょ？」

先生の無邪気な笑顔が私に向けられる。

「はい．．．．まあ。」

「彼のこと．．．．好き？」

「へっ?!」

「その時に初恋だったりするでしょ？」

なんで、妙なところで鋭いかな．．．．

まあ、正直あの時の誠はかつこよか．．．．

「幸一と少し話し込んでみてさ．．．．ん？」

「あわわわわ．．．．何でもない。何でもないから！」

「急にどうした？」

「うふふ。お似合いね」

「え？は？」

双葉先生は笑ってるし、まゆは悶えてるし．．．．．
意味わからねえ．．．．．

（お前と彼女はお似合いってことだ）

（なんなんだよ!）

結局、彼女達の会話の内容を知ることが叶わなかった。

第26話 『とある過去の一部分の話』（後書き）

話し纏まってない気もするんですが、気のせいです。

頑張って平和な部分を書いてみたんですよ。

頑張った私♪

読んでくれてアリガト

感想等いただけると嬉しいです（キリッノ

第27話 『知って教えて情報交換』（前書き）

前作同様、平和って良いな。

書くこと無いからAAでも・・・
それは嘘です。

では。どうぞ。

第27話 『知って教えて情報交換』

「それじゃ、また学校で」

「はい。先生」

退院し、双葉先生と別れ帰宅途中のことだった。

「そういえば、来週中間テストじゃないっけ？」

「ま．．．まゆ。それは禁句だ」

「テストテストテスト」

「うわああああ。」

そうだった．．．．．

すっかり忘れていた．．．．．もうすぐ夏休みなんだけれど、同時に中間テストがあったんだ。

来週とはいえ、明日、明後日の土曜日曜を残すのみ．．．

運悪く思い出してしまった．．．．．

数学どうするべきか．．．．．

色々ありすぎて、勉強とか余裕無かったし．．．．

「誠。数学教えて上げるから、明日来なさいよ。」

「良いのか？」

「まあね。聞きたいこともあるし。」

「じゃあ、頼むよ。」

「ええ。」

二人で帰るのは久しぶりで、懐かしくて楽しくて、時間が、距離が、短く感じるほどだった。

「また明日な」

そう言っで別れる。

玄関の扉を開けると、香奈ちゃんが佇んでいた。最初は何かされるかと焦ったけれど、心配していたようで泣きついて来た。

そういえば、初日以降見舞いに来なかったけれど………余計な詮索は控えておいた方が良いかな。

またああなるのも嫌だし………

「そういえば私、１７歳なんですよ？」

「そうだったっけ？」

「言っでませんでした………よね？」

「うん。聞いてない………てえええ?!」

え？まじで？

１７つで俺達と一緒に………

「同い年〜。なんです」

「てつきり、年下かと」

「あはは。そう見えますよね………

ホームレス時代の身なりの時は中学生って思われてました」

………そういえば。

この子がホームレスの理由って………

「なんですか？」

「あつ………いや。なんでも。」

じつと見つめちゃってたかな？

リビングに行くと母親と父親がにこやかに寛いでいた。

「あのー俺入院してたんだけど。」

「そうらしいわねえ」

「いや。心配とか………」

「死なないなら、問題は無いわ」

「何それ、薄情。」

夕飯を食べ終え、部屋で溜息。

明日はまゆと勉強……か。

つつか、聞きたいことって。

幸一に借りて移し終えたノートをパラパラとめくって復習してみるものの、

僅か数秒で断念。

何これ数学とか。

英語と生物は簡単なのに、数学とか馬鹿じゃねえの？

あんなのやってどうするんだよ。

（数学は、時空転移理論に必要なぞ？）

（じゃあ、必要ないな。）

「誠さん。まだ起きてますか？」

ノックと一緒に入ってくる声。

「ん？起きてるけど……」

「入っても？」

「まあいいけど。」

月が真横に見えるような時刻。

この時間でも寝てないって、寝れないってことか？

「夕方の視線。あれは私がホームレスだった理由が気になってたんですよね？」

「え？……あの。ごめん。」

「いえ、気になるでしょうし。教えますよ。」

香奈が微笑む。

そういえば、前から思ってたけど……

慣れるほど昔からホームレスだったってことだよな……

「それで……いつから？」

「物心ついた時からすでに。」

「・・・・・・・・え？」

思わず、声が出た。

1年や2年くらいだろうと、考えてた。
でも、全く違う。

「物心ついた時って・・・・・・・・」

「今から、14年ほど前です」

「そんな・・・・・・・・」

「あははは。私の為に悲しんでくれるんですか？光栄です」
彼女はそう言つて微笑むと部屋を出て行った。

17歳・・・・・・・・14年前。

3歳。

そんな年齢から・・・・・・・・

ただ、呆然としていた。

彼女は嘘付いているようにも見えない。

ただ捨てられたとかそういう訳じゃないとううことか？

そういえば、香奈は神体化を目視できるんだよね。
なんで？

それでもって翌日、

「それじゃやるつか」

「ふわぁ。眠い」

「寝てないの？」

「ははは・・・・・・・・ちよつとな」

軽く笑う。

結局、なんで神体化状態が視認できるのか解らなかった。

しかも、それについて考えてたら寝れなかった。

最悪だ。

「そういえば、聞きたいって?」

「ああ。幸一と話してたことについて。」

「うげ……」

「あはは。あの暗号考えたの私じゃん。」

「ですよ……」

というわけで、幸一に密かに頼んであった情報をまゆにも話すことに。

とはいえ、彼女にも関係あるだろうから

といっても、あの失敗した任務?についてのことなんだけど。

「壊滅?」

「そうなんだよ。学校も何もかも、破壊されたって」

「なにがあつたんだろ。」

「さあね。でもつかめる情報は少なそうだよ。」

「だよね……壊滅したのなら」

そして結局、このことについて話し合うだけでろくに勉強はできなかったのだが、

勉強した部分はまゆの教え方がいいのだろう完璧になり、それに属する問題も解けるようになった。

そして、日曜日と同じく勉強を教わる休日とは言えなくも無い日を過ごした。

まあ、もしも、教わる相手がまゆじゃなければ退屈だあ。

ってかんじで全くやらなかったな。

だって、まゆ怒ると怖いもん……

そして、運命のテストの日がやって来たのだが……。

第27話 『知って教えて情報交換』（後書き）

テストってやだよね。

優秀な幼馴染。

これは……いいなあ。

読んでくれてありがとう。

感想等いただけると、ハッピークッキーホワイトデー。

第28話 『テストもデートも』（前書き）

いやあ、良いですねえ……。何が？

平和な書き方を練習中だったりするので、
今回も優しい感じです。

それにしても、前書きって何書くの？

第28話 『テストもデートも』

「ふふふ。勉強できたかしら？」

「ははは。双葉先生。聞いちゃいけないぜ」

「自信満々なのねえ。」

「いやまあ………」

双葉先生にぼけたりしても………

意味がなあ………

「頑張つてねえ？」

双葉先生が手を振って歩いていく。

この前の疲れとかはなさそうだな………

関連性が解らないとはいえ、何らかの形で関わってるはずだし……

・ 前の、総司朗のこともある。

少しの変化にでも気づけるようにしておかないとな。

（気を張るのはいいが、テストだろ？）

（ん？英語と数学だからな。英語は問題ないし数学も）

（らぶらぶだったからな）

（勉強会だ！）

まったく………自称神め。

「まゆ。一限目英語だぞ？」

「あはは。英語は私より出来るもんねえ」

「それ以外負けてるけどな。」

「まゆ。誠。」

「幸一か。」

「テストどう？」

「誠の数学には勝つる。」

「……ここはあえて否定せずに頷いておこう。
そして勝つ……と。」

「誠……にやけるな。きもいぞ。」

「あははは。」

「言っとけ。言っとけ」

予鈴が鳴り、慌しく教室へと戻る。

うわぁ……この緊張感。

やっぱり、テストって感じだよなぁ。

周りから、今回の英語難しいらしいとか、色々な言葉が耳に届く。
っていうか、難しいとかどうとか言うならその分勉強すりゃ良いの
に。

「誠は余裕だね。」

「馬鹿言うな。俺だつて一応勉強してるぞ」

「一応で、学年トップなんだ」

「ははははは。まあね。日ごろの積み重ねだ。」

とはいえ、特にやってないんだけどね。

なんでか、出来るんだよね。

まあ、母さんと父さんが使う英語を聞いてるうちについてやつかな。
話してる間に担当教師が来て、用紙を配り試験開始。

……ふむふむ。

というか、世界とか地球とかをさ……
高2のテストで英語に直せって舐められてるの？
何この長文。

某ファンタジー小説じゃん。

ハ。ーって……おいおい。

このテスト作ったの双葉先生に思えてきた。
いやでも……………

……………担当双葉。
マジ来たこれ。

みんな100点いけるっていうか、優しすぎるってこのテスト

こうして突っ込み要素沢山英語のテストを終えた。

「誠……………あのテスト」

「担当双葉って書いてあったよ」

「ですよ〜。」

「でも、あれ著作権的に平気なのかな？」

「聞くな、久人。」

そこら辺、職員室で問題になってると思うんだけど……………
俺的に数学が問題。

鞆からまゆのノートを取り出す。

「あはっ。確認終えた？」

「ん。まあ一応な。はい。」

「あらら？嫉妬しちゃうね」

「そんなんじゃないから」

「そうでもないんだけど。」

「なぬ?!」

まゆにノートを返す。

昨夜遅くまでとは言わない程度に頑張ってたから
確認は平気かな……………

「あっそう言えば、誠。」

「ん？」

「ここ出るっばいよ？」

「おう・・・まじか。」

この2人を見つめる3人の目。

「私達は場違いだね。」

「くそ・・・誠め・・・」

「・・・俺は認めねえ。」

そうしてゐるうちに、予鈴と共に双葉先生。

「みなさん、準備良いですか？」

あと、1分そんな時に先生はそう言った。
準備？

勉強はした、カンニングにならないよう片付けた。

シャ-ペン4本。消しゴム4個

シャーシン入りケース2つ。

じゃあ、準備が良いか？

そんなわけが無い。

「先生！あと30秒で答案配れますか？！」

「ああ？！配るの忘れてた」

「ぎゃああああ」

緊張もへつたくりもねえ。

まあ、これが先生の良いところでもあるのだけど・・・
テストでは勘弁してくれ・・・

5分遅れでテストを開始。

・・・お。

さっきの先生の天然のおかげで緊張が解けたのか、
問題に対し、すらすらと対抗できた。

というか、先生。

これ範囲からはずれてる気がする。
でもまあ、簡単なやつで助かった。

あれ？

これ………。

おお。まゆの言ってた……………

しかもこれ題問5……………10点問題！！！！

きたああああ。

しかも、まゆノートに書いてあった要点部分がジャストミート！

これなんて俺得？！

神様になつて運氣上昇？

いけてるぜ！

早々に解き終わり、シャーペンを置く。

ふう。

いや……………しかし、まゆのおかげだな。

運とかじゃなく、元から真面目にやってるまゆだから、

要点とかを纏められるし、

それをやれば問題も解ける。

ありがたや。

ちらつとまゆを見ると、微笑んでいた。

「回収しますね？」

始まりは遅れたのに時間きっちり回収。

まあ、終わってたから良いけどさ。

「先生。」

「あら。テストよく出来たみたいね」

「え？」

「だって、嬉しそうなもの。」

「ははは。」

「あっそれで聞きたいんですけど」

「なあに？」

「……………今更だが聞くべきか？」

「いや、聞いてしまえ！」

「英語のテストに某ファンタジー小説が長文として出てたんですがあれは……………よろしいので？」

「……………え？」

「「え？」」

「固まる……………」

「何その反応。」

「ここで想定されること。」

「ミスった。」

「ボケ。」

「さあ。どっちだ？」

「私、長文作ってたっけ？」

「「そこですか?!」」

「……………まあ。なるようになれ。」

「さておき。」

「テストの為、2時間で下校。」

「いやあ……………ある意味テスト最高だぜ。」

「みんな、この後は？」

「俺は予定ない。」

「あつ。私も。」

「私も。」

「幸一は？」

「俺は買い物あるから先帰るよ。」

「そっか。じゃあな。」

「幸一の走っていく姿を見送ってから、昼食へと皆で向かう。」

「俺、タラコスパゲティダブル。」

「私も同じく」

「メガテリヤキハンバーグ!」

「私は、ドリアで。」

それぞれ頼み、来るのを待つ。

「久人……食べられるの?」

「あはは。無理だったら食べてくれるだろ?」

「女の子に何を言う?」

「え?女なの?」

「ひゝさゝとお?」

「冗談です。」

「……ふむ。」

「出来てるな。久人と健」

「うん。間違いない。」

確信する二人。

まあ、前々からちよいちよい怪しかったし。

料理を食べながら会話したり……

とおもったけれど、俺達は以外と早食そうしょくで、

届いてから5分足らずで食べ終わってしまった。

「もう食べ終わりました。」

「ご馳走様」

「うぐっ……健。サンキュー」

「だから言わんこっちゃ無い」

「言葉がありません……うぐっ。」

「この後、どうする?」

まゆが聞くと、2人そろって一礼して
用事があるからと、帰っていった。

ふむふむ。

「デートか」

「だよな。」

「・・・・・・・・・・。」

暫くの沈黙。

とりあえず、久人たちもお金を置いていったので会計を済ませる。
・・・・・・・・・・。

ここは・・・・・・・・つまあ・・・・・・・・ね。

「俺達も・・・・・・・・デートするか。」

ちよつと恥ずかしいけど・・・・・・・・切り出す。

背を向けて、沈黙を守るまゆ。

・・・・・・・・気まずい。

「・・・・・・・・しよつか。デート」

まゆが振り返って微笑む。

「んじゃ・・・・・・・・行くか。」

そつと誠が差し出した手をまゆが握る。

「なんか、恥ずかしいね」

「そうだな。」

見てる側のほうが恥ずかしいのでは？
とか思うのは気のせいである。

第28話 『テストもデートも』（後書き）

テストの後、皆で昼食かあ。

やったこと無い。

だってまだ、中学生だもん。

読んでくれて有難うなのです。
感想等頂けると、嬉しいです。

第29話 『本当に向けるべき心』（前書き）

題名的に考えて浮気ですね。
いや、まあ嘘ですけど。

というか、サブタイ考えるの面倒だなあ。
結構思いつかなくて、文章打ち終えてからつけてたりするもん。
マタゝりな話ってええなあ。

前置き無視してることは、気にしちゃいけない。

第29話 『本当に向けるべき心』

「はあ．．．．．」

「お嬢ちゃん、1人？」

また．．．．．ナンパ。

「そうなのですが、用事がありました」

「連れないね．．．．一杯くらい．．．．」

「ウザイ。キモイ。消えて目の前から。」

「なっ．．．．このくそ餓鬼！！！」

「殴る！蹴る？！ここで？公衆の面前で堂々と！」

「ちっ．．．．．」

男の人は舌打ちして去っていくし、

周りの人も、常識の無い女って目で見てくる。

別に良い。

私は、誠さんが好き。

誠さんが良い、誠さんじゃないと嫌。

誠さんじゃないと駄目。

なのに．．．．．。

栗崎まゆって人は私から奪った。

知らない人にナンパされなくて良いから、

誠さんに振り向いて欲しい。

でも、誠さんは。

そうだ、きっと、騙されてるんだ。

うん。そうだ、そうです、そうよ、そうだわ、そうなのよ。
だって、じゃなきゃ、あんな女に．．．．．。

罪深い・・・・・・・・・・
罪罪罪。

裁かないとねえ。

「あはははははは。」

香奈が不敵に笑う。

「さてと、新しいパソコン欲しいんだよなあ。」

しつかし・・・・・・・・秋葉原はいつ来ても栄えてるな。

まあ、俺には関係ないけど。

ん・・・・・・・・？

「お嬢ちゃん1人？」

おいおい。ナンパ？

そんなちゃらいかつこでナンパとか、時代を疑う。

いや、軽蔑さえしそうだ。

といつても、人を見る目はあるな。

茶髪ロング。

そんでもって、中学生なのか？

あの華奢な体型。顔もまゆに劣らず。

服装のセンスも。

でも・・・・・・・・中学生かといわれると、違う気もする（直感）。

というか、どこかで見た気もする。

「そうなのですが、用事がありました」

おう、なんて、清楚というかなんと言うかな・・・・・・・・

お嬢様と言いますか、優しい口調。

おっと、俺のキャラが変態に変わる前に切り上げてパソコンをとつと。

「秋葉原も変に栄えて・・・・・・・・アニメとか・・・・・・・・

いつそのこと、栗崎共々・・・・・・・・とりあえず、監視カメラと盗聴器は必要ね。

事前の情報収集のために。あとは、それを取り込むパソコン。調べたけど、ウィンドウズex9って機種が良いのよね。」
ブツブツと呟きながら、店に入る。

「……あれ？」

あの人古い機種しかも低スペック買おうとしてる……..
誠さんだったら教えるわよね……よし。

「さて……どれにしようか。」

買いにきたけど、予算少ないし、PC良いのどれか解らないし。適当に安いのにするか？

いやいや、それだと、すぐ壊れてまた買うことになる。

それはごめんだ。

適当に、ウィンドウズ98を手取る。

一万円。いいね。

値段的には。

でもまあ、低スペックなようで……..

「あのっ。」

ん？

「ぬわっ?!」

「あ……..驚かせてしまいましたか？」

「いや全然。」

さっきの子じゃんか。

見てたのばれた？

お前、見たんだから金出せとか？

「そのパソコンは低スペックなので、止めた方が良いかと」

「ははは。だよね。予算が5万しかなくてさ」

「どういった、機能が欲しいんですか？」

あれ？

もしかして、見た目によらず、電化製品が好きなのか？

なら、色々聞か。

「そうだな。エクセルとかがあると良いな。」

「それはどれにでもありますよ?」

「あとは、動画作成だったり、DVDの扱いとかしたり、テレビ見れたり、要領が大きいと尚いいな。」

「うゝん。流石に要望がおおいです。5万円じゃ、たりませんよ?」

「ですよゝ」

「そうですよ。計画しないと」

こういう人と話すのも誠さんを抜くと初めてかな。
なんだか楽しい。

・・・そうだ。

「私、このウィンドウズex9って言うのを買うつもりなんです」
「うわあ。最新機器。衝撃を受けても壊れにくく、防水も出来る。
更に俺の要望に答えているのに、ノートパソコン・・・」
でも。

・・・250000円

バロス。

「君は買えるのか・・・羨ましいな。」

「ふふ。貴方にプレゼントしますよ。」

「は?!え?いや、嬉しいけど・・・駄目だ。」

「何ですか?」

「それは・・・」

「私なんかプレゼントされても嫌って事?」

「そんなことは無い。君から貰うなら生ごみでも嬉しい」

「生ごみ・・・?」

香奈が首を傾げる。

やばい、普通に可愛い。

遠くから見て可愛いと思ったけど、

間近で、上目使い。

けど、今は関係ない。

「だって、俺と同じような年頃の子だろ？

こんな高いもののプレゼントさせるなんて、

お願いされても受け取れないよ。

君のオススメだし、コレを買い取る位金貯めてからまた来るよ」

幸一はそう言い、店を出て行く。

「…………不思議な人。

普通、欲望に忠実になるでしょ。

でも、あの人は断った。

…………。

ぼーっと幸一が出た後も、出口を見つめる。

「あの…………お客様？」

…………。

「あゝ」

「ひゃい?!」

「ぼ…………ぼうつと立たれますと、他のお客様の迷惑に…………」

「

ぼーっとしてた？

私が？今？え？まさか…………

そんなはずはない！

私は誠さんが…………

…………ああもう。

「すいません。ヴィンドウズex9を2つ下さい。」

「2つ…………ですか？」

「そうよ？駄目？」

「い．．．いえ。」

こうなったら、絶対プレゼントしてやる。

こんな、もやもや解消するには原因を絶たないと。
さっきの人にコレを渡せば良い。

うん。完璧。

「はあ．．．．．いくら必要かなあ．．．．．」

店をでた幸一はとぼとぼ歩いていた。

持ち金5万。

あれは25万。

5倍。

綺麗に5が並んでるな。

さらに、毎月の小遣いは、5千円。

足りないのは20万

えっと．．．．．

40ヶ月？

あれ？

1年って20ヶ月かな？

．．．．．12ヶ月。

3年以上先じゃねえええかああああ！

「うつ．．．．．うつ。バイトするしかないよ。でも来年受験．．

．．．．」

あれ？詰んだ？まじで？

そりゃないぜ．．．．．あれ？

「いいか？とつ捕まえて、2度と表に立てないようにするぞ？」

「でもいいのか？」

「いいんだよ。こんなとこ一人であるいてんだ、家出だろ。」

「なら遠慮しないぜ。」

「行くぞ！」

1人はナンパしてたやつか？

他の2人は厳ついな・・・おい。

しかし、何するつもりだ？

「やつぱりもう、帰っちゃったかな・・・」

流石に秋葉から出られたら、追えないし。

2つ買ったのはもう一つは誠さんに上げれば良いけれど・・・

このもやもやは消せない・・・

どうしよう・・・

「あの子か？」

「ああ。」

「んじゃ、頼むぜ？」

男が2人、ゆつくりと近づく

「あの・・・」

「はい？・・・またナンパ？」

またナンパ・・・懲りないわね。

「ははは。実は・・・」

「貰った！」

「あつ・・・」

パソコン・・・

もう！

後ろから男が近づいて、香奈の荷物を盗って走っていく

「待ちなさい！」

あの程度の速さなら追いつける！

っ？！

男が裏路地に消え、ゆつくりと慎重に歩く。

「どこに隠れたの?!でてきなさい!」

香奈の怒鳴る声がビル間に反響してこだまする。

お財布とかも盗られちゃったし……………
なんでこんなことになるかな……………

「とほほ……………」

小さく溜息を付いた瞬間、

気づけば、頬が地面に擦りついていた。

「ちよつ……………何のつもりよ!」

「いやあ、あんな公衆の面前で恥をかかせて頂いたからね。」

「貴方……………」

香奈の前に出てきたのは、最初にナンパしてきたチャラ男だった。

「どうも。ここのなら、殴る蹴るも自由だよねえ?」

「群れることでしか私みたいな、女にすら立ち向かえないなんて屑ね!」

……………どうする?

私は女だし。

武術とか心得てるわけでもない……………

今までの脅し文句だって群れて強気じゃ、意味無い。

「ほざいとけ。」

「ちよつ……………なにす……………」

無理やり立たされるが、後ろで男が抑えていて動けない。

「さあて。生意気な君の服を全て取っ払ってしまおう」

「?!……………嫌!駄目駄目駄目!それだけは嫌!」

「五月蠅い黙れ。お前はもう、俺達の支配下にいるんだから」

「嫌だ……………嫌だよ……………」

男がゆつくりと近づいてくる。

……………駄目。

自然と涙が溢れる。

誰か
・
・
・
・
・
・
・
・

誰か
・
・
・
・
・
・
・
助けて。

怖い
・
・
・
・
・
・
怖いよ。

「ぐはっ・・・・・・・・・・」

「え？」

背後からの鈍い音で、体が解放された。
何で？

「こっち！はやく！」

考えるより先に、
伸ばされた手を掴んで走る。

暫くは後ろから怒鳴り声が飛んでいたものの、いつの間にか聞こえなくなった。

「はぁはぁはぁ・・・・・・・・・・」

「危なかったなあ」

「え？あ・・・・・・・・・・」

聞いた声に顔を上げると、パソコンについて話していた人だった。

「な・・・・・・・・・・なんで？」

「あのあと、とぼとぼしてたら、さっきのやつらの企みが聞こえてさ。」

後つけたら、案の定。君がああなってたから」

・・・・・・・・・・私の為？

ううん。

違うと思う・・・・・・・・・・

「なんで、後つけたんですか？」

「もしかしたら、君が狙われるかもって思ったから。」
「え？」

「どういう理由か知らないけれど、胸が痛かった……
夕日に照らされたせいだと思いたいけれど、
そういうのは関係なく、私はこの人を……」

「あの……」
「ん？」

「今度こそ、お礼で。受け取ってくださいよね？」
奪い返した荷物の内、一つを差し出す。

「これ……」

「グインドウズex9ですよ。」

「でも……」

「そんなものより高いものを貰っておきながら貰えないと？」

「え？コレより高いものって？」

「へ？あつ……いえ。」

「私は浮気者なんでしょうか？」

「でも……」

「この暖かい気持ちは誠さんに対してのものとは違う。」

「えっと……家は……」

「千葉の……」

「あつ、不思議。近所ですよ？」

「本当?!」

彼の驚いた表情や笑った表情。

それらを見ると、幸せな気持ちになれる。

帰りの電車の中で、聞いてみた。

「貴方……彼女います？」

「ぐふっ・・・ハードな質問だ。そして。いません。」

「そうですかつ。」

不謹慎だとは思っけれど、喜んでしまった。

「なに笑ってんの？俺が彼女いなくて面白い？」

「いえ・・・」

この感情はきつと、「恋」と言うものなのだろう。

いつの間にか、まゆさんへの嫌な心は消えていた。

むしろ、この感情を誠さんに向けていたまゆさんに、

何の感情も無く、予言だからと、邪魔に入っていた自分が憎い。

でも・・・

もし許されるなら。

「さっきのパソコンより高いもの・・・しりたいですか？」

そつと聞いてみる。

「ん。知りたいな。気になってた。」

私は今どんな表情？

きっと幸せな表情だろう。

「私の心です。」

笑顔で言う。

「・・・・・・・・え？」

電車が止まって私たちの駅に着く

「呆けてないで、おりますよ？」

手を差し出す。

「あ・・・・・・・・うん。」

彼も受け取って、電車を降りる。

「あのさ・・・・・・・・さっきの・・・・・・・・」

歩きながら彼が聞いてきた。

「冗談じゃないですよ？」

念の為、先回りで回答。

どうすればいいの・・・・・・・・これ。

初めて会ったのに・・・・・・・・

いやでも・・・・・・・・

コレを納得するには一つだけ方法がある。

この女の子が、俺を好きだと？

正直、嘘にしか思えないけど・・・・・・・・

可愛い。

でも・・・・・・・・

話してて、思った。

まゆ、みたいだと。

重ねるのはいけないだろうがそう思った。

そして、楽しかった。

なら、答えは一つ。

「俺も……その好きだ。一目惚れってやつ？」

我ながら恥ずかしいけど、正直な気持ちだ。

彼女は一瞬驚いたけれど、すぐ微笑んだ。

そして、自然とある言葉がとびだした。

「運命を感じる」

そして、真つ暗な世界の街灯の下で、キスを……………した。

「そういえば、お名前は？」

「俺は、野村幸一だよ。」

「私は、倉持香奈。幸せそうな名前ですね」

他愛ない会話をしながら、家に着く。

しかし……………

「え？あの……………ここが君の？」

「はい。今、居候中で。」

「ん？幸一？」

「あら、幸一。なにして……………」

「誠さん、まゆさん。こんばんは。」

「えっと……………こん……………ばんは？」

横から歩いてきた、まゆと誠。

「私、誠さんはまゆさんに任せます。」

「へ？あつ…………え？」

「香奈ちゃん…………。」

「私、幸一さんとお付き合います！」

高らかに宣言する。

この選択に間違いは無い。

「まゆさん、今までごめんなさい。冷たく当たってたのはその…………」

気の迷いと言うか……………」

「ベ…………別に気にしてないから……………」

まさか、香奈ちゃんが幸一と……………」

まあ、かつこいいとは思うし……………」

いいのかな？

その日は、みんなで誠の家に集まって夕食を食べることになり、そして、2人は経緯等を夜中まで話していた。

第29話 『本当に向けるべき心』（後書き）

え？前回の2組のデートを書くなんて誰も言ってますんよ？
そろそろ30話だし、新しい章に入らんとあかへんなあつて
思うとつたんよ。まあ、わけとらんのやけど（笑）

良い組み合わせとちゃう？

誠とまゆ、幸一と香奈、久人と健。
ええなええなあ。

？フラグ？

まゆの香奈への負の感情が消えました。
香奈のまゆへの負の感情が消えました。
香奈と幸一が付き合い始めました。
？フラグ？

読んでくれて有難う。

感想等頂けると、嬉しいです。

『登場人物？』（前書き）

はい。

登場人物まとめ。

その~~~~~？

って少なっ？！

いやまあねえ？

新しい章（何度も言うが分けてはいない）に入るからさ。
その前にやっといた方が良くないかなって。

『登場人物？』

■まゆみ

小学生。

異世界に登場した虐められっ子

肉体的にも精神的にもかなり傷ついていたのか、最終的に由利を刺殺。

今回、失敗へと導いた原因。

■マイラー卿

白い人の本名。

それなりに高ランクの人のようだが………

■サタン

総司朗の正体。

闇を司り、まゆを手に入れようとしていたが、まゆと誠の絆の強さに敗北。逃げた。

■ミカエル

司の正体。

人間の体でも、大人の目には見えない体質。前々回、まゆを助ける為に誠を影から手伝った。

■桜庭 由利さくらば ゆり

いじめっ子リーダー

体格は関取。

まゆみの容姿に嫉妬し、虐めている。

親の職業柄、先生たちも彼女の悪行は黙認。

■桜庭 さくらば 美鈴 みすず

由利の母親。

彼女達の通う小学校の理事長。

さらに、桜庭組と言う暴力団組長。

普段は温厚そうに見せるが、

何でも金で手を打とうとする。

『登場人物?』（後書き）

ふう。

こういう時つて後書きへの記入要素なくて困るよね。
え? 困らない?

そんな貴方は優等賞。

第30話 『次は貴方から』（前書き）

わあい30話♪

頑張ってる。頑張った私!!!!!!!!!!!!!!
本来書くつもりが無かった幻の回。

でも、こういうの入れようかなって事で
急遽書いたと言う。

もはや、前置きは私の言葉。

第30話 『次は貴方から』

「テスト終わった!」

「久人。お前が言くと2重の意味に取れる」

「どういう意味だ?」

「テスト受け終わったと、駄目だったってことよ。」

「そういう、健は?」

「私はスポ選だから。」

「駄目な訳ですね。解ります」

「う．．．．．五月蠅い!」

健が怒って、久人をたこ殴りにするのをぼうつと見つめる。

平和だな．．．．．

いや、まあ、そう思う。

正直、あの失敗したことも含め、

この先、何も起きなきゃ嬉しいんだが。

といつても、時折神の選択をさせられる．．．．．

もう何回選んだのだらう、何回人を殺したのだらう。

本来なら、慣れるべきではない選択肢であっても、

繰り返すことで、また起きる、また、またと。

そうして選択していくうちに、

その事象を回避出来るはずの人を殺していくことにした。

その人が、注意してみれば．．．．．

その人が、無視しなければ．．．．．

止めていれば．．．．．回避できたのに．．．．．

選択肢ではそういう類に囲まれている人を切り捨てている。

自称神曰く、「この選択肢には正否は無い」らしい。

確かにそうかもしれない。

「誠？」

「ん？」

「帰らないの？」

「そうだな。帰るか。」

この選択は間違っている！

などと、ぬかす学者が居るのなら、

天罰に値する。

誰が好き好んで死なせるものか。

転生の概念。

そんなものが無ければ、

人が死、人が生。

そうでなければ、両方生を選ぶ。

でもそんなことすれば、新しい生命を作り出せない。

子供ブームとやらの真相も、

戦争で失った生命を復活させる為に、神が仕掛けたこと。

……こんな話を続けたところで意味などないか。

死する生命より、今生きゆく生命。

ようするに、過去を振り返る余裕があるのなら、進むべき未来を見

据えよ。

って感じだな。

「幸一。お前、香奈とデートだろ。まあ、頑張れ」

「大丈夫だ。問題ない。」

走っていく幸一の背中を見つめて笑う。

「でも、あれから数日だけど、信じられないよ」

「何が？」

「香奈ちゃんと幸一。」

「そうか？俺的に似合うと思うけどな」

「ん。そうねっ」

今隣に居るまゆの笑顔が見れるうちは、頑張れる気がする。

「俺達もデートするか？」

「ば……。馬鹿。平然と言わないで……………」

「十分恥ずかしいけどな。」

「予定は？」

「無い」

「何それ……………」

「たまにはぶらりも良いだろ？」

「……………貴方が居てくれるなら」

まゆがぼそつと呟く。

「ぶつ……………おま……………」

「お返しだよ？」

数歩分だけ、前に歩いていつて夕日を背に振り返って微笑むまゆ。
自分の為に使えない力。

もし、彼女が死んだ時。

俺は、救う為に力を使うのか？

禁忌を犯して……………」

「まゝこゝと？行くんでしょ？」

「あ……………ああ。」

考えるのは……………止めておこうかな。

「もう。私じゃご不満ですか？」

「滅相もございません、姫様」

「あはは。変な言い方しないでよ」

2人仲良く、談笑しながら家路につく。

「遅いですよ？幸一さん」

「いや、弁解のしようがありません」

「それなら、今日は私の言うこと聞いて下さいね？」

「……なんなりと、お嬢様」

「では、人間馬にな리なさい」

「なっ……それは。」

「冗談です。行きましょ？今日と言う限られた時間を命一杯楽しみましょ？」

「ああ。」

香奈と幸一も合流。

現在は学校の後であり、すでに夕日の見られる17時。

「そつえば、何で敬語なの？」

「え？それは。私あんまり人と接する機会が無くて、会話できること自体に憧れていたからだと思います」

「……色々あったんだね。」

「ええ。まあ。でも幸一さん。今は止しましょ？」

「そつだな。」

時間が時間で、遊園地とか、水族館、動物園。

そついった類のデートはできない。

でもま、一緒に居られるだけ満足だろ。

彼女居ない暦〓年齢からの脱出。

それが、こんな可愛い子。

俺……幸せ。

「幸一……さん？」

「ん？」

「にやついてますよ？風邪ですか？」

「にやつく〓風邪？そんな訳ない。それよりさ。」

「なんですか？」

「呼び捨てにしてくれない？」

「え？」

「なんていうかその……………」

まあ、幸一さんって呼ばれてると、

新婚夫婦とも思えるんだけど……………

やっぱり……………」

「なんか、他人みたいな気がするからさ」

いや、まあ。結婚してないから他人なんだけど。

そこは言っな。

「呼び捨て……………は。抵抗があるんですが……………」

「あつ。嫌なら、平気だよ」

少しだけ縮こまって、俯く香奈。

悲しいのか、恥ずかしいのか何なのか。

表情が見えなくて、読み取れない。

「とりあえず……………どうする？」

「そうですね。夕食を頂きましょう。美味しいレストラン見つけたんです」

「ん。そうするか。」

先に歩いていく香奈。

……………ん。

「香奈ちゃ……………香奈！」

「へ?!」

俺は先に、呼捨てにさせて貰う。

小さく笑って、手を差し出す。

驚いて、顔と手を交互に見る香奈の仕草が可愛い。

「どうした？嫌か？」

悪戯に聞いてみる。

「え……………えっとその……………」

徐々に赤くなっていく顔。

今にも煙が噴出しそうだ。

「嫌じゃ……無いです。」

差し出されていた幸一の手を掴む。

「ん。案内してくれよ。そのレストラン」

「は……はい。」

緊張？違う、きっと恥ずかしいんだろうな。

眼下にギリギリ映る、香奈の頭。

俯いていて、無言。

でも手はしっかりと握っていた。

「ここです。」

「え？」

「さっ。行きましょ？」

「あ……ああ。」

とりあえず、一緒に中へ入る。

ここって確か、超高級レストランじゃなかったか？

三星？ははは。舐めんじゃねえよ。

六星？いえいえ。

7星レストランではありませんか。

完全予約制の。

何この子。貴族か何か？

「ここ……平気なの？」

「はい。お気に召しませんか？なら店を……」

「いや、違う違う」

「では……」

「こんな高い所で食事って。」

「今は、株で遊んでるので一応収入的に問題はありませんよ？」

「……ナニモノデスか？」

株って………

「香奈はいくつなんだ？」

「私は、17ですよ。」

「同い年?!」

なんか凄い、負けた気分。

なんか物凄く、高い料理の数々を食べ終え。
会計。

一皿分くらい………と思えど、

その分の金額すら、全財産でも無理。

「いいですよ。ここは、私の推薦ですから。次の幸一………さんの推薦の場所食べてみたいです。」

「ん」。正直、自信が無いんだけど………」

………七星に対抗できる場所無いだろ。

「私は、幸一さんの馴染む味が知りたいんですよ?」

「う………うん。了解。」

なんか、純粹というか、なんというか。

そうこうしている内に、家の前。

「次は俺が奢るよ」

「楽しみにしていますね?」

名残惜しいけど、すぐ会えるしな。

「香奈。」

「はい?」

「また明日」

「はい。」

………。

互いに言っても、見詰め合って動かない。

「気まずいなあ……」

「ああ……もう。」

「勝負に出ろ！」

「あの……さ。香奈」

「はい。」

「その……なんだ……」

「恥ずかしいな……やっぱ……」

「見ていられなくて、俯く。」

「……幸一。」

「へ？」

「急に呼ばれた、名前。」

「それは呼捨てで……驚いて顔を上げると、目の前に香奈がいて。」

「なっ……」

「そのまま、香奈が小さく背伸びをして、キスをする。」

「次は、貴方から頂きたいです。幸一。」

「香奈が微笑むと、家の中に消えていった。」

「自分の部屋で、ベッドに座り込む。」

「え……」

「な……」

「呼捨て？キス？次？」

「あれ？あれ？」

「えっと……」

「あれ？」

「幸一はその日、一睡も出来なかったとか何とかか。」

第30話 『次は貴方から』（後書き）

香奈って性格影響受けやすいのかな？

緊張状態って言うか、

誠の時はヤンデレ風味だったけど、
ここだと、照れ屋みたいな感じに。

まあ、可愛ければいいんです。

こんな平和がー一生続くといいね。

読んでくれて有難う

感想等お待ちしてます。

第31話 『彼女の正体』（前書き）

予定外の幻の回により、30話から31話になった。

題名通り、あんまり平和ではなさそうですね、
というか、ないんだけど。

第31話 『彼女の正体』

30話の翌日のことである。

「いやあ、しかし驚いたな。」

「えへへ。」

「辛くなかった？」

「辛かったです。とっても。何度も死にたいと思いました。

同年代の子達が、母親や父親と楽しそうに話しているのを見て、憎らしく、疎ましかった。けれど………そんなのは過去の話ですから。」

香奈が幸一に対し微笑む。

前は、言った通り。

殺したいとさえ思ったりもした。

でも、本当に今はそんなのどうでも良いって思える。

この暖かい気持ちは、

それほどまでに私を癒してくれる。和ませてくれる。

もしあの時、まゆさんに悪意を抱いてなければ、秋葉には行かなかった。

幸一に出会うことも無かった。

そしたらどうなっていたのだろう………

「香奈？」

「へ？」

幸一が、香奈の頬を撫でる。

「泣いてたぞ？」

「……………それは、嬉し涙ですよ。」

「そっか。」

「・・・・・・・・聞かないんですか？」

「そっちが話してくれるなら、聞くよ。」

「じゃあ、秘密です。」

「なに?!」

「あはははは」

うん、楽しい。

誠さんといった時みたいな、堅苦しい感じがしない。
それはきつと、自分の意思だから。

・・・・・・・・じゃあ。

今までは？

つ・・・・・・・・・・・・・・・・?!

「香奈？」

「きょ・・・・・・・・今日は具合悪いので。帰ります。
帰ると言っても、数メートルの距離。」

居候先である、誠の家の自分の部屋に籠る。

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・はあ。」

呼吸が荒い。

気持ち悪い。吐きそう。

熱っぽい、だるい・・・・・・・・

駄目だ・・・・・・・・

まだ、15時……でも……
「少し寝れば……落ち着くかな？」
香奈は布団に潜って目を閉じた。

「ただいま」

あれ？

誰もいないのか？リビングを見ると、

「し・ご・と行くね」帰るのは、一週間後かな？

その時には、まぐ（以下略）

つと書かれていた。

まあ、要するに、仕事か。

しかし、母さんは馬鹿だろ。

一週間後に孫の姿？

なにそれ凄い。

順当に行っても時間かかるから。

そして、その気は無い！

あれ……香奈は？幸一の家。うん。問題ない。
のんびりしようかな。

部屋に籠って、PSPを手にベッドに転がる。

……うん。

ここで、コイツを突っ込ませると……
リアル系なのに運動性低すぎるだろ！

なんだよ140って。

まだ、緑色の一つ目さんの方が高いぞ！

おいまてえ！

命中3%だぞ？！

何故当たった！ちくしょー！

やっとクリア……って……あ。

そういえばフラグ回収してない。
やり直しだあああああ！

「もう良い、今日は止めたって……え？」

「そろそろ、ぶん殴ろうかと思った」

気づくと、目の前にまゆが居た。

「まゆ……いつの間に」

「10分ほど前に窓から。」

「緊急時以外、玄関から来なさい」

「私にとつての玄関。」

笑顔で、俺の部屋の窓を指差す。

何？何ナノこの人。

さておき、

「なんかよう？」

「うん。お母さん達いないって聞いたから、料理しに来た」

「それは助かる。」

「じゃ、手伝って。」

いつの間にか、外も暗くなり、時計を見る頃には20時だった。

「香奈ちゃんと幸一も呼ぶか？」

「うん。大勢の方が面白いから。」

暑いから動きたくない。だるい。

とか思いつつ、体を起こして、幸一の家へ向かう。

「よっ。幸一」

「誠？どうした？」

「今日、親がいないんだよ。それで、まゆが夕飯をな。食へに来るか？」

「いいのか？」

「はっはっは。問題ない。」

「んじゃ、遠慮なく。あつそういや、誠。」

「ん？」

「香奈は具合平気か？」

「は……………」

香奈……………？

「てつきり、お前と居るんじゃないかと」

「お前の家に帰ったよ？」

「具合悪い……………か。部屋で寝てるのかも。まあ、一緒に来いよ」
幸一をつれて、家に戻ると夕飯は完成していて、

まゆが少々睨んでいた。

「遅いよ？」

「いやあ、悪い。香奈は、部屋で寝てるっぽい。具合悪いって」

「そうなの？一応見に行こうか」

まゆが体温計や、タオルなどを準備して、3人で階段を上がる。

「まゆ。どうぞ。」

「はいはい。」

ここでドアを開けたら着替えています。

なんてことになったら洒落にならないので、まゆに覗いてもらう。

……………。

「うん。寝てるみたい。」

ベッドを見ると、盛り上がっていた。

まったく……………具合悪いなら、悪いと……………

3人で部屋にこっそりと入る。

……………静寂な空間。

妙に緊張する。

……………。

「いやあ、寝顔はいいもんですね。」

「誠。ぶん殴るわよ？」

「冗談です。」

「幸一……………」

「……………香奈？」

「香奈！」

「ちよつ……………寝てるのに……………」

「馬鹿野郎！何言つてやがる！呼吸。呼吸してない！」

「は？！え？！」

確かに……………注意してみると、呼吸で出来る胸の上下が無い。

「くそつ……………」

（おい！お前は見てないのか？！）

（……………見てたさ。全て）

（どういうことだ？）

（その子は捨てる）

（お前……………何言ってるか……………）

（俺もさっきまで知らなかったが……………）

……………なんだ？

聞いちゃいけないような気がする

生唾を飲む。

……………。

白い人の返答を待つ。

知らなかった？

何をだ？

それは、香奈を捨てなければいけないほどの秘密なのか？

「早く答えろ！」

「誠?!」

「誠……どうした?」

「聞くのか?」

白い人が、香奈の枕元に現れた。

「もちろんだ。」

「ええ。」

「なっ……んだ?」

「この倉持香奈という少女は、誠達が聞いたとおり、物心ついた時から、ホームレスだった。

そして重要なのは、何故この子が、ホームレスになったのか。」「……。」

誰一人、何も言わない。

そして、白い人が口を開く。

「この娘、倉持香奈は墮天使ルシファアの生まれ変わりだ。何らかの理由で、記憶を無くし、人間として転生。親も何も居ないのはその為だ。」

な……に?」

全員が衝撃を受けて、黙り込んだ。

「ルシファアって……あの?」

「サタンの化身とも言われ、強力な力を持っている。いいか?いますぐ、捨てろ」

捨てろ?

誰を?

香奈ちゃんを?

ルシファア?サタンの化身?

おいおい、まじでファンタジーだな。

けどまあ。

思わず、笑みがこぼれる。

「断る。」

「なに？」

「断る。香奈ちゃんがルシファー？上等上等。だからなんですかって感じだよ。」

「誠……………」

「里倉誠。神でありながら、神の道に反するつもりか？」

「おいおい……………いつから俺は神になった？代行だろう。それに。」

この世界は俺の管轄なんだろう？俺の管轄に入り込んだんだ！

悪魔だろうが、天使だろうが、捨てるも拾うも俺が決める！

管轄外のお前にそんな事、言われたくはないね！」

「本気か？！」

「悪いが、自分の為に使う気も無いぜ？」

幸一。お前は香奈を助けたいか助けたくないか。選べ。」

誠が幸一を見つめる。

「……………神？堕天使？悪魔？ルシファー？なんだよそれ、

意味わからねえ。

誰かに説明頂きたいね。

でもさ、解ってることが一つだけあるんだよ。」

幸一が拳を握り締める。

「俺は、香奈を助けたい！その白いやつ！お前は香奈を助けることが、神の道に反するって言ったよな

そうかい。なら、俺は神に見捨てられたとしても、香奈を助ける。

堕天使？元は天使じゃねえか。たまたま堕ちちまった天使を救いも

せず、敵？

ふざけんな、そんなの神でも何でもねえよ。ただの………屑だ！」

幸一が、白い人を睨む。

幸一。良くもまあそこまで言えたもんだ。

すごいよ、尊敬するよ。幸一。お前は最高だ。

「自称神！反論は！」

「………管理者がそう言うならそうすれば良い。ただ、手助けはしない。」

「上等だ。」

白い人が光の中に消えていく。

………良し。

「まゆ、幸一。良いな？」

「ええ。いつでも。」

「良く解らないが先導頼む。」

「任せとけ。」

にやつと笑う。

こういうことは、初めてだけど、うまくいくはず。

意識を香奈ちゃんに集中。

香奈ちゃんを助けてと祈りを頂いた。

我らの御霊を、彼女の元へ送りたいまえ。

3人が、目をつぶる。

「いくぞ！助けに！」

3人が光に包まれて消える。

第31話 『彼女の正体』（後書き）

いやあ、衝撃の事実。

正直、作者自身ここまで考えてなかった。
いや、本当。

書いてる最中に思いついた。

読んでくれてありがとうございます。

感想等お待ちしております。

第32話 『異世界編く始まり』 (前書き)

いやあ、ゲームやりながら考案すると変な方向行っちゃうね。
まあ、気にしたら負け。

極力他者と被らないよう全力は尽くします。

こっこのの……描写苦手なだけだね (笑)

第32話 『異世界編く始まり』

「・・・・・・・・で？」

「と。言われましても。」

「厄介なことになったな」

寒いし、床に敷かれたうすっぺらい紙がベッド？
近くで、水の滴る音が響く。

「あのく出してくれない？」

「駄目だ。」

「ですよね。はあ・・・・・・・・」

こんなところに居る余裕はないんですがね。
最悪、牢破りでも覚悟しないとな。

つつかまさか、いつも通り異世界にこれたと思ったら・・・・・・・・
いきなり、兵士に囲まれて不審者扱い。まじ笑える。

「まゆ、平気か？」

「少し寒い程度だから平気」

「いい加減出してくれないと、牢破りするぞ？」

「幸一、落ち着け。」

「けど！」

「解ってるさ。俺だって1分1秒が惜しい。けど、まだ出して貰えるかもしれないだろ」

とはいえ、望み薄いんだけどな。

「お兄ちゃんたち・・・・出してあげて」

「姫様?!」

「私は出してと言ったのよ？」

「し．．．．．しかし．．．．．」

「はやくくう！」

「．．．．．あれって。」

「貴女．．．．．まゆみちゃん？」

「え？なんで．．．．．知ってるの？」

「どういう事だ？なんで、ここにもまゆみちゃんがいるんだ？
訳解らないぞ？」

「．．．．．けど。」

「出してくれて助かりました。」

「牢屋から全員でてお礼を言う。」

「いえ、私のお願いを聞いてくれない？」

「え？」

「ついてきて」

「言われた通り、彼女について行く。」

「長い金髪．．．．．あの世界のまゆみちゃんとさほど変わらない。」

「名前も一致．．．．．」

「単なる共通点だといいいけど。」

「あれ．．．．．この流れは。」

「連れてこられたのは、玉座の間。」

「あれ．．．．．王様いない．．．．．？」

「ふふ。それはですね．．．．．」

「スタスタと、まゆみが先に進み玉座に座る。」

「私が、女王です！」

「へえ．．．．．」

「驚いてくれないの？」

「まあ、その位なら。んで？俺にして欲しいことっていつのは？」
「なんとなく、予測はつく。」

「こんな感じのRPGやったことあるし。」

「それなんだけど、魔王を退治……っていうのは期待してないわ」

「……おいおい。」

「この世界の魔王は、馬鹿みたいに幻術使って隠れたり、高みの見物とか、

姫を攫った程度で調子に乗ったり、そういったことはしてない。強敵だよ。」

「……じゃあ、何しろと?」

「私の妹を助けて欲しいの。」

「妹……?」

なるほど……

それで、その妹が香奈ちゃんというわけか。

「請け負った。ま。大方拒否すれば、牢屋に逆戻りだろうし」

「解ってるじゃない」

「ふざけおってからに」

「誠……凄く面倒なことに」

「その妹って言うのは?」

「香奈って名前」

「うん。文句なし。早速行かせて貰うよ」

誠達がくるっと回って行こうとすると、

兵士がスロットみたいなのを持って立ちはだかった。

……なんだ?

「えっとね、貴方達の職業決めて」

「……これで?」

明らかにスロットなんですけど。

運ゲーだろ。

みんな、商人とかになったらどうするんだよ。

勝ち目ないじゃねえか。

「私まわして良い？」

まゆが先に回す。

.....

「なんか出てきた。」

チャリーンと音が鳴って、紙が出てきたのをまゆが見つめる
なにこれ.....

まゆが、誠に紙を渡す。

.....はあ？

「ツインソードフィロソファー双剣賢者？どついう職業だよ」

「二刀流剣士と賢者の融合じゃないか？」

いやいや.....

そんなことしたら、チートだろ。

賢者に攻撃力とHP付け足したようなもんじゃねえか。
勇者の上の階級か？

「次俺。」

幸一が回す。

.....？

「俺は、マスターオブダークナイト究極黒騎士.....？」

この世界の職業基準ってどうなっているんだ？

究極黒騎士って.....チート？

「次、誠よ？」

あんまり期待せずに.....

「オーバースキル際限無き力.....？」

絶対チートじゃなか。

と言つかすでに、職業で良いのか？

「みんなの職業決まったね？うん。頑張つてね」

「これって、チートじゃないよな？」

「うん。今まで聞いたこと無いけど、平気なんじゃない？」

笑顔で手を振るまゆみに見送られ、

いざ、香奈救出の旅へと出発することになった。

草原かぁ。

つうか、変なのが沢山歩いていらつしやるんですが、

あれは、戦うべきじゃないですよねぇ…………。

「グルルル」

あつ…………。

「誠！見つかっちゃったよ？！」

「さつさと叩こう！狼タイプだから逃げるのは不可能に近い。でも…………武器無いんですけど。」

「誠！まゆ！」

幸一が、丈夫そうな木の枝を2人に渡した。

「サンキュー、これで戦える」

「グルルル！」

狼が地面を蹴り、まゆに飛び掛る。

まゆが、木の枝を構えて待つ。

タイミング調整。見切れば、一撃で。

傷つけるのは好きではないけれど…………

「えいつ！」

「ギャウン！」

至近距離にきた狼の腹を木の枝で殴り飛ばす。

「おお…………容赦ない一撃」

「容赦してるから！」

「誠、まゆ。まだまだ居るみたいだぞ」

周りを見渡すと、狼やら巨人やら…………

「うげって数なんですが……」

「あはは。ゲームとは違うよね」。

倒すと、遺体残るし……

戦ってる最中に敵が寄ってくるのが現実だね……

まゆがしょんぼりして言う。

たしかに、

ゲームやってて、戦闘中に敵が寄ってこないのが

普通と考えていたけど……

畜生……現実是非情なりiiiiiiii!

「おい! 誠! どうする?!」

「詰んだから、教会に戻るだろ。」

「諦めてる?!」

とはいえ……

「あのさ……」

「ん?」

「魔法とか、使ったり……」

「使えるの?」

「うん。頭に何個か浮かんた」

「それはレベルアップというやつか。」

「たぶんね。それで、思い浮かんたんだと思う」

どうなるか解らないけど、やってもらうしかないね。

「幸」。まゆの詠唱終了まで、耐えるぞ」

「解った、まゆ。頼んだ!」

「うん。」

光よ、導きたまえ……

闇よ、導きたまえ……

影を導き、我らにあだなす者達を

永遠なる闇に葬りたまえ！

エターナル シャドウ
「永遠の闇！」

「うわっ・・・・・・・・・・すげっ・・・・・・・・」

「グルルル?!」

「ギャグワアアアア」

魔物達の足元の影が、急激に広がり、魔物たちを飲み込んでいく
獣たちの叫び声が響き渡る。

自分でやったことだけど・・・・・・・・・・
生き残る為だけれど・・・・・・・・・・
なんか・・・・・・・・嫌だな・・・・・・・・

「まゆ・・・・・・・・平気か？」

「良い気はしないけれど、こうするしかなかったんだもんね。」

「まゆ、誠。早めに移動しよう。極力戦闘は避けないと。」

「そうだな。」

休憩殆どなしで、草原を駆け抜ける。

時折襲い掛かる敵を木の枝で殴り飛ばして気絶させ、逃げる。

確かに、職業がただの剣士とか武道家とか・・・・・・・・

そんなのだったら、進むことも出来ない。

スラ。ムとかいう、半固体の敵なんて希少種じゃねえか。

完全に弱肉強食で、繁殖間に合ってない。

「街だよ！」

「よし、急ごう！」

異世界に来て初めての街が見えてきた。

第32話 『異世界編く始まり』 (後書き)

わあ。

凄い展開。

どうしてこうなったとか禁句(笑

ええやん。ファンタジー

一応被らないよう努力するからするから。

がんばろ

読んでくれて有難うございます。

簡素等お待ちしています。

読者の温かい目。作者の自己満足の提供でお送りいたしております。

第33話 『情報収集』（前書き）

もう取り返しのつかない

異世界編2話

どうなるんだろうか・・・これから。

第33話 『情報収集』

「この世界ってどういう構成なんだ？」

「そうだな。香奈が捕まってる。それを捕まえたのが悪魔達なら、さしずめ、悪魔の世界だろうな」

「アウェイってことなのね？」

「まあ、予測だけだな」

「・・・・・・本題はいいか？」

「ああ。そうだな。」

いつかは・・・・・・

とは思ってたんだけどな。

まさかこんな急に。

・・・・・・仕方ない。

「俺は神様代行なんだ」

「なんだそれ。」

・・・・・・聞かれた。

なんて言えばいいのか。

「一度死んでるんだよ。俺」

「はあ？お前・・・・・・」

「本当だよ？幸一。私たちが、この世界に来れたのも、誠が神様代行だから。要するに人外って事」

「まゆ・・・・・・最後は酷い」

「簡単に言っただけ、それに私もでしょ。」

「まゆも？」

「ええ。近い感じではあるわね」

なんだそれ……
こいつらが人間じゃない？
見て、話せて、笑えて……
触れられて……
でも、確かに……

「なら、お前が前に消えたりしたのも？」

「それも俺が代行だから」

「そうか。凄いんだな。」

「……引かないのか？」

「ばあか。人外だろうが、代行だろうがなんだろうが。
お前はお前なんだろう？」

「そうだけど。」

「ならいいじゃんか。それでさ。」

正直、理解し切れてないけれど、

誠は誠、まゆはまゆ。それだけ解れば十分だろ。

自分に言い聞かせる。

「誠、幸一。街に着いたよ？」

まゆが微笑む。

気づけば、街の正面まで来ていた。

「本当だ。さて、3手に分かれて情報収集しようか」

「幸一……」

「誠。俺は香奈を救いたい。その為に力を貸してくれるだろ？」
「……当たり前だ。」

「んじゃ、代行とかそういうのは関係なし。

俺達は、誠、まゆ、幸一。それでいいだろ。」

「そうだね。誠。幸一はこういう人なんだよ」

「……ありがと。」

「キモイから礼は要らん」
「なにい?!」

ふふふ。

いつも通り。

私達は変わらない。

いつまでも……ね。

「ぐずぐずしないで、収集いくよ!」

「「おう!」」

3手に別れ、情報収集を始めた。

街なのに広いわね……

あの旅人に聞いたほうが良いかな。

「あのすいません。ちょっと聞きたいんですが」

「ん? 何だい?」

黒い鎧に身を固めた、いかにも騎士

という、男の人にまゆが話しかける。

「この大陸について少し。」

「そうだね。特に特徴の無い大陸だよ。

山と草原しかなくて殺風景かな。」

「他には……」

「隣の大陸と緊張状態って事かな」

戦争になる可能性もあると……。

「君は、出たてかい?」

「ええ、まあ。」

「ふむ。名前聞いて良いかい?」

「まゆです。」

「俺は、レイヴン。また会えるといいな。」

「ですね。」

レイヴンと別れ、あたりを見渡す。

あとは……そうね。

一応……見ておいた方がいいわね。
まゆが、小さな小屋に入っていく。

「無駄に広い街だな。」

「そうやる。うちもそう思う。」

「は?!」

「おどろかさせてもうたか?!」

「いや……誰?」

緑色の長髪の黒い装備。

武器は……レイピア?

だとしたら、魔剣士か?

「うちが気になるん? 一目惚れなん?」

「馬鹿言わないで下さい。そんな余裕ないです。」

「もう恋しとるんか、ええなあ。」

面倒な人に捕まっちゃった……。

まゆと幸一はちゃんと集められてるかな……

「君は、初心者なん?」

「はい。冒険者としては。」

「そうかい。なら、きいつけんとあかんこと教えといたる」

「なんですか?」

「人は信用したらあかんよ?」

「……貴女も?」

「どうやるね。まあきいつけるよおに」

そう言い残し、女の人は去って行った。

不思議な人だったな……

名前くらい控えておくべきだったか?

人を信用するな……ね。

肝に銘じてはおきますよ。

総司朗のこともあるからな。

さて・・・・・・・・・・他の大陸について聞くか。

適当に歩く幸一。

あのシスターに聞いてみるか。

「あの・・・・・・・・すいません。」

「はい・・・・・・・・？」

「この大陸は・・・・・・・・」

「特に特徴はありませんよ？」

有名な王国は、クラッチ王国。頭首はまゆみ様。

お若いのにやられている理由は、

ご両親が早くに病死してしまったことが原因です。

現在、まゆみ様の妹様の香奈様が行方不明であり、

誘拐したのは、隣の大陸にある独裁国家のヴィヴ王国だとも言われています」

「ヴィヴ王国？」

「はい。現在橋が落とされている為、隣の大陸へ行くのは不可能ですが・・・・・・・・」

ヴィヴ王国は独裁的で、街や村などに重税を押し付けて居るので逃げる人も居ます

さらに、王国管理内容が全くの不明でどんな王で、軍備は？

全て不明なんです。」

説明聞けるのは有難いんですけども・・・・・・・・・・
凄く長くなりそうだな。

「この大陸に関しては、以上です」

「そうですか、有難うございました。」

足早に離れる。

正直、これ以上はめんどうだ。

さっさと、合流しにいくか。

情報収集を終え、宿屋に3人集まる。

「まゆ。一部屋でいいのか？」

「別に。離れると、逆に何かあった時困るからね。

それに、何にもないと信じていますので。」

「急に敬語?!」

「それで……………」

「じゃあ、俺から……………」

誠から、順に情報を交換していく。

なるほど……………戦争か。

香奈が隣の王国に居る可能性もある…………と。

けど橋は落ちてるのか……………」

それに、全て不明だと、

王国丸々相手にすることになるのは困るな……………」

「それと、誠。」

「ん？」

「この世界のお金は円で良いみたい。一応、世界地図と簡単な装備とアイテムは買えたから。」

「流石まゆだな。そういうところまで調べてくれる。」

「えへへ。今日はもう休んで、明日に備えましょ。」

まゆたちが、電気を消す頃……………」

「そうなんか？」

「名前は「まゆ」確かにそう言っていた」

「せやけど、こないな所に、女王がいるもんなんか？」

「知るか。我々の任務はクラッチ王国の壊滅。

あれが女王なら仕留めるだけ、とりあえず仕留めるべきだ」

「せやね。どないする？」

「仕掛けるなら．．．．．今夜だな」

大いなる陰謀の一部が、影を伸ばしていた。

第33話 『情報収集』（後書き）

ネーミングセンスないと、私は自負している。

・ ・ ・ ・ ・ o r z

だって、いいの思い浮かばないんだもん！

まあ、細かい事はむしむし♪

読んでくれて有難う。

感想等お待ちしております♪

読者の温かい目。

作者の自己満足

以上の提供でお送りしています。

第34話 『RPGだったら、多いものです。』（前書き）

サブタイはもう・・・ね？

戦闘描写がうまくいかないと、

ファンタジーものってむりだよねえ？

何とか頑張ろう。

家にある小説が私の参考書（え？

第34話 『RPGだったら、多いものです。』

「アイシス、いいな？」

「もっちゃ、任せとき。万が一でも窓からしか逃げないはずや
そうやったら・・・頼むで？」

「お前の速さから逃れられるやつはいないだろ。」

「そうやね。」

1人が宿屋の外で構え、もう1人が部屋のドア前に待機。

「「3」」

「「2」」

「「1」」

「0!!」

0でドアを蹴破って侵入し、寝室へ一直線。

「貰った！」

長い髪が垂れるベッドに剣を振り下ろす。

クラッチ女王！その首貰った!!!

確信した時だった。金属音が響き手が痺れ、持っていた剣が弧を描
いて背後の壁に突き刺さる。

「え？なに？なに？！」

まゆが飛びおきて叫ぶ。

「・・・・アンタ。何者だ？」

「答える義理はn_____?!」

首に冷たく鋭い感触・・・・・・

背後を取られた?!うちが?!

「答えてくれないか?」

剣を弾いた黒い影が言う。

「うちの背後を取るなんて、アンタ……………」

「こっちの質問に答えてくれ」

背後の声。

この声は夕方の……………

なるほどね。

「「冒険者としては初心者」ってことなんやね……………」
その他のスキル等は初心者やないと……………」

「まあな。」

……………まあ初心者なだけどね?

やっぱり、RPGゲームって奇襲多いじゃん?
しかも、昼間普通に会話した人が暗殺者とかさ。
よくある展開。まあ定番ですよ。

さらに、「人は信用しちゃ駄目」って

私、怪しいですよって宣言してるようなもんだし。

まあ、細かいのは後にしておいて。

「まゆを狙ったな?理由は?」

「はっ。調子に乗るんじゃないよ!」

「幸一!バック反転右40度に火の魔力!」

「なっ?!」

まゆの指示した場所から離れると、前触れも無く爆発。

「はずした?!流石やね。魔力眼の持ち主や」
マジックアイズ

「ごめん。そんなの知らない」

この小娘ムカツク!……………なら!

吹き飛ばせ、烈風!!

「ウインドラッカー！」

「ぐっ?!」

「誠?!」

目を瞑ってしまふほどの風が室内で吹き荒れ、止む頃には、誠が膝をついているだけで、女が消えていた。畜生……油断した。

「誠、平気？」

「峰打ちをおいしく頂いただけだ。」

「他に仲間が居たみたいだな。」

「ああ。窓から入ったのが見えた。」

それにしても、なぜ、まゆを狙ったんだ？

俺達は来たばかりで、何かを仕出かした訳じゃない。

こういう場合……

RPGだと、

敵組織が、けし掛けてるんだよなあ。

ただ、そういう場合は主人公達が何らかの秘密を持っていたりするけど、

まさか、香奈を助けに来たことが悪魔側に漏れたのか？
だとしたら……だが。

「誠。明朝出た方が良い」

「ああ。そうだな。」

「なんで、私が……?」

「さあな。解らん。」

ふむ。考えられるのは勘違いなのだが、

あんな傭兵レベルの人たちが、すまん勘違いだった。

なんておちゃらけた事ぬかすとも思えないし。

「まゆが装備揃えておいてくれなきゃ、弾けなかったな。」

拾う暇なかったのか、幸一が弾いた剣が壁に刺さったままだった。

「だな。これ、結構強度のありそうな刀だ。

どちらかって言うと、細身だしレイピアの分類だろうな」

「誠、詳しいね。」

「さすがに名称とかは知らないがその程度なら商人スキルの『目利き』で解るからな」

「どうするの？」

「一応貰っておこう。後で使えるかも」

白くて綺麗な剣レイピアを手に入れた。

朝になつても再度の奇襲は無く、早々に宿をでる。

とりあえず、目的は隣の大陸なんだけど、

橋は落ちてるみたいだから、商業の大陸に行つて、貨物船で行くしかないな。

「隣の大陸なのに………」

「まあまあ。結構な遠回りになるけどそれしかないし。行くしかない」

「んじゃ、まずは、この大陸唯一の船乗り場があるアステカ漁港に行くか」

まゆが買ってくれた世界地図を見る。

どうやら、この大陸はアメリカ大陸と同じくらいのもので………
というか、地球の大陸と形が似てる。

「順調に行けば、4日だつてさ」

「順調………ねえ？」

「目の前に広がる大自然を、ぞろぞろと歩く怪物たちをかわしながらだぜ？」

「だ、大丈夫だよ。きつと。」

様々な不安を抱きつつ、街を出る。

「アイシス、レイピアは？」

「無い。持って行かれた。」

「他にもあるんだろ？」

「馬鹿言っな！あれは、妹の……」

「……そうか。」

「女王だとかどうでも良い。私は追っぞ！」

口調が普通になってる。

本気ってことか。止めても無駄だな。

「あの一味に、「まゆ」と名乗って入り込んでいるんだ。追うのに賛成だ」

「王国は嫌いだ……」

「そうだな。早く終わらせて、元に戻ろう。あの娘に罪は無いが我々の為に死んで貰おう」

「早く、追いましょう。」

誠達が街を出てから数時間後、アイシス達も誠達を追って出て行った。

第34話 『RPGだったら、多いものです。』（後書き）

比較的短い回。

勘違いで殺しましたは洒落になんないぞ？おい。

呪文の詠唱部分考えるの止めようかな（笑
詠唱ネタギリしそう。

読んでくれてありがと。

感想等頂けるとありがたいです。

読者の温かい目。

作者の自己満足。

以上の提供でお送りしています♪

『色々確認？』（前書き）

いやぁ・・・

もうなんか・・・ねえ？

学園とか・・・どこいったのかな？

『色々確認?』

まあ、この異世界編

意外と長くなるかもしれないなあ

とか考えて、様々な説明をしておこうかなあ。

でもね・・・・・・・・

ここで出した設定全て出てくるの？

と言われると、自信持てないんですけどね。

因みに、長くなると言ってるけどそれもまた自信ない。

さてと、～説明～

<大陸>

■サレイ大陸

誠達が、初めから居る大陸。

沢山の王国からなっており、

有名なのは

クラッチ王国

草原と山ばかりという、少々殺風景な大陸

■リーデル大陸

サレイ大陸とは、橋で繋がっていた。

現在は、サレイ大陸と仲が悪く、

絶縁状態。

王国は1つで、
ヴィヴ王国の独裁である。
砂漠に川、山に森。
資源豊かな風に思えるが、数年前から自然環境が死滅し、
森や、川は枯れてしまい、
砂漠大陸とも、言える。

■フウガ大陸

大陸全体を山に囲まれており、
あんまり情報は無い。
山に囲まれているせいで、強風。
突風が多いといわれている。
文明などの存在も不明。

■ヒョウメイ大陸

何を表明するの？とかはいらない突っ込み。
王国はリンメイ王国
周りを海で囲まれており、
更に、山や森など、自然に恵まれた大陸。
ここから様々なところへ輸出されており、
一番裕福である。

■アイスランド

言わずもがな。
その名の通り、氷の世界。
ここに居る魔物は全体陸中一番凶暴らしい。
らしいというのは、行って帰ってきた旅人が居ないので不明慮であ

り、
「我俣言つなら、アイスランドへ置いてくぞ」という脅し文句もある。

因みにここに魔王の城があるのでは？と言われていたり。

まあ、他にもあるんじゃない？

<王国>

■クラッチ

頭首は、まゆみである。

可もなく、不可もなくといった普通の王国。
突然現れた誠達を即座に拘束したり、
なかなか、軍力は高いみたいである。

■ヴィヴ

頭首は知らない。

とりあえず、金を求めると言った感じであり、
そのせいで、自然を破壊してしまった。

大陸にある、街や村に重税を押し付けている。
その為、殆どの人が、サレイ大陸に逃げ込む。
退路を断つ為橋を落とし、

クラッチとも敵対している。

最近、リンメイ王国のあるヒョウメイ大陸を狙っているらしい。

■リンメイ

頭首はリービア王

リービア王は政治的に管理し、

后である、ライナ女王が経済的に管理。

2名ともかなりの手腕であり、自然を保ちつつ、栄えている。

大陸ないにある、街や村に慈善投資をしたり、

国民の声を聞く為と、王達自ら出向く。

その為、国民達からの信頼なども厚い。

ライナ女王が魔物使いという能力を持つ為、

この大陸の魔物は大人しい。

その為、軍備はない。

王国ってこんな少なくていいの？

<登場人物>

■まゆみ

見た目的に、10代。

他の世界のまゆみと同一人物かは不明

クラッチ王国の頭首。

マターリなせいかくだが、

仕事はこなすようで……

普通の王国を保っている

妹に香奈

■香奈

この世界では、まゆみの妹らしく
誘拐されたい。

誰に誘拐されたか？作者に聞かれても困る。

■リービア

まさに国王って感じの人。

温厚で、外交的。

ライナ女王と結婚しており、
娘と息子がいる。

■ライナ

リービア国王の后であり、
経済管理。

温厚で優しく、国民いわく、聖母。

魔物使いのスキルを持つ

■リナ

リービアの娘

リアとは双子であり、

リーナが姉である。

本名はリリーナだが、いつもリーナというので
リリーナは偽名と思われることが多い。

両親に似て、優しく、

国民たちをロリオンに貶めたとか。

ライナと同じく、魔物使い。

■ リア

リービアの息子

リーナの弟。

性格は若干捻くれており、

リーナを虐めることがしばしば。

自分が弟だと言うことに劣等感を感じている。

ライナと同じく、魔物使い

< 職業 >

■ 双剣賢者
ツインソードファイロソフアー

まゆの職業。

賢者の癖に、剣も扱え、体力・攻撃力ともに高く、

もちろん賢者なので魔力等も高い。

全能力がかなり高いチート職

剣術スキル、呪文スキル共に覚える

■ 究極黒騎士
マスターオブダークナイト

幸一の職業

名の通り、騎士。

剣術スキルがメインであり、

双剣賢者のように呪文スキルは殆ど覚えなない。

これも魔力以外はかなり高いチート職

■ 際限無き力
オーバー
スキル

誠の職業

職業が疑問ではあるが余計な詮索は控えるべき。
名の通り、全てのスキル

呪文、剣術、拳術、脚術、忍術、棒術、槍術、弓術……
全てのスキル習得が出来る。

全能力はかなり高く正真正銘チート職である。

もちろんこれ以外にも沢山あるから。

『色々確認?』（後書き）

色々省略しているくせに、まとめ（笑

このあと説明とかするかも・・・・・・?

長くなりそうな気がする・・・・・・

10話程度で終わらせたい・・・・・・多分無理だけど。

読んでくれて有難う。

感想等お待ちしてます♪

第35話 『目覚める悪夢』 (前書き)

なんかもう・・・あれだね。

本来の趣旨とかけ離れちゃった。

まあ、いいかな。マターリいこう♪

第35話 『目覚める悪夢』

「くそ……多いな」

「まゆ！できるか？」

「うん。言った通り、好めないけど、やるしかないから。」
滴れ雨、

雨は大地に降りそそぎ、

大地は雨によって吸穴とかす。

「気をつけなさい。解らないだろうけど。沈むわよ……！」

「は？」

ロストワールド

「失足……！」

まゆが高らかに唱えると、敵の足場が沼のように泥濘、
底なし沼のように、敵を飲み込んでいく。

「今のうち！」

敵の大群の横を抜けて誠達が抜け出す。

毎回思うんだけど……

まゆの使う魔法は消滅系なのか？

闇の中に落したり、泥の中に落したり。

最初の街を出て1日。

魔物の大群との戦闘も3〜4回と多い。

戦闘中に敵が寄ってくるのが問題なんだよな……

結界的なものを使えば良いんだが。

「少し休憩する？」

「そうだな。幸一。休憩するか？」

「ん……そうするか。」

3人で小さな湖のある林に隠れる。

やっぱ、こういうところがあるとRPGって感じるな。

食料になりそうなものを探して歩き回る。

つというか……

この林に魔物が居ないのはなんでだ？

こういう場合は湖が聖なる湖とかなんだよな……

ん？

そんなことを考えていると、

いかにも美味しそうな形の木の実がなる木が、目の前に聳え立っていた。

「あの木の実とか良いな」

誠が木にぶら下がった木の実を剣で切り落とす。
ラフランスに似てるけど……

「それは駄目だよ」

「は？」

「その木の実には毒があるよ」

「そうなのか？」

「私が一緒に探してあげる」

水色の短いポニテ。

誰だこの子？

「あつ。私怪しくないですよ？」

「別に怪しんではいないけど……」

とはいえ。

私の本名を教えるのは不味いかな……？

「リリーナ・ライスフィルです。」

「リリーナさんか、友達に紹介するから来て。」

数種類の木の実を持って集合場所へ向かう。

「あれ？誠……」

まゆが誠を見て口をつむぐ。

「この人も、旅人でさ。食べれる木の実が解るらしいよ」

「ふへえ。よろしくね？私は、まゆ。」

まゆが微笑むと、

「まゆちゃん？！」

リリーナが歡喜の声のような声でまゆの名を呼ぶ。

「へ？なに？！」

「私だよ？私！リリーナだよ！良かった……無事だったんだね？！」

「え？！あの……私を知ってるの？」

「え？あれ？」

「……あれ？」

あ。

人違い？

「まゆって、まゆみちゃんじゃ……」

あらら。

つつ事は、やっぱりあの傭兵的なやつ狙いも

女王であるまゆみちゃんかな。

大方、まゆが名乗った際に勘違いを

じゃなくて……無事だった？

ということとは？

誠が言う前に幸一が口を開く。

「君も狙われているのか？」

幸一が聞くとリリーナが小さく解らないと首を振る。

「まあ、安心して。私達はまゆみちゃんの依頼で妹の香奈ちゃんを

探しているのよ」

「何があつたんだ？」

「解らないの……お母さん達が隠れてって言うから

隠れていた船が沈没して流されて、気づけば漁港に……」

「俺達漁港に向かつてるのに。」

「そうなんですか？案内しましょうか？」

「いやでも君は……」

「不幸中の幸い。香奈ちゃんの事で軍備が強化されているから安心できる。」

貴女達に出会ったのも何かの縁だと思うし、

香奈ちゃんを助ける手伝いもしたいから。」

「まだ何も解ってないけどな……」

「まだ、初心冒険者みたいだし、私が居た方が良いでしょう」

「たははは。キツイお言葉」

でも確かにそうだな……。

「俺は賛成だな。」

「うん。私もいいよ。」

「俺も賛成。RPGだと、4人パーティだし」

「あーるびーじい？」

「「誠！……！！」」

あははは。怖い怖い。

「さて、リリーナちゃんとリリーナちゃんどっちで呼ぶべき？」

「リリーナで良いです。」

「うん。じゃあ、よろしく頼む。」

「はい！」

幸――。

苦しい。苦しいよ……。

「ルシファー。」

――誰？

私のこと……？

薄く目をあけると、広がる世界は部屋ではなく……

「どこ？ここ。」

おぞましい、悪趣味といえるような飾り物が沢山あるところだった。

「やっと目を覚ましたね」

「貴方は誰？！ここはどこなのですか？！」

「いいのですね？」

「ふむ。では、以前搾取したデータを「無理やり」注入してくれ」

「無理やりですか？そうすると、現在の記憶が……………」

「な、なにを？！」

「怖がるな。ルシファア。君を元に戻すだけだ」

体を固定し、頭に器具を装着。

これでいいな……………」

「今から、君に今とは違う記憶を植え付ける。」

「そんな、嫌！」

「悪いけど、拒否権は無い。術後、多少なりと記憶の混乱は起きると思うけどな」

「では。」

研究員が機械を操作し、機械が動き出した。

記憶の混乱。つまり……………」

嫌。

嫌、怖い……………」

「いや、やだよおおおお！」

自然と涙が溢れる……………」

「いやああああああ！幸一いいいいいい！！！！！！！！！！」

香奈の悲鳴が響き渡る部屋を出て行く。

「全く……………裏切りのユダとして送り込んだのに違う男に近づくとはな」

「当たり前です。所詮元天使ですから」

黒髪の少年の後ろに、赤い長髪の少女が現れて苦笑する

「ラハブ・・・俺も元は」

「サタン様は例外です」

「調子が良いものだな。ラハブ」

「アルモン様・・・」

銀の短髪のめがねをかけた青年がサタンの横に現れた。

「アルモン。君は休んでいいのだが・・・」

「そのつもりだがな」

「アルモン、サタン、ゆつくりしよぜ？」

黄色い髪の青年が、アルマデルの前に出てきた。

「アルファリザ。」

「アルファ・・・元よりそのつもりだ。ラハブ。後は頼むぞ？」

「お任せ下さい」

3人の青年が歩いていく。

1人佇む少女がそれを見つめていた
すごい。

思わず、笑みがこぼれる。

サタン様、アルファリザ様、アルモン様が目覚めて、
アリミエル様とサラナナ様、カプティエル様はまだお休み中。
サタン様の下に集う大悪魔。私もいつか、あの高みへ。

まずは、あいつらがしくじったときように、

アイナの処刑準備を整えておくか・・・。

少女が火に包まれて消えた。

第35話 『目覚める悪夢』（後書き）

この大悪魔。

しつかりと文献に載っています。（確か。

いやあ、色々大変です。書くのも♪

読んでくれて有難うございました♪

感想等頂けると嬉しいです。

第36話 『やっと定員です。』 (前書き)

頭痛い……

あれ？愚痴になってる。

書く事無いよ。

第36話 『やつと定員です。』

「そういえば、なんでこの湖周辺は魔物居ないんだ？
湖の力か何か？」

「ああ、それは私のスキルの魔物使いです。」

「魔物使い？」

「はい。私はレベル低いので、低級魔族しか従わせられませんが、
一応周辺の魔物は低級なので来ないようにって言うてあるので」

「それなら、誠も習得してよ」

「うん。暫くすれば習得できる」

「みんなの職業はなんですか？」

「……え」と。

リーナの輝かしい目「俺は勇者、私も勇者という回答。

だがしかし、現実是非情である。

勇者どころか、まともな職業ではない。

どうするか……嘘でも勇者と……

嘘付いても仕方ないか？

そうだな。

自問自答。

回答は正直に。

「俺は、オーバースキル
際限無き力」

誠が言う。

「……」

「え？」

「いや……あの……」

「それって、職業なんですか？」

「知らない………なんか勝手にこうなった」

「私は、ツインソードフィロソファー双剣賢者」

「わぁ凄いです。それって超上級職なんですよ。

攻撃に優れる、双剣職。さらに、魔術に優れた賢者。

その二つが合わさっているので、隙無しですよ!!」

え………何この反応の落差。

俺って、主人公？

「俺は、マスターオブダークナイト究極黒騎士」

「あんまり聞きませんね……。」

ですが、黒騎士というのは少ないですが、魔術の知識を持ち、通常の騎士の数倍以上の力と速さを兼ね備えた近接でのエキスパートですよ。

究極というのは、多分、もう少し能力的に高いのではないでしょう
か」

……俺だけ？

俺だけ意味不明な職業？

なにこれ。

………そういえば。

「この剣に書いてある文字読める？」

「どれですか？」

誠が宿屋で手に入れた白い剣を渡す。
ホーリーレイピア

「柄の部分だよ」

「えっと………ああ。これあれですね。失われた文字ですよ」
ロストスベル

「え？なにそれ。」

「知らないなんて、ずいぶん、田舎の人ですね。

これは、昔の文明文字ですよ。失われてしまって、一般では使いません。

「……なら、戦うしかないと言っ事か。
畜生、負けてゲームオーバーで強制送還。」

「それだけは勘弁してくれよ……」

「みんな！負けられないからな！」

「「もちろん！！」」

ただ、空を飛んでいるから、高く飛び上がったの一撃が必要だ。
でも、やつの羽ばたきで起こる突風の風圧は40〜50kはありそ
うだな……

としたら、まゆの魔力の一撃が必要か……？

俺も、魔法を使うか？いや。

「魔術の弓を生成。魔術の矢……タイプは雷。生成。」

「え……？なんなのそれ」

リーナが驚いて見つめる。

巨大な弓を構え、巨大な矢を持つ。

「でっかく打ち上げる。サンダーアロー……でいいかな？」

台詞的に駄目だったが、

誠が放った雷の矢が、レオダルクの胴体を打ち抜く。

「幸一！飛んで一発たたきれ！！」

「任せろ！」

大きくジャンプした幸一の振り下ろした剣が、

レオダルクの巨大な翼を切りつけ、レオダルクが墜落した。

「……これ以上はやりすぎか。」

「3人とも行くぞ」

「え？殺さないの？」

「何も、殺す必要ないだろ。」

「でも……」

「リーナちゃん。私達はそういうやり方なの。」

この子だって縄張りに近づかれたから怒っただけよ。だから。」

「そうね……。その方が、いいもんね。ごめんなさい。もうここには来ませんので」

リーナ達がレオダルクに一礼し、林を抜け、草原へと出て行った。

「馬車を使つたはずだからな。やつらはもう着いているかもしれん」

「操馬手!! 急ぎなさい!」

「はっはい……………」

……………私のレイピア。

あの時一緒に持つてきとけば……………。

「アイシス。」

「解つてる。そんな余裕無かつたつて。でも……………」

「次会つた時、取り返せば良いだけだ」

「そうね。」

「あと半日で漁港につきます……………」

「急ぎなさい」

「……………そういえば、貴女達さ」

「ん?」

「お金ないの?」

「いや。あるけど……………」

「馬車使えば、すぐだったのに。」

「なんだと?!」

馬車……………あつたのか。

くそつ。

今更戻つても、仕方ないか。

あるよなあこういうの。

急いでクリアしようとして、

逆に、省ける部分省き忘れて、最短クリア出来ないこと……………。

まさに、今の俺達か。

あゝあ。RPGなら、ここら辺で商業馬車が通つて、

ついでに乗せてやるとかあるのになあ。

周りを見渡しても、平原が広がるのみ。

あるのは遠くの山と、敵の巨体の影だけ……

まあ、リーナのおかげで、敵が寄って来ないのは感謝だな。

「でも、貴女達が馬車使わずに来てくれたから、私は皆に会えだし、私1人じゃ、レオダルクに食べられてた。」

「あはは。案外運命かもね。」

「まゆ、幸一、俺、リーナの四人パーティか。」

「やつとメンバー定員か。」

「何の話？」

「馬鹿がうつるから聞かない方が良くいわよ？」

「なに?!」「」

「あははははは。」

お母さんお父さん、リア……みんな無事だよな？

見上げた空は雲ひとつ無い快晴だった……。

第36話 『やつと定員です。』 (後書き)

もう、何が何なんだか。

私もわからない……

やっぱり、38度の……

読んでくれて有難うございました。
感想等頂けるとありがたいです。。

第37話 『悪魔だつて』（前書き）

なんだろうね。

頭がぼくつとする

うんたん ♪ うんたん ♪

第37話 『悪魔だつて』

「あれ？里倉くん、栗崎さん、野村くんはお休み？」

「そうみたいです。朝からいません。」

「……電話貰ってない。さぼりか？！」

でも、栗崎さんすら連絡無しって言うのは……………

「逢引じゃないですか？」

久人が笑う。

「馬鹿言わない！」

「ぐふつ……………」

「でんわ」——「

「千賀子先生、里倉君たち」——「

「え？」

教室の扉が開き、双葉先生が入ってきて聞く。

「それが、来てないんですけれど……………何か？」

「聞きたい事があっただけなので。失礼しました。」

そう言い、居ないのを確認すると足早に去って行った。

「なんか、いつもの双葉先生とちがかったような……………」

「おとぼけてなかったからって、判断するなよ。健」

「はいはい。双葉先生の時は、真面目ですねぇ」

「愛は無限大なんだよぉ！」

「意味解らないから！」

2人のじゃれ合いで騒がしくなるクラス。

しかし1人だけ黙り込み、廊下を見つめていた……………

「先生？」

「え？」

「ホームルームの時間。」

「あ。はい。以上特に連絡——いえ。1、2時間目の数学と保健体育は自習です。以上。」

それだけ言つと、さつさと出て行く。

・・・・・・あれ？

千賀子先生も様子変だつたわ。

何か隠しているのね・・・・・・

「畜生！！！！待ち望んでいた保健がああ！！」

「久人！」

「なんだよ・・・・・・」

「ちよつと。」

健が久人を引きずつて教室を出て行く。

あの3人が、そろつて欠席。

先生は電話もきていないつて言おうとした。

さらに、双葉先生の様子。

そのあとの千賀子先生の様子。

予定していない授業の自習変更。

何かある・・・・・・何か。

面白い何かが！

知的好奇心を刺激されるわ！

「はあ・・・・・・」

あの時の昔の怖い夢。

あの小学生時代。

私は悪魔になつて、由利ちゃんを刺して殺しかけた・・・・・・
いじめが苦で。

今日も見たのに、

でも、前の夢とは違かつた。

2人だけ、登場しなかった。
同じ夢なら、過去を夢で見ていただけのはず。
なのに違う。

出てこなかったのは、

同級生の栗崎まゆちゃん

先生の里倉教諭。

千賀子先生の生徒と同じ名前。

何かつながりが………

「双葉先生」

「え？」

「彼らと連絡がつかないので、家に行くんですけど来ます？」

「いいんですか？」

「自習にしておりますから」

「では、是非。」

………連絡がつかない？

そんな。

「健……？一体。」

「私達も行きます！」

揃って出てきた千賀子先生と双葉先生に健が言う。

「駄目です。授業を——」

「前みたいに行方不明かもしれない！心配なんです！」

半分好奇心だろくに………

「………千賀子先生連れて行きましょう。」

「そうね。」

「やったあ！」

4人が車に乗り込み、誠達の家へ向かった。

「おかしいわね。」

さつきから何度か呼鈴を押しているが、誰も出てこない。
誠は寝てるの？それとも・・・・・・・・..
あっそうだ。

「先生。まゆの家に行きましょう。」

健が怪しい笑みを浮かべて言い、みんなを連れまゆの家へ行く。

「私、まゆの家の合鍵持つてるんですよね。」

ただ、返し忘れてただけなんだけど」

得意げに言っと、鍵を開ける。

まゆの家は父親は仕事、母親は他界しており、
昼間は基本誰も居ない。

「これって不法侵入・・・・・・・・..」

「鍵で開けたから問題無し無し」

笑顔で言い、靴を脱ぐ。

鍵で開ければいいとかそういう問題じゃないだろ。

まゆの了承を得ていない時点ですでに不法侵入なんだよ。

まあ、ここで言うとは絶対面倒な事になりそうだし、

まゆの寝顔を見れるのは男として素晴らしい宝。

それを得る為ならば、不法侵入如き軽く黙認する。

それが男だ！

「ここですよ。」

二階の奥にあるまゆの部屋。

・・・・・・・・良し。

「開け・・・・・・・・ますよ？」

「ノックした方が――」

「起きちゃうから駄目です」

「それは駄目なんじゃ――」

「開ける開ける」

「黙れ久人」

「ぐふっ……」

健のボディブローが久人に決まり、久人撃沈。
そのうちに扉を開ける。

……あれ？

「いない……んですが。」

「どういう事?!」

双葉先生と千賀子先生が部屋へと入っていく。

机の上の鞆。ハンガーにかかった制服。

学校には行っていない。なら……

「んと。みんなこっち。」

健が手招きしたのは、窓。

「どうするの？」

「こっから、まゆは誠の部屋に行ってるんですよ。」

「え？」

「私達もここから誠の部屋へ行きます。」

にやっとな健が笑う。

あいつ楽しんでやがる。

っうか、痛い……。

「な、なんか落ちそう……」

「平気ですよ。」

4人一列、健先頭に屋根の上を歩いていく。

あと少し……

窓は開いており、あっさりと侵入成功。

「もう……。なんか犯罪している気が……」

「千賀子先生。諦めよう」

久人が千賀子先生を宥め、先に行った健と双葉先生を追う。

双葉先生あんまり喋らないし、ぼけないし、転ばないし……

やっぱり少し変だな。

「久人！」

「どうした？」

「1階には誰も居ない。」

「そんな……」

「2階には3部屋。誠の部屋と両親の部屋と……空き部屋」
健が言う。

「誠の部屋は無し、両親の部屋も無し。あとは空き部屋」
久人が言う。

以前、親の部屋にはいらねえよ。って言ってたから省く。
残るはここ。

空き部屋。実際は香奈の部屋になっているが、

久人と健、千賀子先生は知らない。

双葉先生は香奈を知ってはいるが、居候とは知らない。

久人が部屋の扉を開ける。

「「「えっ？」」」

女の子の部屋。

カーテンがピンク色だったりぬいぐるみがあったり。

「空き部屋じゃない……だと?!」

「どういう事？」

「問題は、誠達が居ない！」

「「あつ……」」

「幸一の家に行きましょう！」

健が言い、久人と千賀子先生の2人が部屋を出て行く。
「双葉先生？」

健が聞く。

「私は少し疲れたから休ませて。先にいってて良いわ」

「はい！」

健の足音が外へ出て行く。

・・・・・・・・。。

沈黙。

「あの子たちには見えない・・・・のね。」

双葉先生が呟く。

ベッドに横たわってる女の子。

その子を見守るように、

誠くん、まゆちゃん、幸一くん。

皆ここにいる。

死んでいる訳じゃない。

死んでいるなら、遺体がある。

誰かが非科学で見えなくしただけ。

「誰？」

双葉先生が呟く。

現れたのは金髪の少女・・・・・・・・まゆみ。

「貴女はこのままでいいの？」

まゆみが聞く。

「私は悪魔になった。だから・・・・・・・・」

「なら、尚更でしょ？こっちに来れるのは貴女だけなんだから」

「・・・・・・・・でも。」

「良い？言わせて貰うけれど、貴女はあの時は悪魔だった

あれだけ虐められたりしたら、殺したくもなるでしょうね。

けれど、殺せなかったじゃない。組だってそう。勝手につぶれただけ。

貴女は悪魔になろうとして、なれなかった半悪魔？

違うでしょ？今はそこで、密かに眠る子達と触れ合い囲まれることで、明るくなれた」

「でも。過去は変わらない！」

「ええ、変わる事は無いでしょね。だからこそ、未来を変えるんですよ？」

「けど……」

「私は貴女に悪魔の世界の自分として生み出された。それは必要ないかもしれなかった。

でも、今なら……。今なら。私は貴女の役に立てるの。

お願い。私を利用して、彼らを助けてあげて。

悪魔でも、一度くらい良い事したいのよ。」

「……。まゆみ。」

「どうするの？行くの行かないの？」

「行く。助けに」

「そうこないとね。それじゃ、頑張りなさい。双葉真弓」

「ええ。頑張ってくる」

双葉先生が光に……。消えた。

第37話 『悪魔だつて』（後書き）

はい。

もう正直何がなんだか。

まゆみ正体的なのを明かしてみました。

読んでくれて有難うございます♪

感想等お待ちしてます♪

第38話 『やってみたら出来たのもう一度』（前書き）

サブタイ無視確定ですね。

だって、タイトル思いつかないんだもん。

第38話 『やってみたら出来たのもう一度』

「まゆみ様？」

「……私の白王の装備持って来なさい」

「しかし、あれは合わないと……」

「今の私なら。扱えます。」

真弓が微笑む。

「……」

急に大人びたというか、

姿は変わっておられないというのに……

「大臣。急ぎで」

「かしこまりました。」

大臣が返事をし、兵に伝達に向かった。

「私がいつまでも子供染みて隠れてる。そんな甘い子だとは思わないでね？」

真弓が微笑んでいた。

一方の誠達は……

「漁港まであとどれくらい？」

「あと1日といったところでしょうか」

「戦闘少ないだけましたな」

「うん。気が楽。」

「とはいえ、中級は襲って来るんだよなあ」

誠が横たわった巨人の上で笑う。

「誠！目を覚ます前に行くわよ！」

「へいへい。」

この人たち……。

傭兵とかの類ではないし、王宮兵士でもない。

なのに、超上級職についてる。

普通超上級職の人はもつとがちりしてて、

魔物もばっさばっさ切り倒していくって聞いてたのに。

私くらいの子と男の子……。

しかも、魔物は殺さず、気絶させるだけ。

その上、手加減してるし、装備も一般兵士レベル。

どれだけ強いだよ。

それと……。

里倉誠という人の職業。

オーバー
スキル
実際無き力。

様々な文献を見てきたけれど、聞いた事無い。

もしかしたら、失われた文明の失われたスキルかもしれない。

際限の無い力というのは、全職業の全スキルを習得できるってことなのかも。

だとしたら……彼は神様にだってなれるわ。

「しかし、アレだな。都会を離れた世界も面白いよな」

「誠……楽しいのか？」

「誠。私たちの目的忘れちゃ駄目よ？」

「解ってる。忘れるわけ無いだろ」

「……時折見せる優しさというより、怒り？の表情。

目的は、香奈ちゃんを助ける事って言うってた……。

なのに、なんであんな表情を？

「ねえ。」

「ん？」

「目的って香奈ちゃん救出でしょ？」

「そうだけど……。」

「なら、時折見せる憤怒の表情は何故？」

「そうだな。香奈を奪われたから。俺達は取り戻す為にここに来た」
「ここに来た？他の大陸から？」

「違う世界から。」

まゆがにこつと笑った。

「リーナ。俺達の詮索は問題ないけど、面倒な事になりたくないなら止めとけ」

誠が微笑む。

・・・嘘ではない。

古文書が真実であるなら、この人たちは嘘ではない。

彼らの不思議な強さ。職業、知識の薄さ。
様々な面で納得が行く。

「ほ、本当に異世界人？」

「どうだろうな」

「何よそれ。」

小さく笑う。

何者だとしても、味方。

それだけ解つてれば良いかな。

お母さん達の安否の方が気になるから・・・・・・・・

「ゴアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「うげっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「サーリヴゴーレム?!」

「んで？何それ・・・・・・・・」

定番の一つ目ではなく、2つの目。
紫色の体。

ビル4階くらいの大きさ。

なぜか二刀流の長刀・・・・・・・・。

「上級魔物でもトップクラスのゴーレムです！」

こんな草原にいるなんてありえないのに！」

「嘘お。」

「ゴアアアアア!!!!!!」

振り下ろされた長刀が大地を裂く。

誠が小さく笑う。

あっちゃー。

これは……………

「まともに当たったらお陀仏！掠ってもお陀仏！気をつけろ！」

「言われなくても！」

右手に炎を、左手に炎を……………

混ざり合う両者は、神の炎となりて、

立ちて炎、眠りて悪魔。

業火に焼かれよ。

「スピットフレア！」

まゆの放った真つ赤な炎が敵を包み込む。

「まゆの魔法か……………どうd————げっ?!」

安心できたのは一瞬。

まゆが驚く。

「うそっ?!」

サーリヴゴーレムが振り回す長刀の起こす風が

まゆの魔術の炎を吹き飛ばす。

あれえ？おかしいなあ……………なんでかなあ……………

「なら物理で！」

幸一が切りつける……………が。

鋼の接触音が響く。

「おいおいおい！こいつの体鋼鉄か?!」

「この魔物の特性です！その装甲を打ち抜かなければいけません！」

「この程度の装備じゃ、貫くなんて無理だぞ?!」

「なら、やってみるしかない」

誠が、目を閉じる。

魔力で武具生成。

これって鍛冶屋と魔術師の混合かな?

とりあえず。

「細めだから槍かな。押し込めるし……」

「え?あの――」

「リーナ。集中してるからほっておいて。私達は敵の目を引きつける。いいわね?!」

「はい!」

「おらああああ!」

幸一が連続で切りつける……が。

甲高い音が響く。

うげっ?!

「武器折れたあ!」

幸一が叫ぶ。

「形状は……ゲイボルグだっけ?グングニール?とりあえず、強度は最強。ドリルのように……長さは短め……懐でぶち込む」

誠の正面に青い槍が現れた。

矛先はドリルのように……短めで。

「後は強度だけ。みんな!下がれ!」
誠が叫ぶ。

「よしっ!」

「頼むわよ!」

「………凄い。」

「ゴアアアアアアアアア！！！」

叫びながら、ゴーレムが長刀を振り下ろす。

「でかくてリーチのある武器。それはいいが……懐がから
空きだ」

にやっと笑って心臓部の高さまで飛ぶ。

回転をかけて・
・
・
・
・
・

「うっちぬけええええええええええ！！！！！」

回転させながら、ゴーレムの胸に突き立てる。

折れない・・・これなら！

第38話 『やってみたら出来たのもう一度』（後書き）

なんかもう凄いことになってる。
当初の予定ガン無視。

読んでくれてありがとう。
感想等頂けるとありがたいです。

第39話 『向き不向き。』（前書き）

なんか、書く事が・・・

うんたん うんたん うんたん。

ごめん冗談。

第39話 『向き不向き。』

「これならい——あれ？」
鋭い音。

「へ？」

「あつ……」

槍が折れた？！

「誠！急いで下がって！」

誠が、射程外まで下がる。

「たはは。失敗だね」

「どんだけ固いのよ」

「誠。もう一度作れるか？」

「でも、折れたんですよ？」

「今度は剣で頼む」

「剣？」

「俺の剣術スキルで頑張ってみる」

「解った。それならイメージしやすいのがある。」

「あれか？！」

「おうよ。あれだ。」

二人が笑う

「何なんでしょう？」

「多分……私達の世界の事だよ」

「誠、剣借りるぞ。」

「ああ。」

また3人。

「リーナは下がってるよ？出来るだけ」

「えっ？あつはい・・・」

「私じゃ、能力的に足手まといだもんね・・・
どうすれば？」

「魔物使いつて何が出来ると・・・？」

「えっと・・・イメージしろ・・・」

「RPGの定番・・・最強武器」

「エクスカリバー」

「うまくいけると良いけど」

「さっきのミスの理由は？」

「形と強度だけに拘ったからだ」

「今度は、魔力を込める」

「造形・・・大剣かな？」

「誠が始めた！俺達もいくぞ！」

「はい！」

「スピットフレア！」

「私は・・・」

「剣術スキルその一。断空剣！って定番か？」

「幸一の振り下ろした正面の大地が小さく裂け、それは敵に届く・・・」

「武器を正面に構えた敵がそれを防ぎ、

「魔術の炎は武器を振り回して起きる風で消える」

「やっぱり無理か・・・誠！」

「おっけー！出来た！こんな感じ？」

「誠が赤く輝く剣を掲げる」

「・・・さあ？」

「何でも良いから、貸せ！」

「ほらっ！」

誠が、投げた赤い剣が弧を描きながら幸一の目の前に突き刺さる。

「……………良さそうじゃん」

幸一がにやける。

「幸一！全力で……………叩き切れ！」

「おらああああ！」

剣術スキルその2！

魔神斬り！

大きく振りかぶり、一瞬に力を込めて振り下ろす。

「ゴア————」

巨体が音を立てて、倒れこむ。

「……………やるしか、無かったんだよね？」

「まあな。武器をそろえれば殺さなくて済んだんだろうが……………まゆ。こうするしかなかったんだ」

「……………あれ？」

剣が光になって消え去る。

「仕方ないよ。魔力造形だ。魔力が切れれば消えるさ」

「残念だな」

幸一が呟く。

私、何も出来なかった……………。

「リーナ助かったよ」

「え?! 私は、なにも……………」

「何言ってるんだよ。しっかりと、ここでサポートしてくれただろ？」
誠が軽く頭を突付いて微笑む。

私……………。

「みんな。もうすぐ漁港だよ。急ごう。暗くなる前に」
リーナが笑顔で言う。

私……役に立てたんだよね！

「真弓様?!」

「大臣。私は出ます。」

「お考え直し下さい！」

「いいえ。これは曲げられません。私の影を置いていきます」

真弓が微笑むと、もう1人のまゆみが現れた。

「行くの？」

「ええ。」

「気をつけてね」

「解ってるわ。」

真弓が窓から飛び降りて脱走していく

「まゆみ様……」

「大丈夫。真弓なら平気よ。大臣。悟られないようにね」

「かしこまりました。」

一方……レイヴン達。

「一本前の船で向かっているはずだ。

我々もヒヨウメイ大陸に行き、あいつらを叩く」

「そうやね、あの剣は絶対取り戻す」

「ただ――」

「ん？」

「リンメイ王国は襲撃を受けて壊滅したらしい。」

「なんやて?!」

「あそこの魔物や人は大陸に入ってくる人に厳しくあたるそうだ

最悪戦闘にもなる」

「……そうか。」

「いいのか？」

「あの剣を取り戻す為や、仕方ない」

風で靡く緑色の髪を抑えて海を見つめる．．．．
そこに居るのは、騎士アイシス．．．．
されどその表情は、悲しく．．．海よりも深かった。

第39話 『向き不向き。』 (後書き)

魔神斬りがチートという証明。
できた……。かな？

読んでくれて有難う

感想等、お待ちします。

第40話 『やつぱり？ですよ〜』

「はあ。」

「溜息をつくな幸一」

「まあ、無理ないわよ」

まゆも疲れた表情を浮かべているし、リーナに限っては俺が背負っている。

「仕方ないだろ？」

「けど……」

「ごめんなさい……」

漁港に着いた俺達を出迎えてくれたのは、

美人でもなく、来港100人目でもなく、というかもう何でも良いとりあえず、RPG定番のありがたいお言葉である。

漁港について、「よし、船の乗船券を……」なんて思い、行ったら、「来年までもうでませ〜ん」とか……

そんじゃあ、どうしようか。

街の富豪が「一隻、要らないとか言ってる。」「よし、頂きに行こう。そう、これもまた吉報にはならず。

この富豪がまたふざけたやつで、「その美人どっちかと交換」とかぬかすもんで……。

当然、怒鳴ったがくれるわけも無く。

漁港の西にある洞窟の遙か奥深くの「女神の水晶と交換」というわけ。

そして、現在に至る？ いやいや、まだまだあるんだよ。

あの富豪、「魔物は近づけないんだあ」とか言ってたくせに馬鹿みたいな硬さの敵が群れてるし。

ちつこいの居るけど、このくらいほつとけば――。

とんでもない、一瞬でギガンテスレベルにまで大きくなりやがって更に、変な虫に刺されたリーナが動けなくなるし。

そして現在は水晶の洞窟地下4階だったりする。

「リーナ平気か？」

「う、うん。呼吸とかは問題ないし、体の痺れだけ。」

「そっか。」

ここの魔物は下級と中級の構成らしい。

といってもリーナの見解であり、正式な情報ではない。

当然のごとく、水晶に触れたらダンジョンボス的なのが出てくるに決まっている。

そういえば、RPGだと周りが水晶だから削り取って持ち帰る。

なんてこと出来ないのに、リアル？リアルでいいのか？だと、できる。

これって、金持ちへまっしぐらって感じだよな。

よくここの支配権で争わないかって思うんだがやはり其処は何かがある。

「少し休憩するか？」

「うん。その方が良く」

入り口から戦闘と逃走でここまで来てるし、

誠はリーナちゃん背負いながらだしね……。

それにしても。

「綺麗。」

思わず呟く。

もし敵が居ないとか、こんな平和じゃない意味での冒険じゃないなら。

このまま暫く見上げていたい。

夜空に輝く星のような輝きが、この天井には広がってる。

「そろそろ行くか？」

「お前こそ平気なのか？誠。」

「問題ない。」

「ごめんなさい。私が……」

軽く溜息をつく。

「リーナ。俺は問題ないって言ったんだぞ？」

誠がリーナを背負って立ち上がる。

背中から「わっ？！落ちる？！」なんてきこえたけれど、

何でもかんでも自分のせいにするお馬鹿さんは無視が定石。

「そつえば、まゆ。お前の魔法で床ぶち抜けないの？」

え？だって面倒だし。

正直、省けるところは省きたいじゃん。

「ごめん。戦闘中やってみたけど、無理だった」

まゆが困った笑みを浮かべる。

それ以前に貴女は戦闘中に余裕あるんですね。

と、長生きしたいから間違っても言いません。

「幸一は、魔法使えないの？」

「使えはするけど、ビルドアップ的なだけだよ。」

もうすっかり、現地人。

というか、俺達のレベル？っていうのはどうなってんのかな。

メニユー画面とか無いし。

とりあえず、戦ってる最中とかにキリリッってくるけど……。

「誠！階段」

「ほおーい。」

それで思っただけでさ、ダンジョン長くないかな。

いやさ、今降りたから地下5階なんだけど……。

普通序盤のダンジョンって1、2階じゃないかな。

序盤でいきなり地下5階だろ？

すごいね。うん。

思わずにやけるよ。

魔王城は無限城かな？99階まであったりさ。
だとしたら俺、魔王無視するよ。

まあ、頼まれてないし、する気も無いけど。
けどさ、嫌な予感って当たるものでさ。

意外に、目標を誘拐したのは魔王だった。
なんてことになりそうでさ……。

「ピルルルル」

「何アレ。」

えっと……なんだっけ？

文献に載ってたんだけど……

「待って、今思い出してる」

痺れのせい？思考がうまく纏まらない。

「ピイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

「なんだよ！うつせえな！」

あつ……思い出した。

リンカーインセクト

「あれは共振蟲あやって声を鳴らして……」

「鳴らして？」

「……ピイイイイ」「……」

「仲間を呼び集めます」

初めは1匹だった共振蟲の周りに無数の発光体。
それは全て、共振蟲である。

「に・げ・ろ！」

思考がその言葉にいたるまでコンマもかかってない。
とりあえず、逃げる。

あんな大量の敵相手にしたくない。

「階段だ！降りるぞ！」

全速力で階段を下り、振り返る。

……。

階段の上では聞こえるものの、降りては来ない。

「なんで……かな？」

まゆの不思議そうな声がフロアに響く。

答えは簡単。

「ここが、最後のフロアだからだ。」

水の滴る音と、俺達の息遣い。

それ以外の音は一切無い。

少し離れたところに、周りの水晶なんてただの砂です。

なんて言いたくなるほどの輝きを放つ水晶が浮かんでいた。

「あれですね。下から吹く魔法の風により空中に浮き、その輝きは太陽をも嫉妬すると言われる。女神の水晶」

へえ…… あからさまに凄そうな感じで。

という事はつまり。

「ヒュウウウウウウウ！！！」

風の音とも取れる静かで優しいけれど強い声。

「ですよ〜」

「あははは。」

「定番のボスだな」

「ヒュウウウウウ」

二度目の声と共に、

女神の水晶の奥の泉から、透き通った体を持つ魔物が現れた。

第41話 『仲間になりたそうな目でこちらを見ている』

「んで？アレは何？」

「えっとクリアドラゴンだった気がします。」

「クリアドラゴン？」

「魔法は一切無効。そしてその装甲は例え、ビッグバンでも罅は入らないって。」

「へえ。どうやって倒すの？」

誠が微笑む。

「え？それは……」

無理だろ！

魔法無効化？装甲は、ビッグバンで無傷？

笑えねえ。

いや、むしろ笑うしかな——

「ヒュウウウウウ」

「誠！」

まゆに怒鳴られて横に飛びぬいた瞬間、誠の居た場所に火柱が上がった。

え……？

「あの野郎。」

「無詠唱？」

「うっん。私達には聞こえない周波数なだけ」

「どうすれば。」

「兎に角攻撃だ！」

様々なスキルを持っていても、その中にあったとしても。今は考えながら動くしかない。

けれどもまずは……

僧侶のスキル。

解毒をす——？！

「ちつすまん！」

出来るだけ遠くに、リーナを投げる。

「きやあああ」

「リーナ？！なにしっ？！」

誠の足場が一瞬で崩れ、誠が落ちていく。

これの下？！そんなの……海？！

穴に近づこうとしたまゆの正面に、火柱が上がる。

「なっ……」

「ヒュウウウウ」

クリアドラゴンが一声鳴き穴の中へ消える。

「まゆ！」

「平気！それよりリーナを！」

——誠。

穴を覗くと、暗黒。

まるで宇宙のように光無き世界が眼下に広がっていた。

「誠——！」

……。

叫ぶとこだまが返ってくるだけ。

どうすれば？

下は海？本当に？

花火の要領で、火の魔術を！

「ファイア！」

小さく魔力を込め、穴に打ち込み爆発させる。

……駄目か。

「まゆ。」

幸一が、リーナに肩を貸して近づいてきた。

「誠は？」

まゆの返答を急かすように、リーナが聞く。

「解らない。無事だとは思うく——」

「私のせいだ……私が私がつ?!」

まゆが軽く、はたく。

「まゆ?!」

「貴女、いい加減にして。自分を責めるのは止めたら？」

「ですが——」

「あゝはいはい。私を背負ってなければ避けられたと言っただけだよ？」

そんなの結果じゃない。

誠が反応良ければ、良かったのにとろいせいで、貴女までピンチだったの。

全部、誠が悪い。うん。それ以外ない。異論も却下。いいわね?!」

「は、はい……」

うわつ。誠。お前ドンマイだ。

其処までいう必要もない——いや。

まゆだから……だろうな。

まゆ以上に心配するやつは居ないだろ。

「まゆ。下に降りて見よう」

「え?でも——」

「海だったら泳げば良いさ」

幸一がにやつと笑って飛び降りる。

「私も。痺れが取れたので平気です!」

リーナも同じく。

……誠。

ここまでさせたんだから。

「一回殴らせて貰うから！」

まゆも、飛び込んだ。

「うわって…あれ？」

「幸一！ どうなってるの？」

「体が浮いてます。」

無重力？

宇宙？ とかじゃ。

「まゆ！ リーナ！ っと？」

「ぶつとばされたいか？！」

「冗談だ」

まゆ達が、宙に浮くのではなく、足を地につけると、奥のほうから誠の声が届いた。

「……なにしてるの？」

「え？ いやあ、クリアドラゴンの出産を手伝ってました。」

「「え？」」「

「実は……」

数分前。

「うわっ、やべ」

落ちてる?! 落ちて……落ち?

あれ? 浮いてる…?

えっと……あつ。足場がある?

「普通に着地できるのか」

呟きつつ、奥の部屋へ進んだら…

「ピューイ！」
ん？

小さな（1mくらい）のクリアドラゴンの子供が、リーナにくつつく。

「え？！なつ、なに？！なんですか？！」

「懐いたみたいだな」

というより、一目惚れでもしたんじゃないの？
とは、言わないで置こう。

「懐いた……？」

魔物に好かれるのは魔物使いとしての素質の高さによる。
お母さんは昔そう言ってた。

クリアドラゴンに好かれたの？私。

「ヒュウウウウ」

「……え？」「……」

体が急に浮き、気づくと地上だった。

おう。これがワープアイテムというやつ？

「ヒュウウウウ」

「いやいや。気にすんなって。」

「ピューウウ」

「ヒュウウウ」

「ピューウウ！」

「なんて？」

まゆが、呆れた表情でやり取りを見つめながら聞く。

「私は彼女と行きます。」「本当に行くのか？」「はい！」「って感じたな」

「言葉解るの？！」

「一応、魔物使いスキルとかの中に入ってる。」

なんて便利な……っていうかコレで良いの？世界は。

「ヒュウウイ！」

一声鳴くと、大人のクリアドラゴンが消える。

「えっと「助けが必要ならいつでも呼べ。私はいつも君の傍に」だ
そうだ」

あの短い鳴き声の中にそれだけの言葉が？！

魔物って凄い。

「ピュイピュイ」

「うん。よろしくね？アドラ！」

「アドラ？」

「この子の名前。クリアドラゴンの真ん中を取ったの」
「なるほど。」

「さてと、女神の水晶も手に入れたし、行くか」

「うん！」

いつ手に入れた？とか愚問だからな？

そういうもんなんだよ。

第42話 『どつせ、遠回りするんです』

「さて、漁港は其処なんだが、アドラをどつする？」

「アドラはかく——」

「ピユイ？」

「うん。隠れてて欲しいの」

「ピユイルル」

「姿を消せるって」

「ああ。頼む」

「ピユイユイ」

アドラが、見えなくなる。

「おおっ 凄いな」

「えへへ。アドラ暫くそうしててね」

クリアドラゴンの特性なのかな……

文献では、強さもそうだけれど、見つからない事でも有名だった。こうやって、姿を隠す事で人間の手から逃れてたのね。気性が荒いつていうのは、間違いなのかも。

「さて！これでいいな？」

誠が、富豪に女神の水晶を差し出す。

「これは……」

「船と交換。でいいんだよな？」

「……あんたらの目的は何だ？」

急に張り詰める空気。

富豪の鋭い眼光が、誠達を捕らえていた。

「女神の水晶は王国兵士数千人で採りに行っても

1人として帰る事が出来ないほどの代物。

それを全員で、半日で戻つ――」

「言つて置くが。命が惜しければ余計な詮索はしない方が良いぞ」
幸一が怪しい笑みを浮かべる。

「ふむ。ならば止めておこう。」

「ふふ。ごめんなさい。船有難うございます」

「女神の水晶も君らが持っていていけ」

「「「「は？」「」「」」

富豪が笑う。

「君らの力量と度胸を知りたかった。
海を自力で渡るといふことは無謀なんだよ。」

「何故、そんな事を？」

「私の船で死なれては困る。では駄目か？」

「そうか。助かった。船。ありがたく頂くよ。」

「まあ、気を付けたまへよ」

「ああ。」

誠達が船着場へ向かう。

「まったく……」

誠が富豪の家を見上げて微笑む。

「どうしたの？」

「別に？手助けしないって行つたのにな。」

「え？」

「いや……。さて、船も手に入つたし。直接行こうか」

「……？」

「どういふこと？」

船に乗る誠達を上から見つめる富豪。

「本当によろしいので？」

「別に良いんだよ。私は使わんからな」

「そうですか。楽しそうですね。マイラー卿」

「いや。あいつらが、滑稽なだけだよ。」

「そうですか。」

私にできる事は、この程度。

まあ、頑張れ。

富豪が小さく笑った。

一方船の上では。

「えっと……誰が操縦するの？」

「「「え？！」「」」

小さな問題が発生していた。

暫くの後……。

「誠！」

「解ってる！」

畜生。

ここまで酷いとは。

「リーナ！」

「はい！アドラー！パージショット！」

アドラの口から、透明の魔砲が船上の敵を吹き飛ばす。

唸れ水流。走れ水流。

全てを飲み込め！

「アクアショット！」

海から水柱が上がり、敵を飲み込む。

まさか、ここまで敵が多いとは……

アドラが居なかったら3人で対処。

なるほど、RPGみたいに船止めるわけにもいかないからな。

荒ぶる風よ。

全てを吹き飛ばせ！

「マジウインド！」

「まゆ！風は止めてくれ。」

「ごめん！つい……」

「幸一！お願い！」

まゆが叫ぶ。

はいはい……

「何匹いけるか解らないけど……剣術スキル3！」

横一線！

幸一が大きく横に切り裂く。

「5匹持っていった！頼む！」

「アドラ！やっちゃえ！」

「ピュウウウウウウウイ！！！！！！！！！！」

アドラの咆哮が天高く響き、

気圧された魔物たちが逃げていく。

「やった！」

リーナが喜んで跳ねる。

「何とか抜けたな」

「そうね……」

全員が小さく溜息をつく。

実に幸先の良いスタートだった。

まず漁港出る前に、誰が操舵するんだ？ってことになり……

当然、免許？何それ美味しいの？の世界だから誰でも良いんだけど、

沈めたらどうしようの重圧が大きすぎて、決まらず。
じゃんけんで決めて、「よし！さあ行こう」と、張り切って出発し
た途端、

魔物の群れに突っ込んでしまうというトラブル。

どうやら、魔物は特定のルートを通れば出てこないらしいんだけど、
そんなの解るわけ無いから……ね？

俺が操舵しているから、戦闘に参加は出来ない。

止まって戦う？

おいおい。さっき言ったけど、止まれば無限に出て来るんだよ。

だから、4人パ・ティだと、1人欠けて3人になるわけ。

しかし、リーナは魔法・物理ともに苦手で、幸一とまゆだけになり
そうだった

けれど！なんと！アドラがリーナの指示のもと戦ってくれてさ。

いやあ、助かった。

それで今は、隣の大陸に入ろうと思ったんだけど……

「……何これ……」「……」

全員が口をそろえて言う。

ありえない。

大陸を囲むように、夥しい数の軍艦。

入れないじゃないですか。

っていう感じに陥ってしまうという。

「で？どうしようか？」

「それじゃ、予定通り、リンメイに行きましょう？」

「え？」

「ん？どうしたの？」

「いえ……その。リンメイ王国へ行くのですか？」

少しいつもと調子の違うリーナ。

けれど、誰もそれに気づかず幸一が答える。

「この大陸に入る為に商業船に乗ろうかと思ってたんだ。

この船で入れれば良いけど、

この調子だと、商業船くらいしか通してくれそうにないし。」

「当初の予定通り、リンメイから出る商業船に乗ろうかと思って思ってるのよ」

幸一の言葉にまゆが付け加える。

リンメイ王国。

お父さん。お母さん。リア。

「んじゃ、止まってるのもあれだし。い——」

誠が振り返った瞬間、船の前方の海が水しぶきを上げた。

「な?! え?!」

遠方……無数の軍艦からの砲撃の野太い音。

「おいおいおい! 誠! 右90度旋回! ヒョウメイ大陸に向かえ!」

幸一の誘導で操作し、暫く進む。

「どうやら……追う気は無いみたいですね」

リーナがほっと胸を撫で下ろす。

いきなり攻撃してきやがって。

警戒しすぎだろ。

何かあったのか?

「誠。大陸……え?」

まゆが驚いてあるものを指差し、全員の視線が其処へ行く。

「まじかよ!」

視線の先にあるのは、半壊し煙を上げる城。

「誠。とりあえず。」

幸一が辛そうに言う。

そうだな。大陸に上がらないと。

そんな……どうして？

お父さん……お母さん……リア！
無事だよな？！無事だよな！

「リーナ？どうしたの？」

見上げると、心配そうなまゆの表情。

「ごめんなさい。なんでもないです。客室で休ませてください」
そういうと、リーナは返答を待たずに中へ入っていった。

……。

暫くして、いまだに船は海に浮かんでいた。

「どう思う？」

「襲撃したのは、あの隣大陸ではないと思う。

そうだと、あの厳戒態勢も納得が行く」

「けど、復讐で来るかもしれないって考えて……。」

「それもあるか——いや。だとしたら、逆に手招きしないか？

すでに勝っているんだ。あそこまでの警戒は必要ないと踏んで、通常警戒のはずだ。」

「だが。それなら、一体どこが？」

幸一が、2人の会話に入り込む。

そうなんだよなあ……。

あつ。

「魔王軍じゃね？」

「「はい？」」

あれ？何この反応。

「なんで魔王軍がせめ——そうか！あそこは物資の宝庫！
あそこを抑えれば物資が無くなる！」

幸一がいきり立って大声で言う。
うーん。

まあ。妥当なところか。
そんな事はどうでも良いけど。

「あの城からも砲撃が飛んできたんですけど」
誠が少々怒った声で言う。
そう。

実は、私たちが城を目視して、近づいていったらまさかの砲撃。
危うくマストに直撃しそうだった。

というわけで、色々と話してただけ。

私達は詳しくないから、リーナちゃんがいるまで安全海域で船を停留させてるのよ。

それで今になってるんだけど。

「どうしたもんかなあ……」

「そうねえ……」

机に突っ伏してだらける3人。

敵の海域にわざとつっこんで憂さ晴らし。という作戦も考えたりもしていた。

そんなところに。

「ん？」

ドアが勢い良く開かれ入ってきたのはリーナ。

そして、

「リンメイの真逆に漁港があるんです。其処に行きましょう」

「へ？」

「私が案内しますから、船を動かしてください！」

「ん。ああ。」

用件を伝え、誠を引っ張って操舵室へと消え、

「さて……戦闘準備しよ。幸一」

「そうだな。」

幸一とまゆが、甲板へと上がっていった。

第43話 『身近な敵』

「ここ？」

頑張って大陸の周りを一周して、漁港を見つけ、

「はい。」

けれど、入ろうとした瞬間、町の人たちが武器を持ち待ち構えていた。

「何だお前らは！今、船を入国させる事は——」

「ちよちよちよ？！撃たないで！」

まゆが必死に手を振る。

「今すぐ引き返せ！さもなくば——」

「みんな！大丈夫。私の仲間だから！」

リーナが、甲板の先に立つて微笑む。

「……リーナ？！」「……」

町民達が歓喜の声を上げて喜ぶ。

リーナ？

「……えっ？」「……」

どうゆうこと……？

俺達は、

互いに顔を見合わせ、首を傾げていた。

「私。リンメイ王国の姫君なのよ。」

「はあ？」

などと、言われても先刻通りの反応しか出来ない。
格別驚いたわけでもないけれど、

一緒に居た人が某国の姫様。

なんてのはRPGでよくあること……だっけ？
今はそんなことより。

「なら、リンメイに何が？」

「私は会った時行った通り、船に隠れてたら流されたので……」

「攻めて来たんです。魔王が。」

「……え？」「」

少し前に悪ふざけで言った予測の的中。

まじかよ。

どうして攻めたかが、解らない。

物資関連？本当に？

考えれば考えるほど、複雑になっていく。

ん？待てよ？

「物資じゃない！」

「きやつ？！」

誠の声にリーナが驚く。

「急に何？！」

リーナが仕返しといわんばかりの声で怒鳴る。

「狙いだ。敵の狙いは、王国を滅ぼす事。」

「……え？」「」

まゆと幸一もリーナと共に驚いて小さく声を上げた。

「単純だよ。まゆ。」

「へ？」

「まゆも狙われたら？それは、クラッチのまゆみちゃんが、まゆと名乗っているとか勘違いされた結果だ。」

「つうことは、全ての王国を狙っているという事か」

幸一が、誠の言葉に最後を付け足す。

「そっか！それで、あの隣も軍艦が。」

「そういうことだ」

誠がにやつと笑う。

けれど……。

「だからってどうしようもないのよね」

まゆの正直な一言が、

ちよつとだけ得意げになっていたりした俺の言葉を見事に打ち貫いて粉々にした。

俺は、その粉々になった心をかき集める作業に入る。

「誠？」

まゆの心配そうな声。

なんか用ですか？

貴女のせいで俺の心が砕け散ったというのに。

そんな心配そうな表情されると、余計に悲しくなります。

なんてふざけている時間を取らせてくれるほど、敵は優しくなかった。

「敵襲だ！」

つという町民の声がここまで届いたのだ。

いつの間に戦闘までのイベント起こしたんだか……

少し、チュートリアル見させてくれないかな。

けれどここには、スタートボタンもセレクトもAもBも……

というかそれ以前にコントローラーなんて存在していない。

これが、バーチャルリアティーの真髄である。

とはいえ、これは現実……で良いのかは定かではないが、

とりあえず、殺されるという死が存在する。

というわけで、そろそろ現実逃避を終わらせようと鋼の剣を握る。

「まゆ！幸一！行くぞ！」

面倒だけれど、ここは一つ……。

「私も——」

「リーナお前は町民を頼む」

誠が微笑んで走っていく。

「あつ——」

「リーナ様こちらです！」

誠達の背中を見送ることなく、私は隠れ家へと引つ張られた。
デジャヴユ……。

お母さん達が——。

「リーナ。貴女はここにいなさい。出てきては駄目よ」

「おかあさ——」

私の言葉を聞く前に、お母さんは扉を閉めた。

遠ざかっていくお母さんの足音を聞くしかなかった。

暫くして、隠れてた船が揺れたと思ったら水の跳ねる着水音。

それで私は流されて……。

今の状況と一部だけれど、酷似してる。

どうすれば良い？ 隠れている事だけしか出来ない？

違うよね？ 私だって……戦えるよね。

「リーナ様?!」

「大丈夫——」

町民に微笑み、

隠れ家の扉を開け放つ。

「私がみんなを守るから。アドラ！」

「ピュウウイ——」

リーナの声に呼応するようにガラスのように透き通った声が響く

「行くよ。アドラ。私達も隠れてるだけなんて嫌だものね！」

半透明のクリアドラゴン—アドラが、リーナの正面に現れ、

リーナと共に、町の奥へと向かって行った。

「……こちら。α失敗」

隠れ家の男が無線を取り出す。

「β了解、作戦に移る」

無線が切れる頃、隠れ家にいた人々は全員倒れていた。

一方の誠達は。

「よし、まゆ！幸一！戻るぞ」

誠が、敵襲が来ているらしい北門の道から戻っていく

「何言って……」

「ここの町民怪しいなあって。

最初呼んだ時は単なる知り合いで良いけれど、

流石に、姫君には使わないだろうからさ」

「どうということよ。」

まゆと幸一が追いかけて、誠に聞く。

「つまりだ。姫様を呼捨てにする町民がどこにいるんだっての」

「あつ……そういえば。」

「そういうこと。この漁港自体。落ちている可能性が高い」

誠が走る速度を上げる。

けれど……

隠れ家についても、リーナは居らず、

「あら。リーナさん何しちゃってるかな」

「誠。みんな眠ってるみたい。」

リーナに魔術スキルはない。

アドラも攻撃は出来てもこういう事は出来ない。

とすれば。

「敵の仕業だな」

幸一が呟く。

「どこ行つたのかな……」

まゆが心配そうな表情を浮かべて、隠れ家を出て行く。

こういう追跡とかで使えるスキルは……

あると言えはあるんだけど、人に使うことに抵抗があるんだよなあ。

「誠、何とか追えない？」

「まあ、あるにはある。けど、変な目で見るなよ？」

「？」

「盗賊スキル、嗅覚！」

えっと……

雨も風も、無い。

一時的に犬以上の嗅覚を手に入れられる。

これなら。

「なんか……」

「追うぞ！」

「え、ええ。」

誠達が、隠れ家を飛び出していく。

第44話 『動く女王』

「聞いてはいたけど、橋は粉々なのね。」

誠達がリーナを追いかけて、隠れ家を飛び出したのと同じ頃。

真弓は、サレイ大陸西端にあるイリア海峡にかかるイリアブリッジ前に居た。

イリアブリッジは、ヴィヴ王国が、リーデル大陸からサレイ大陸へと、人々が逃げないように落としたと言われている。

「私の記憶の中にあればいいのだけれど……」
失われた記録。

その中に眠る遡りの魔法。

時の摂理に逆らうそれは禁忌とされた。

それは今も、時空移動として逃げている。

けれど、それはとても単純化された魔法だから、

自分だけしか対象に出来ない。

記録に残る、基礎の複雑な方を使えば自分以外を対象に出来る

失われた文字を言語化した呪文。

使えるかどうか解らないけれど……

ひどえ つかりたち

とぎさりし すき

すきはわれらを とすませ

おきはわれらを としもどす

ひちびけ みかり

真弓が静かに目を閉じ、右手を崩壊した橋に向ける。

「タイムリープ」

静かな風のような声が、聞こえたかと思うと
橋が光に包まれ、一瞬で崩壊前の姿に戻った。

「何とかできたわね・・・」

あとは、この橋が壊れないように守護魔方陣を。

汝に星の守りあらん事を。

橋に向けて静かに唱える。

これでいい。

「まゆみ。王国をよろしく。誠君たちは無事・・・よね？」

できたら、悪魔達を引きつけておいて欲しいかな」

はるか遠くに聳える自分の城に。

はるか遠くにいる誠達に呟くと、橋を渡っていく。

さて、私の記憶が正しければここから東端にヴィヴ王国。

話通りなら、戦争状態——香奈ちゃんがいるとしたらここかしら
ね。

でも……

「ルバアアアアア！」

正面には巨大な影が立ちはだかっていた。

「お疲れ様」

真弓が小さく言うと、その巨大な魔物が音を立てて倒れた。

このくらいの中級なら楽に倒せる。

でもなんで、魔物達は荒れているのかしら。

この世界の私の記憶を貰っているとはいえ、原因がわからない。

ううん。

もしかしたら、悪魔達の仕業。

ここは悪魔達の作り上げた世界。

いわば、地獄。

彼らはこここの管理者なのだから、どこをどう弄る事も可能。

普通の村人を敵キャラにしたり、
大人しい魔物を凶暴にしたり。

私たちのようなイレギュラー以外は全て勝手に再構成されてしまう。
まるでゲーム。

悪魔は遊びが好き。

恐ろしく残忍な……ね。

だとしたら、私の王国を放って置くのも説明がつく。

対抗大陸。

そういう感じで嘲笑っているんでしょうね。

いつでも簡単に壊せるのに。

想定でいくと、

ここも悪魔の手に落ちてるはず。

誰かは知らないけれど、

出なければ、上級モンスターがうろちよろしてる筈が無い。

真弓の目の前に広がる大陸を大小様々な魔物達が歩いたり、飛んだりしていた。

とてつもなく、強大なオーラを放ちながら――。

「数を相手にするのは嫌ね。隠れながら行こうかしら」

そう呟くと、魔法で気配を消し、魔物達の間を抜けていった。

第45話 『拉致』

「アドラ！」

「ピュイイイイ」

リーナが立ち止まり、アドラを止める。

「まさか、クリアドラゴンを手なずける力があるなんて。感服いたしましたわ」

茶髪の長い髪を靡かせて少女のような人が、黒い服に身を包み、忽然と現れた。

「誰?!」

リーナが怒鳴る。

「あら、何で怒っているの?」

「貴女が敵だからよ!」

「へえ、じゃあ……」

少女が微笑むと、急に束縛感に襲われて倒れこむ。

「な、なに?!」

リーナは縛られていた。

「ふふふ。残念だけど町の人も敵なのよね」

「え?」

リーナに巻きついた縄の先を、左右の建物の影に隠れた町の人が握っていた。

なんで?

「なんで? 貴女はそう思うだろうけれど簡単よ。だって、私達はこの大陸全土を支配したのだから」

茶髪の女が盛大に笑う。

「アドラ！ おねg——」

「させるわけないでしょう？」

目の前にいた女が消えた瞬間、左の家にアドラが吹き飛ばされ、ぶつかる。

「あれ？ 噂より弱いわね。まあ、当然かしら。私が強いんだものね」

「アドラア！」

「あらあらあら！ 泣くの泣いちゃうの？ あはは。弱い子なのねえ。まあ、隠れて震えてることしか出来なかったんだものね」

つ……

「私だつてたたk——」

立ち上がった瞬間、紐を引かれ、地面に背中を強打する。

痛つ……でも、でも！！

「うあああああ！！」

もう一度立ち上がり、紐を引かれながらも踏ん張って耐える。

「あゝあ。頑張ってるね。でも、そういう人。嫌いなよね」

数メートルの距離を一瞬で詰められ、お腹に違和感を感じた瞬間、体がくの字に曲がって後ろに数メートル飛ばされ倒れこんだ。

「ぐつ……おえ……あぐつはあはあ……う……う……」

朦朧としながら立ち上がろうとした瞬間、目の前が真っ暗になり、うつ伏せに倒れこんだ。

「……全くさつさと諦めればいいのに。馬鹿な子ね」

「引き上げましょ」

「了解」

紐を握っていた人たちが黒い毛に覆われた何かに変わり、空へ飛んでいく。

「コイツは放って置いてもいいわよね。勇者様へ助けて」
ふざけて言い、苦笑する。

「待っててあげるわ。城でね。だから頑張って追いかけて来なさいよ。私の手で殺してあげるから、ね？ 幸一」

そういうと少女が消え、

丁度、誠たちが辿り着いた。

「アドラ?!」

誠が呼ぶと、力なく起き上がってまた倒れこんだ。

「まゆ。治療頼む」

「ええ、解ったわ」

……死んでは無いけど相当な深手を？

クリアドラゴンはい前説明どおり、ビッグバンでも傷一つつかない
装甲であり、

子供であっても、隕石衝突レベルなら余裕で無傷。

それが、脇腹の装甲を打ち碎かれ、出血までしていた。

「何があつたんだ？ それに……」

幸一が言葉を止め、地面に落ちていた手紙らしきものを誠に渡す。
「なんて書いてある？」

「リーナちゃん。お持ち帰りします。返して欲しいのでしたら、リ
ンメイ王国に乗り込んでください。頑張つてね」>

誠が紙を握り締めて剣を一振りすると、横の建物が真っ二つに裂け
た。

「ふざけやがって……」

「ピュウウウウウイ」

「アドラ……」

「完全に治したわよ」

まゆが微笑む。

「敵をぶっ飛ばしに行くぞ!!」

誠が怒鳴ると、2人と1匹が高らかに声を上げた。

リンメイ王国

「ただいまあ」

「ふん。調子に乗るな女。貴様は新入りなんだからな」

「はいはい。まあ、任務はきっちり終わらせただし。ほら」

少女の二倍ほどの大きさの男にリーナを渡し、笑う。

男は少女を睨むと、部屋を出て地下へと降りていった。

何が新入りよ。

アンタの方が低レベルの魔族の癖に。

「人が素性を隠して下手に出てあげたらこうなる。もういっそ、ぶっ殺してあげようかしら」

「それは勘弁願いたい」

「アルモン？　だってアイツ……」

「それは解るが、君は戻ったばかりなんだ。休んどきたいだろう？」
アルモンが笑う

「そうね、ええ。あの人たちが来るまで暇だし。寝るわ」

少女はそう言い、部屋を出て行った。

「完全にこちら側の人間になった……と見てもよさそうだ」

アルモンが不敵な笑みを浮かべると、黒い光に包まれて、消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4620r/>

俺は神様代行人

2011年5月1日22時05分発行